Boxoft Image To PDF Demo. Purchase from www.Boxoft.com to remove the watermark

Scanned by Melora for History of Hyrule

historyofhyrule.com
melorasworld@gmail.com

Hey everyone! I'd personally be really happy to see you make scanlations or take portions of this and make fun things and posts with it. The only things I ask are:

1. Try to link back to **historyofhyrule.com**, somewhere, somehow, for credit. This is so people can find more info and other works, reach me if they have questions, or want to contribute other content. It’s actually how I’ve found out about so many of these things and been able to get them to you in turn.

2: Please don’t just re-upload the whole set somewhere else. This is in case it's re-released officially so I, and my site, don't come into conflict with any publishers or artists for making scans. (Or, if you do use the whole set, because you've made scanlations, just don’t use them commercially and take the full set of my scanned images down if you ever hear about a re-release.) In the 20 years I've been doing this I have never once left scans up if something comes back into print again. I only do the scanning work I do because, as an enthusiast, I don't want something that is actually out of print and rare to be lost forever.

Thank you for understanding!
-Melora

双葉文庫

ファミコン冒険ゲームブック

リンクの冒険／魔界からの逆襲

草野直樹／上原尚子／黒トレス

双葉社

Link's Adventurous Quest; A Counterattack from Darkness
by Studio Hard Co., Ltd.
and Naoki Kusano, ShoukoUehara, Kurotoress
Copyright©1987 Studio Hard Co., Ltd.
Illustrations by Noboru Kiritachi
Character and Basic Licenser©1987Nintendo
First Published by Futaba-sha Books Co., Ltd.
3–28 Higashi–Gokencho, Shinjuku, Tokyo, Japan

リンクの冒険／魔界からの逆襲

CONTENTS

プロローグ……4

ゲームの進め方……7

ゲーム……14

エピローグ……281

ハイラルマップ……283

レベルチェック表……284

行動記録紙……285

プロローグ

闇。すべての形のあるものを無にしてしまう漆黒の闇。

「わしは憎い……貴様だけは、何度殺してもあきたらん……」呪詛の声がひびく。声の主は、ぼくが倒したはずの大魔王ガノンだった。

ガノンは、何事か呪文を唱えた。とたんにその手の先から、白い霧のようなものがほとばしる。霧は虚空を切り裂き、ハイラル目ざして飛んでいった……。

「もう、こんな所で居眠りなんかして。風邪ひくわよ！」

ゼルダ姫の声に、ぼくははっと目が覚めた。夢……夢だったのか。それにしてもいやな夢だ。不吉な予感がする……。

ぼくは姫と連れ立って、城の中庭から城中へ入ろうとした。その時……。

ぼくと姫のまわりに、白い霧がたちこめた。いや、霧なんてものじゃない。すべてが白一色にぬりつぶされている。これは……白い闇だ！

ふたりはあっという間に闇の中へ吸いこまれ、体の平衡を失った。コマのように回りながら、落下していく感覚だけが感じられる。

プロローグ

「姫、ぼくの手につかまって！」
同じように白い闇の中でもがく姫のほうに向かい、懸命(けんめい)に手を伸ばす。が、その時、姫の姿がフッと消えてしまった。同時に、ガノンの声がきこえてくる。
「ハハハ……ひさしぶりだな、リンク。貴様もよもやわしを忘れてはおるまい」
「ガノン！　おまえはいったい何をたくらんでいるんだ!!」
「なに、ちょっとしたゲームを貴様にやってほしいだけだ。わしが復活するための人柱(ひとばしら)としてな……」
復活!?　トライフォースが三つそろった今、ガノン復活の方法はないはずだ!!
「貴様は今、時間跳躍(タイムリープ)している。やがて、わしがまだ魔界の王として君臨(くんりん)していた時代にたどりつくだろう。わしは姫を連れ、ひと足先にその時代へ行っておる。助けたければ、死の谷の大神殿まで来い！　ただし、わしのかわいい魔物たちに勝てればの話だがな……」
ようやく事態がのみこめてきた。ヤツは、ゼルダ姫をおとりにぼくを過去へおびきよせ暗殺(あんさつ)しようとしているのだ！
「そのとおりだ」ぼくの思惑(おもわく)を知ったのか、ガノンは言葉を続けた。
「過去にさかのぼって貴様を消せば、わしが倒されることもない。そうすれば、今にもどってわしが復活できるというわけだ。今度こそ、貴様に地獄(じごく)を味わわせてやる！」
白い闇を抜けると、ぼくは数百年前の北の城の前に立っていた。

城中に入り、当時の国王を訪ねる。国王は最初、ぼくの話を信じていなかったが、ぼくの左手に浮き出した王国の紋章を見て、ぼくがトライフォースの伝承者であることを納得してくれたようだ。

国王の話によると、死の谷の大神殿には結界が張られており、いきなり行ってもムダだという。結界を解くためには、ハイラルの辺境地域にある三つの神殿の守護神と戦い、聖なる品を手に入れなければならない。

「ガノンも、当然そのことを知っているはず。神殿の中にも、多くの魔物が潜入していることじゃろう。それでも、そなたが姫を助けにいくというならば……」国王は警備兵に命じ、ひと組の盾と剣を持ってこさせた。

これは……マジカルソードとマジカルシールドだ。こんな昔から王家にあったとは!!

これさえあれば、武器の心配はない。ぼくの体に闘志があふれてきた。

さらに、国王はハイラルの地図を授けてくれた。（地図は、283ページにあります）

「必ず生きて帰ってこい。わしに言えるのはそれだけじゃ……」

国王の励ましを背に、ぼくは城を出て歩き始めた。姫を奪い返し、ハイラルから邪悪な者どもを一掃するために……。

⇩1へ

ゲームの進め方

さあ新たな旅の始まりです。あなたはリンクとなり、ゼルダ姫を救出するための冒険へ出発するのです。

　このゲームブックでは、読者の皆さんのために様々な結末が用意されています。ハッピーエンドにたどりつける確率はごくわずか。大半は、旅の途中、敵にやられ死んでしまうなど、ゼルダ姫を救出できないままに終わってしまうでしょう。あなたの運命を左右する分かれ道は各項目の最後にあります。その方法は単純なルート選択であったり、アイテムやポイントによる振り分けであったりとさまざまです。そのつど指示に従って、自分の進むべき道を選択していきましょう。

●アイテムリスト

　ゲームの途中、手に入れたものは286ページのアイテムリストにチェックしていきます。アイテムには人からももらうもの、魔物を倒して入手するものがあります。ゲーム中アイテムの有無によって進む道が決定されることもしばしばあります。記入もれのないよう、常にアイテムリスト

図１

をチェックしながら進んでいきましょう。また、選ぶルートによっては同じ場所を二度通り、アイテムが何度も取れることがありますが、取っても意味はありません。無視して次へ進みましょう。（図1参照）

●バトルについて

ゲームをはじめる前に、バトルの方法について説明しましょう。

まず、最初にあなたのバトルポイントを決めます。このポイントは、ゲーム中に出会う様々な敵との戦闘の際に使います。285ページにあるバトルポイント表のA～J欄に、0～9までの数字を入れます。続き番号でも、バラバラでもかまいません。ただし同じ数字は二度使わないよう注意して下さい。（図2参照）

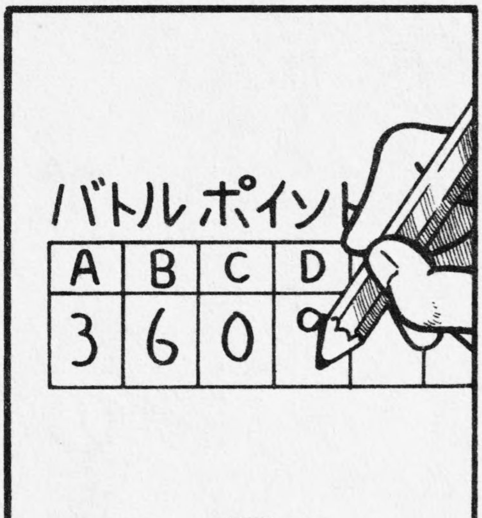


図2

敵に攻撃をしかけられた場合は、その時に応じて戦うか逃げるかを決めなければなりません。また戦う方法も魔法で戦う場合と剣で戦う場合とがあります。ここでは、剣で戦う場合を説明します。

剣を使って戦う場合、その勝敗はバトルポイントによって決められます。戦う場面では項目ごとに敵は数字で、リンクはアルファベットでポイントが表わされています。

あなたは285ページのバトルポイント表で指定のアルファベットの欄を見ます。敵とリンク、ポイントの大きい

ゲームの進め方

方が勝ち、小さいほうが負けとなるわけです。
たとえばリンクが(E)、敵が(2)だったとします。バトルポイント表のE欄を見て、3以上ならばあなたの勝ちになります。
両者のポイントが同点だった場合はバトルポイント表の次の欄でもう一度勝負します。Aの次はB、Bの次はC……ときて、Jの次はAにもどって勝負します。
続いて、魔法で戦う場合です。ゲーム途中(とちゅう)で、あなたは4種類の魔法を手に入れることができます。
ただしバトルの際、魔法を使うという選択があっても、その魔法を教えてもらっていなければ、その項目を選択することはできません。
たとえば敵とのバトルの際、サンダーの魔法を使う、ファイアの魔法を使う、剣で戦う、の3種類の選択があったとします。
その時、あなたがまだ、ファイアの魔法もサンダーの魔法も持っていなかったとしたら、剣で戦うという項目を選択することになるわけです。

●レベルチェック表

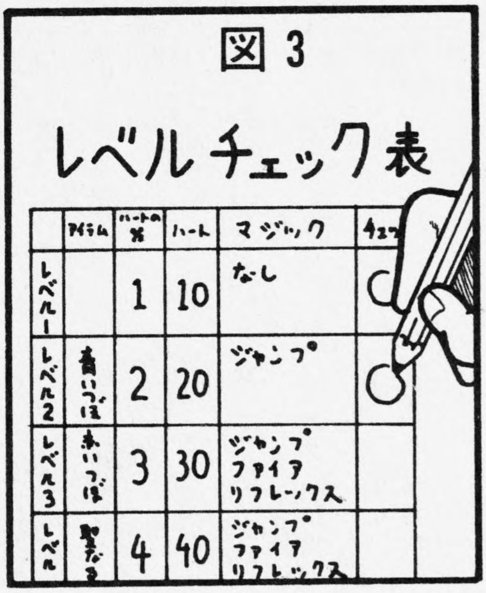
このゲームでは、あなたの強さを表わす、1~4までのレベルを設定しました。ファミコン版ゲームでは、経験値が上がるにしたがってレベルが上がるようになっていますが、このゲームブックでは、得たアイテムによって変わっていきます。

284ページのレベル表が、レベルとアイテム、そして、そのレベルで持てるハートの器の数と魔法の、対応表になっています。

レベルを上げていくことにより、ハートの器を入手したり、魔法を教えてもらったりする資格を手にできるのです。(レベルを上げても、ハートの器を手に入れられなかったり魔法を教えてもらわなければ意味はありません。)ハートの器を取る項目や、魔法を教えてもらう項目に来たら、必ず、自分のレベルを確認して下さい。

また、レベルを上げる際、強いアイテムは弱いアイテムの代わりになります。例えば、あなたがレベル1のとき、入手したアイテムでレベル3、レベル4になることも可能なわけです。(ただし、魔法を入手するためには特定のアイテムが必要です)

レベルチェック表の右側には、チェック欄が設けてあります。レベルが上がるたびに○印を書き入れていって下さい。(図3参照)



●LIFEエネルギーのチェック

あなたの持つLIFEエネルギーは、持つハートの数によって決まります。ゲーム開始の時点で、あなたはハートを満杯にした器を1個持っています。1個のハートの器に入るハートの数は満杯の状態で10個です。

レベルが上がることにより、このハートの器を持てる数

ゲームの進め方

も上がっていきます。ただしゲームの途中、ハートの器を入手できる項目へ来ても、自分のレベル以上の器を持つことはできません。例えばあなたがレベル1で、ハートの器をとれる項目へ来たとします。でもレベル1で持てるハートの器の数は1個ですから、ここでは器を取ることはできません。

また、ゲーム途中で取るハートの器はすべて空です。空の器は、いくつ持っていても意味はありません。あなたはうまくルートを選択して、ハートを取り、器を満たしていかなければならないのです。

ハートは、ゲーム途中でバトルに勝つなどして手に入れることができますが、このとき持っている器の上限を超えてハートを取ることはできません。例えば、敵を倒してハートを5個得られる場面にきたとします。このとき、あなたがハートの器を2個持っていて、中にハートが18個入っていたとしましょう。器2個で持てるハートの数は20個ですから、この場合、取れるハートの数は2個です。残り3個は取ることはできません。285ページにLIFEエネルギーチェック表があります。ハートの器を取ったら、まず表の左に○印を入れ、あとは、ハートの増減にしたがって表を書きかえていけばよいのです(図4参照)

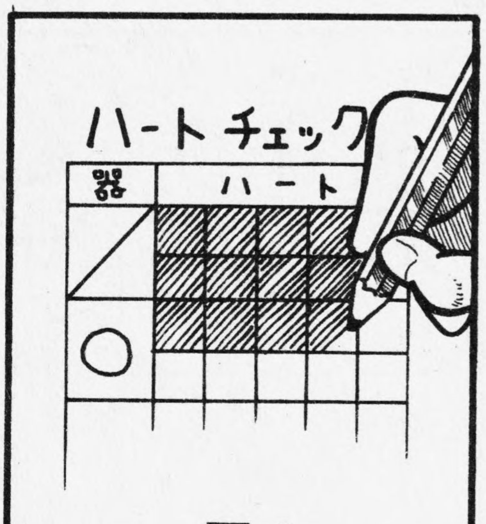


図4

●タイムゲージのチェック

旅の途中、あなたはいくつかの神殿へ行きますが、そのうちミドロ沼の神殿と王家の墓の神殿は、タイムポイントの定められたタイムアタック式になっています。

時間経過のチェックは285ページにあるゲージを使います。各神殿に入るときのタイムポイントは5です。神殿内で、タイムポイントをマイナスするという項目へきたら、ゲージのマス目をひとつずつぬりつぶしていきましょう。（図5参照）

途中、特定のアイテムを取ると、そのポイントのマイナスは半減していきます。ゲージのマス目はそれぞれ半分に区切ってあるのでそのアイテムを取った後は、半分ずつゲージをつぶしていきます。もし、神殿内でゲージが全部つぶれてしまったら、その時点でゲーム・オーバーになります。ルートをうまく選択していましょう。

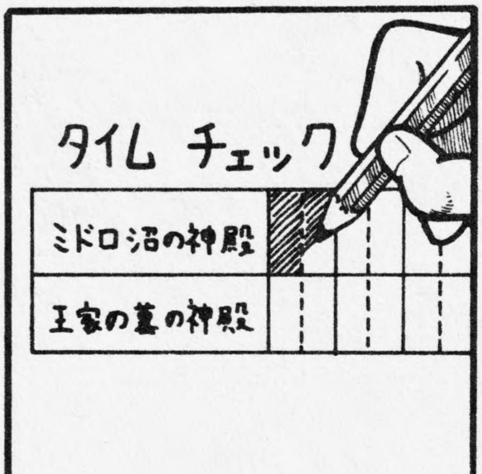


図5

●ステップメモ

何かの拍子で本が閉じてしまったり、途中でゲームを中断したりして、自分の通って来たルートがわからなくなってしまうことがよくあります。

286ページのステップメモを使い、自分の通ったルートを記録していきましょう。

さあ、ゼルダ姫があなたの救出を待っています。敵の牙城めざして、スタート！

リンクの冒険

——魔界からの逆襲——

1

どんよりと重くたれこめた灰色の雲の下、寒々とした草原がどこまでも広がっている。
その草原の中につけられた一本の道――ぼくはその道をどこまでもまっすぐに歩いていった。
この空虚な光景の中で、ぼくの行くべき道は、それしかない。はてしなく続く草の海の彼方にはいったいどんな冒険が待ち受けているのか、今のぼくにはまだわからない。
吹き渡る冷たい風が前途の多難さを予感させた。

⇩３９４へ

2

アルローダの尻尾には猛毒がある。気をつけなければ……。
それまでこっちの様子をうかがっていたアルローダは、突然ハサミをふりかざして攻撃してきた。
ぼくは必死でヤツのハサミをかわしながら、何とかその懐に飛び込もうとした。しかし、ヤツのハサミの下をかいくぐろうとするたびに、ツメ状になった尻尾が襲いかかってくる。
だめだ！　とても接近できない！
こうなったら逃げるが勝ちだ。ぼくは手近な岩によじ登って必死に逃げた。ヤツもここまでは追ってはこれまい。**（LIFEエネルギー♡マイナス３）**

⇩３３２へ

3

しまった！　閉じ込められてしまった！　扉は押しても引いてもビクともしない。
ぼくは覚悟を決めた。逃げ道がないのなら戦うしかない。
剣を抜く。あたりは完全な闇ではない。外からの光が差し込んでくる。その光が、ぼくに敵の姿を見せた。
ゲールだ！
魔界からガノンが呼びよせた化けものトカゲ。真っ赤な長い舌をチロチロと動かし、こん棒を片手に迫ってくる。

●ファイアの魔法を持っている⇩275へ　●持っていない……⇩353へ

4

進んでいくうちに、右手が、奇妙な形をした岩の突起に触れた。それはかすかな光を周囲に放っている。
何だろう、これは――？
手でなで回してみると、なめらかな半球を三つ重ねたような形をしている。明らかに人工のものであった。軽く叩いてみる。どうやら、中は空洞になっているようだ。

●突起部を壊してみる……⇩328へ　●そのまま行く……⇩36へ

5

その時、またしてもガノンの思念がぼくを挑発してきた。

「フフフ……リンク、自分の影を倒したぐらいでいい気になるなよ……」

「どういう意味だ!!」

ぼくはカッとしてつめ寄る(もちろん、思念の中でだ)。

「すぐにわかる。フフフ……ハッハッハ……」

何だ!? この自信に満ちた態度は……。ヤツは、切り札・ブラックリンクを倒されているというのに……。

●ガノンの言葉など無視して姫にかけ寄る…………⇩115へ

●どうも気になる。いったん止まって様子を見る…………⇩190へ

6

ぼくはパラパ砂漠の神殿の前に立った。壮麗な神殿の上空には不吉な暗雲が渦巻いている。

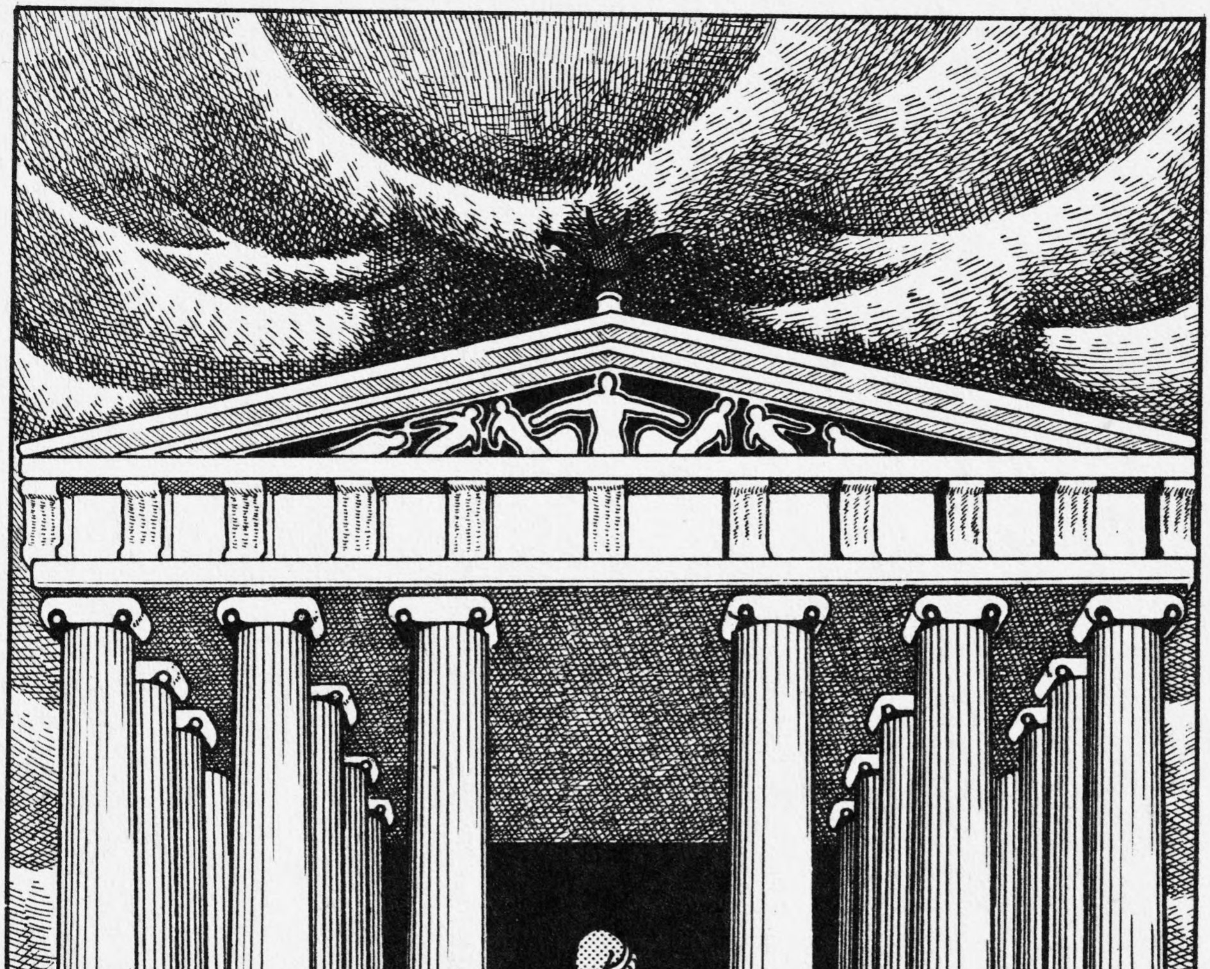
――行くぞ!

石造りの階段を登って、神殿の内部へと踏み込む。

その時、入口の床がゆっくりと下降した。床全体がエレベーターになっているのだ!

⇩358へ

5〜6



6●行くぞ！　ぼくは、決意を固くして、パラパ砂漠の神殿の内部へと踏み込む。

7

不意にバルタムの姿が消えた。「どこだ!?」あわてて頭上に目をやると、敵はぼくの真上にジャンプし、剣を下に向けて構えている。

ぼくは横っとびにヤツの急降下攻撃をかわそうとした。だがもう遅い。すさまじいスピードでくり出されるバルタムの剣が、ぼくの肩を深々とえぐった。(LIEEエネルギーマイナス5)

このままではやられる。くやしいけど、ここは逃げるしかない。かさにかかって攻め立ててくる敵の切っ先をかわし、ぼくは転がるように逃げ出した。

今度あったらギタギタに斬りきざんでやる! なんて言っても負け惜しみにしかならないか……。

⇩205へ

8

その岩山は、様々な奇岩が集まってできた巨大な天然の城塞だった。ぼくは奇妙な岩々の間をめぐりながら、次第にその岩山の奥深くへと入り込んでいった。そびえ立つ巨岩が石の回廊を作り出している。そこまで来た時、ぼくは思わず足をとめた。

何かが回廊の入口にうずくまっている。あれは、アルローダじゃないか!

間違いない、巨大サソリのアルローダだ。こいつは、かなり手ごわいぞ……。

どうする、避(さ)けるか？

●戦う……⇩264へ　●避ける……⇩332へ

9

先を急ごう。抜け道はない。

この部屋は行き止まりだ。ぼくは再び部屋の外に出た。**（タイムポイント・マイナス1）**

右の扉(とびら)の方を見ると、依然(いぜん)として閉(と)じたまま不気味(ぶきみ)な沈黙(ちんもく)を続けている。どうも気にかかるな……。

●右の扉を開けてみる……⇩317へ　●エレベーターまで引き返す……⇩137へ

10

「この屋敷(やしき)には何かあるのかい？」

通りすがった男の子をつかまえて聞いてみた。男の子は、おびえたように首を振った。

「知らない。知らないけど、ぜったい入っちゃダメだよ」

それだけ言って、男の子は逃げるように走っていってしまった。

いや、それだけではない。

この屋敷の前を通る者は、大人も子どもも足早に去っていく。やはりこの屋敷には何か

あるのだ。

●中へ入ってみる……⇩309へ

●中に入るのはやめる……⇩148へ

11

もと来た道を引き返すことにした。

しかし、もはや方角さえ定かではない。ひとっ子ひとりいない草原を、ぼくはあてどもなくさまよった。

どうやら、完全に道に迷ったようだ。

草原を吹き渡る冷たい風に、思わず身ぶるいしてしまう。夜は近い——。

太陽は間もなく地平線のかなたに沈み去った。なってこった、ぼくは広大な闇の中に、ただひとり取り残されたのだ。この闇の奥にはどんな危険な敵がひそんでいることか……。

仕方がない、ここはあくまでまっすぐに行こう……。

ぼくはそう決心すると、闇に閉ざされた草原をひとりどこまでも歩いていった。

⇩128へ

12

突然、目の前に深い亀裂が現れた。危ない、危ない——もう少しで足を踏み外すところ

だった。背中を冷たい汗が伝っていく。

大きく切れ込んだその亀裂は、左右にどこまでも延びている。こわごわのぞき込むと、真っ黒い深淵が底知れぬ口を開けている。

向かい側には同じような草原が広がっているのだが、飛び越すには少々幅がありすぎるようだ。しかし、あくまでまっすぐ進むのなら、ここを飛び越すしかないのだが……。

●亀裂にそって歩く……⇩447へ
●飛びこす……⇩168へ
●引き返す……⇩431へ

13

やはり野宿しよう。夜、むやみに動き回るのは危険すぎる。

柔らかそうな草を集めて寝床を作ると、ぼくはその上に横たわった。

夢ひとつ見ない深い眠りの後、ぼくは目を覚ました。すでに夜は完全に明けている。

朝の光の中、ぼくは立ち上がって大きくのびをする。疲れはかなりとれたようだ。

よし、出発だ！

⇩225へ

14

ぼくの攻撃にパルタムは倒れた。ヤツの残骸は風化し、ぼくの目の前で散っていく。勝った！（LIFEエネルギー♡プラス5）
この廃屋全体を包んでいた妖気もたちどころに消え、よろい戸のすき間から入ってくる光が、部屋の中を照らす。
そこにいたのは十数人の子どもたちだった。

●子どもたちの母親を知っている……⇩43へ
●知らないが子どもたちの家を探す……⇩135へ
●放っておく……⇩39へ

15

「それじゃぼくはこれで失礼します」
できる限り平静を装って言う。だが家を出ようとしたぼくを、老婆の怒声が引きとめた。
「お待ち!!」
だがそれはさっきまでの老婆の声ではない。地の底からわき出るような、身震いするほどおぞましい声だ。そして、ぼくが老婆をふり返ろうとした瞬間、とつぜん灼けつく衝撃が背後からぼくを襲った。（LIFEエネルギー♡マイナス5）

⇩386へ

16

ぼくはエラーの家へ行った。なぜ、エラーはぼくがゲールと戦うことを予知したのだろう。そしてエラーは、ゲールを倒したぼくに何をしてくれると言うのだろう……。ぼくの中は疑問でいっぱいだった。

「……俺には役目があるからだ」ぼくの問いにエラーはそう答えた。

「役目？」

「戦士に道を示す役目だ。……リンク、君は聖なる水を持っているか？」

●持っている……………⇩131へ

●持っていない ……………⇩361へ

17

大広間にさしかかったぼくを出迎えたのは、すさまじい熱気の嵐だった。とにかく熱い。その原因を作っているのは、広間を横切って流れている炎の川だ。ごうごうと耳をつんざくような轟音をあげ、右から左へと渦を巻き上げるその川の向こうに、出口がある。

ここが守護神の部屋か！

だが、どこを見回してもそれらしき影は見当たらない。

どういうことだろう？

そう思って炎の川に目をやると、ふいに川の中からすさまじい火柱が吹き上がった!
中から現れたのは、バルバジアだ。めらめらと燃える炎に包まれ、裂けた口から赤い舌がチロチロと見え隠れしている。
ヤツはいきなり、カッと口を大きく開けた。まっ赤な炎が、広間をすみずみまで埋めつくす。
バーベキューにするつもりか!!

●剣で戦う……⇩188へ　●ジャンプを唱える……⇩432へ
●リフレックスを唱える……⇩263へ　●サンダーを唱える……⇩313へ

18

「ぼくもあなたたちには構わないから、あなたたちもぼくに構わないでくれ」
ぼくはそれだけを言い放った。
「……裏通りに行ってみたらいい。きっと力になってくれる人がいるから……」
申しわけなさそうに男は言った。力になるとはどういうことだろう?　この男の言葉を信じてよいものだろうか?

●裏通りへ行く……⇩82へ　●行かない……⇩151へ

19

どうやら、水にありつくにはこいつを倒すしかなさそうだ。ぼくは覚悟を決めると、剣を抜いてテクタイトに近寄った。ヤツはその大きなひとつ目をカッと見開いて、ぼくのほうをじっと見つめている。

バトルポイント リンク（G）、テクタイト（3）で戦う。結果は？

●勝った……⇩292へ　●負けた……⇩122へ

20

わけのわからない町だ。異様な空気が町全体を包んでいる。早々にここを出たほうがいい。——ぼくの中で警告に似た思いがくり返される。

●旧市街へ行こう……⇩166へ　●もう町を出よう……⇩169へ

21

はしけに出た。立派な船がズラリとならんでいる。商人でごったがえす中をくぐりぬけ、ぼくは離れ島への渡し船を探した。

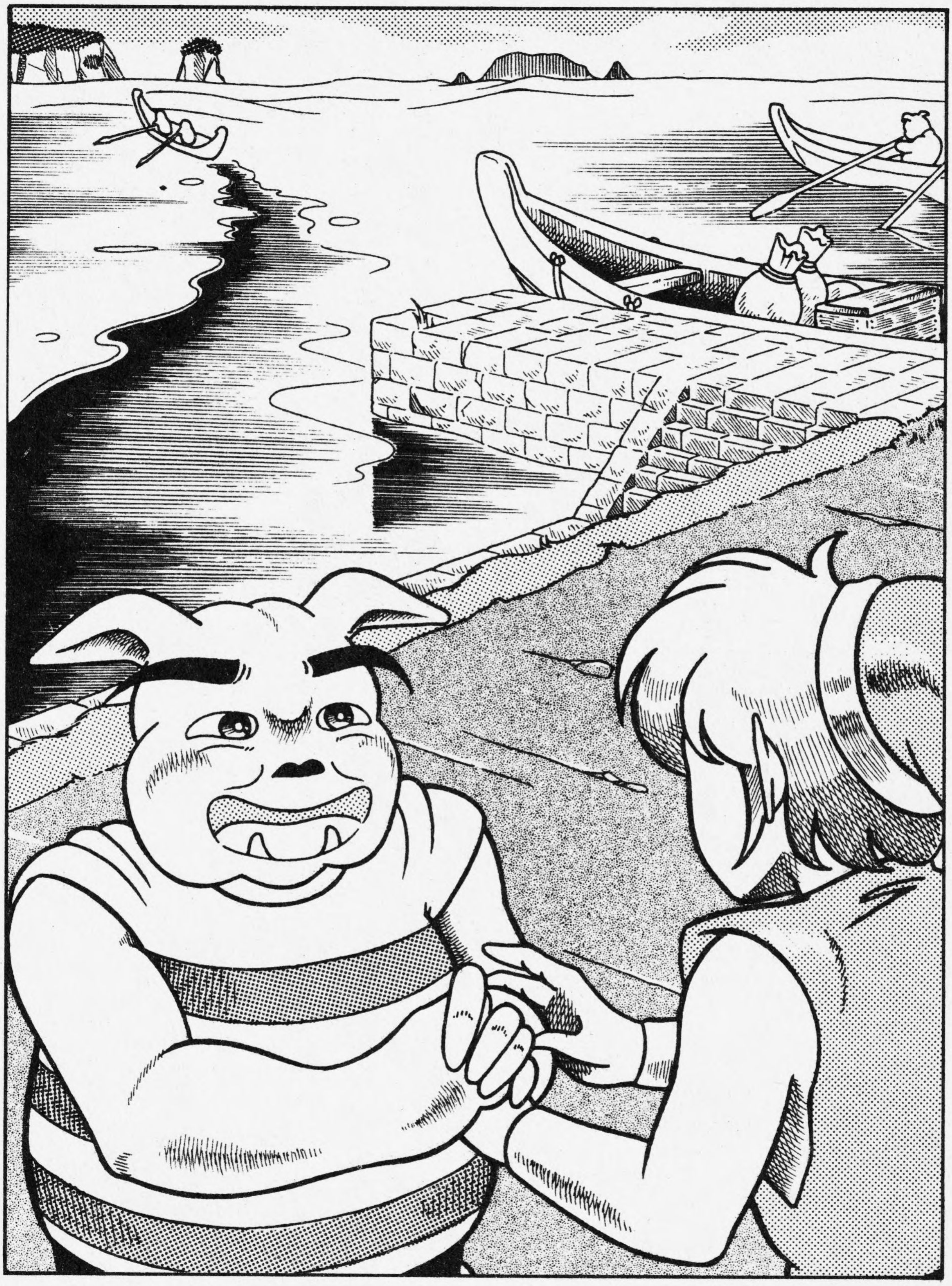
渡し船は、はしけのすみのほうにちょこんととまっていた。ほかの船にくらべるとあまりにもみじめな小舟だ。それでもまあ、ないよりはマシだ。まさか海を泳いで渡るという

わけにもいくまい……。
「すみません」
ぼくの声に、渡し守がふりむいた。その顔……。
「あっ！　お前は……」
「リンクはん！　お久しぶりやなぁ」
なんと渡し守は、モリブリンだったのだ。
「こんなところで何をやっているんだ？」
「いやー、世の中どこ行っても不景気やし、いつまでも危い事やっとらんと足洗おう思いましてん。小舟、手に入れてここで渡し守をはじめましたんや」
うーん、世渡りの上手いヤツ。
「ところでリンクはん、離れ島へ行くのなら、まず三つの神殿でそこの大将を倒さないけまへん。でなければとても、離れ島の敵にはかないまへんで――」
●三つの神殿で守護神を倒した…⇩227へ　●まだ倒していない………⇩352へ

22

ぼくは剣を垂直に構えて、ヤツが近づくのをじっと待った。
ラーは鋭いキバの並んだ口を大きく開けて急速に接近してくる。

22



21●「リンクはん！　お久しぶりやなぁ」渡し守の顔を見て、ぼくは仰天した。モリブリンじゃないか！

まだ……、まだだ……。

おそろしいラーの顔がぼくの視界いっぱいに広がる。

——今だ！

ぼくはありったけの力でラーに剣を叩きつけた。

ガシャーン！

その瞬間、ラーは粉々に砕け散った。床には細かい石の破片が散乱している。その中に青いカギを見出した。ぼくはそれを拾い上げると、入ってきた扉からまた外に出た。（**青いカギ入手。チェックリストに記入**）　**⇩268へ**

23

ぼくの分身は、黒い妖気に包まれていた。ヤツとぼくが唯一違う所といったら、そこだけだ。

その時、ぼくはガノンのいやに自信ありげな言葉の意味がやっと理解できた。ぼくが強ければ強いほど、ヤツもまた強力なのだ。なにせ、分身はぼくとまったく同じ戦闘能力を持っているのだから……。

とんでもない敵が現れたものだ！

分身は、ぼくをめがけて斬りつけてきた。何と鋭い出足だ！　ぼくよりも技量は上じゃ

ないか！　それでも、ヤツの切っ先を紙一重でかわしながら、剣を胸めがけてくり出していった。

とたんにガノンの声が!!

「リンクよ、今、貴様が自分の分身を葬るのはたやすいであろう。だが、相手もまた貴様だということを忘れるな……」

ぼくは、脳天に一撃を食らったような気がした。

そうなのだ！　ヤツもまた、ぼくであることに変わりはない。こいつを傷つけることは、すなわち、自分で自分を傷つけているのと同じ意味を持つ！

ぼくは、ハッとして、思わず剣を止めた。そのスキに、ブラックリンクはさっと身をひるがえして走り去っていく。

その後を追い、ぼくも走り出した。

⇩400へ

24

フォッカーは剣をふるって飛びかかってくる。いやはや鳥人！　目にもとまらぬ早わざでぼくのシールドと剣をたたき落としてしまった。

「フハハハ……。おはん程度の腕でこのフォッカーにたてつくとは笑止千万。リンク、ここがおはんの死に場所タイ！」

剣が一閃し、ぼくは一刀両断にされた。

END

25

とたんに、橋は異様な振動をはじめた。まずい！　本当に崩れかけている!!
ぼくは再び立ち上がり、走り出そうとする。だがその時、もはや足元には何もなくなっていた。
まっさかさまに落下する。バシャッという音と共に、ぼくは毒水のまっただ中へ投げ出されてしまった。
もはやなすすべはない。ぼくの体が白骨と化して水路に浮かぶのも時間の問題だろう。
ああ、つまらない欲を出したぼくがバカだった……。

END

26

ぼくをおびきよせて料理するつもりらしい。おおかた、近づいてきた所を触手でとらえ、口から岩を吐いて攻撃するつもりなのだろう。
ならば先制攻撃だ！

藻に足をとられながらもオクタロックに近づき、足を次々に剣で斬り落とす。こうしてしまえば斬るのはたやすい。もがくお化けダコを一刀両断にした。⇩55へ

27

ウィズザールの魔法は強力だ。ここはとっておきの呪文を出すしかない！

「サンダー！」

唱えた瞬間、部屋の中に目もくらむような閃光が走った。

ドゴォォォ!! すさまじい音がぼくの鼓膜を突き刺す。

光が消えると、そこにはズタズタに裂けたウィズザールの白衣が放り出されていた。ヤツの姿は影も形もない。すごい威力だ！ **（LIFEエネルギー♡プラス2）** ⇩308へ

28

ぼくは、再び白い闘気を呼びさました。たとえ体は滅ぼうとも、目の前でぼくの助けを待つゼルダ姫だけは守り抜いてみせる！ その気迫が乗り移ったのか、闘気は龍の形となって紫の部屋の天井まで立ち昇った!!

バトルポイント リンク（D）ボルバ（7）で戦う。結果は？

●勝った……………⇩450へ ●負けた……………⇩381へ

29

突然、目の前に七色の渦が広がった。
あっという間もなく渦はぼくのまわりに押し寄せる。立つ気力もなかったぼくは、声にならない叫び声をあげながら渦の中にのみこまれていった。
いつのまにか気絶していたらしい。目を覚ますと、ぼくはどこかの海岸に倒れていた。いったいここは……。あたりを見回すと、ぼくの背後の丘の上に神殿がそびえ立っているのが見える。
海べりに立っている神殿……!!　ここは王家の墓の対岸にある小島じゃないか！　なんでこんな所に!?

⇩147へ

30

老婆はさらにしゃべり続けた。
だがそれはすでに、人の言葉ではなかった。邪悪な神を呼ぶ呪文が次々とあふれてくる。
そして……!!

⇩386へ

31

「あなた旅の人ね？　ちょっと家に寄っていかない？」

町を歩いていたぼくに、若い女の人が声をかけてきた。何だろう、もしかしたら敵の罠かもしれない。

●行ってみる……………⇩198へ　●行かない……………⇩389へ

32

再び空中から襲いくるメグマットの影を、ぼくは剣で思いきりなぎ払った。

——カキーン！

異様な手ごたえに、思わず剣をとり落としそうになる。だめだ、ヤツの固いこうらは並の剣などはじき返してしまう……。

メグマットの鋭いツメが執ようにぼくを狙う。息つくひまもない連続攻撃に、さすがのぼくもなすすべがなかった。

このままではやられてしまう——ぼくはあわてて逃げ出した。くやしいが、仕方がない。

ヤツは追ってこない。おそらく、あの付近一帯がヤツのテリトリーだったのだろう。（LIFEエネルギー♡マイナス3）　⇩234へ

33

ここは赤い通路の最奥部だ。

そこには、毎度おなじみエレベーターが、まるでぼくが来るのを待っていたかのようにドアを開けて待っている。

さっそく乗りこもうとして、ぼくはあることに気づいた。

このエレベーターは、上の階へ行くエレベーターなのだ！

今まで乗ってきたやつは、例外なく下へ下へと進んでいくものばかりだった。ここへ来て、はじめて「上に行くエレベーター」が登場したっていうわけだ。

それにしても、こいつはどこへ通じているのだろう？　まさか、入口へ逆もどりってことはあるまいな……？

エレベーターの横には、さらに奥へ進む扉（とびら）もある。そちらのほうも気になるが……。

●エレベーターに乗る……⇩285へ　●扉をあけ、さらに奥へ進む……⇩199へ

34

無視して通りすぎた。マーゴが化けているっていう可能性だってある。「君子（くんし）危（あや）うきに近寄らず」ってやつさ。

部屋を抜けようとすると、頭上から奇妙（きみょう）な声がした。

「ミギャア！」
そして雨あられと火の玉が降り注ぐ。な、何だァ!!
見ると、部屋の天井に不気味な鳥がとまっている。
あれは……フォッケルじゃないか!!
ヤツはぼくをにらんで大きくはばたいた。そのままこちらに急降下してくる！
現在のＬＩＦＥエネルギー♡の数は？
●13以上……⇩206へ　●12以下……⇩314へ

35

ぼくは町をひとめぐりしてみた。だがもう目ぼしいものは何もない。
途中、何人かの人にも話しかけてみたが、手掛かりになりそうな情報にはめぐり会えなかった。
●もう町を出よう……⇩182へ
●やっぱり老人に会いに行こう……⇩203へ

36

ここはいったいどのあたりなのだろう。この洞窟はどこまで続いているのか……。

光なき地底の迷宮で、ぼくは完全に迷ってしまったようだ。目は多少、闇に慣れたとは言え、こう何も見えないままではどうしようもない。
これから先どこへどう歩いて行けばよいのか――。
何もわからぬまま、ぼくは闇の中をさまよった。

⇩103へ

37

ぼくはサンダーの呪文をとなえた。
言葉は稲妻となってマーゴの体を撃つ。
その威力は、ひからびたミイラのような醜い妖怪の体を四散させるには充分すぎるほどのものだった。
床に散ったその体は腐臭を放つ粘液となって溶けていく。（LIFEエネルギー♡プラス5）

⇩172へ

38

むやみに扉を開けて、魔物でも出てきたらやっかいなことになる。ぼくはそのまま通路を進んでいった。
やがて通路の終点にさしかかった。そこには古びた木の扉がふたつ並んでいる。両方と

もカギはかかっていない。
どちらの扉を開けてみようか?

●右のとびら……⇩412へ　●左のとびら……⇩209へ

39

ぼくがパルタムを倒したことは、たちまち町中に知れ渡った。家々から出てくる人たちの数は信じられないものだった。さっきまで海の底のようだった町に、これほどの人がひそんでいたなんて……。

「勇者よ、ぜひ私の家へ来てください。宴をはってあなたの旅の話をうかがいたい」
新市街で一番の権力者が、そう言ってぼくを誘ってくれた。

●男の家へ行く……⇩372へ　●誘いを断り旧市街へ……⇩166へ
●誘いを断り町を出る……⇩169へ

40

祭壇に安置されたゼルダ姫は、催眠術をかけられているのか、死んだように動かない。眼前に立ちふさがっている邪悪の使者もさることながら、ぼくは姫の安否が心配になってきた。

ブラックリンクの鋭い攻撃をかわしながら、ぼくは懐から十字架を取り出し、空中に放り投げる。聖なる光が毒々しい光をたちまちのうちになぎ払っていった。
同時に、様々な思念が洪水のように脳裏へ流れこんでくる。ガノンの思念が、ブラックリンクの思念が、そして……ゼルダ姫の思念が！　ぼくは、邪悪な意思の強力な妨害と戦いながら、姫の心の叫びに耳を傾けた。
「リンク……逃げて！　今、あなた……が戦っている……のは、あなた自身なのよ。彼を滅ぼせば、あなたも……滅びてしまう。これは宿命……どうしようもないこと……。」
その言葉の意味をかみしめる間も与えず、ブラックリンクは容赦なく剣をくり出してくる！

●あくまでも戦う……………⇩44へ　●いったん退却する…………⇩112へ

41

水辺の町・サリアに行くためには、途中で川を渡らなければならない。
サリア目ざして歩を進めるぼくは、やがて川にかかる橋のたもとへやってきた。
この川も、ガノンがハイラル全土を人外魔境に変えてしまう前は、もっと水清き流れだった。それが、今では魔物がうようよ住む死の川である。
ぼくは橋を前にしてしばし考えこんだ。どうもいやな予感がする。川の中から、かなり

強い妖気を感じたのだ。
ジャンプの魔法を持っているか?

●YES……⇩260へ　●NO……⇩433へ

42

ぼくはマジカルキーをとり出し、急いでカギを開けた。
その瞬間、紫色の嵐がぼくを襲う。今度は紫の部屋か!!　どういう趣味してるんだ、ガノンのヤツは……。

⇩262へ

43

パルタムを倒したことを告げると、母親たちは扉を開け、とび出してくる。
「ありがとう。この御恩は決して忘れないわ」
息子を抱きしめ、さっきの女の人が涙ながらに言った。
「何かお礼をさせてください。お望みがあれば何でも言って下さい」彼女たちが口々に言う。だが、ぼくは首を振った。
「いいえ、お礼だなんて。あいつはぼくの敵だったんですから……」
ぼくはこれまでのいきさつを話した。ここへ来るまでの旅。そして、神殿へ行くこと。

「神殿？　……それなら私の母に会って下さい。きっとあなたの力になれるわ」
母親のひとりがそう言って、ぼくを奥の部屋へ案内してくれた。部屋には老婆がいる。
「名は、何と言うのじゃ？」
「リンクです」
「……戦士、リンクよ。お前に道を示そう。ミドロ沼へ向かいなされ、そこで捕われている妖精を救け出すのじゃ。彼女はきっとお前に力を貸してくれるじゃろう」
老婆はしわがれた声で言った。ぼくは、その言葉に深くうなづく。
「今ひとつ、お前が赤いつぼを持つ戦士であるのなら、わしはもうひとつの道を示してやれるのじゃが……」

●赤いつぼを持っている……………………⇩391へ
●（持っていなければ）礼を言って家を出る……………⇩39へ

44

いろいろと小細工を使ってみたところで、最後の勝負を決めるのは、やはり剣の腕だ。
ぼくは自分自身の影と対峙し、剣をすらりと抜き放った。紫の光が、剣身に反射してギラリと光る。その重みが、ぼくにいくらかの安堵感を抱かせた。
じりじりと間合いをつめる。ピーンと張りつめる緊張の糸。白い闘気と黒い闘気がせめ

ぎあい、緊張が限界まで達した瞬間、ふたりのぼくは同時に宙へ舞った！

バトルポイント　リンク（F）ブラックリンク（7）で戦う。結果は？

●勝った……⇩329へ　●負けた……⇩425へ

45

「でやあ――っ」

満身の気合をこめてアイアンナックに斬りかかった。

ガン！　ヤツはぼくの必殺の剣を軽く盾で受けとめた。

くそっ、ならば！

小回りをきかして何とか敵の死角を狙う。しかし、ヤツはその巨体にも似合わず、なかなかにすばやい――。

負けてたまるか！

ぼくは捨て身の攻撃に出た。ヤツの足元に飛び込んで、下から思いきり剣を突き上げる。

「グワ――ッ！」

アイアンナックの絶叫があたりに響いた。すぐに剣を引き抜き、ヤツを袈裟がけに叩き斬る！

鋭い地ひびきを立てて、アイアンナックは倒れた。その横には、小さなびんが置かれて

いる。魔法の水だ！　一気にのみほすと、体がウソのように軽くなった。（**LIFEエネルギー♡プラス５**）

アイアンナックの死体のうしろに、小さな扉があった。

⇩２７６へ

４６

ぼくはその崩れかけた廃屋に踏み入った。なぜこの美しい町の中で、この家だけがこんなに荒れているのだろうか？

内部の荒れようは外観の比ではなかった。中は真暗だったが、たちこめる臭気でそれとわかる。床に張られた板も、腐りはじめているようだ。ぼくは手さぐりで進んでいく。

●聖なるローソクを持っている⇩２１１へ　●持っていない……………⇩１６１へ

４７

彼女に案内されてぼくは賢者の部屋に通された。南向きの部屋。やわらかい陽ざしの差し込む中に、賢者がいた。

「耳も遠くなっているから大きな声で話してあげてね」

少女はそれだけ言うとぼくを残して出ていった。

「あのォ、ぼくはァ、旅のォ者です。神殿について教えて下さァい」

46～47

ぼくは声を張りあげて言った。賢者がその声に顔をあげる。髪ばかりか眉毛までが真白になり、顔には深いシワが刻まれている。

「何か言ったかね？」

はっきりしない発音だったがそういう意味だっただろう。ぼくはもう一度、さらに声を張りあげて同じことをくり返した。

「かっかっか」

いきなり賢者が笑った。何だ？

「聞こえておるわ、かっかっか」

うーん、すっかりおちょくられてしまったらしい。百歳過ぎているというのに元気なものだ。

「まーそう気を悪くするな。神殿のことか。わしも近ごろもの覚えが悪くなっての」

駄目かな、こりゃ。ぼくはきびすを返し、部屋を出ていこうとした。

「おい待て、冗談だ。これを持ってゆけ。これはマジカルキーと言って神殿内の扉を何度でも開けることができるものだ。得意そうに言って賢者はぼくに1本のカギをくれた。**（マジカルキー入手、チェックリストに記入）**

「この先も苦難の旅が続くだろうがくじけてはならんぞ、かっかっか」

どうも本気なのか冗談なのかわからない爺さんだが、とにかくぼくは礼を言って賢者の

家を出た。
⇩240へ

48

ぼくは剣を抜いた。どうせ手強いのは頭ひとりだろう。頭をおさえてしまえば、あとのヤツらは何とでもなる。

バトルポイント リンク（J）ならず者たち（3）で戦う。結果は？

●**勝った**……………⇩**289へ** ●**負けた**……………⇩**346へ**

49

ぼくは、この部屋の中にうごめく魔物が聖なる笛の音に弱いことを知っている。

「本性を現せ、化け物！　力づくでも姫の中から追い出してやる!!」

笛を吹きはじめると、姫の体はふたたび小きざみにけいれんしはじめた。

「姫、苦しいでしょうが耐えて下さい。あなたを苦しめる魔物を倒してごらんにいれます」

目を固く閉じて笛を吹き続ける。

姫の体から、青白いオーラが立ち昇る。

やがて背中の方から、魔物は姫から分離しはじめた。その光景は、あたかもさなぎが蝶へと脱皮するような美しさだ。

49●ぼくは目を閉じて笛を吹き続ける。美しくも凶々しい光を残し、ついに最後の敵が姿を現した！

美しくも凶々しい光を残し、ついに最後の魔物が姿を現した！
ヤツの風貌は、見た目だけなら実に華麗なものだ。青い羽根を優雅に広げ、ゆっくりと羽ばたいている。
だが、こいつはその柔和な外見にもかかわらず、この世の悪徳をすべてその身に吸いこんだような凶獣なのだ。その名はボルバ！　死の鳳凰という異名をとる最強の魔物だ!!

⇩１０２へ

５０

せめて、せめてここから出られれば。ぼくは這うように扉へむかった。五歩、いや、あと三歩だ。
扉に手が届いた。だが、固く閉じた扉はビクともしない。そこを、ゲールの鋭い爪にうしろからつかまれ、ひき倒される。
もうダメだ。
ゲールは狂ったようにこん棒をふりおろす。ぼくの体からとび散った返り血が、赤黒くゲールの顔を染めていく……。

END

51

門番の言っていた通り、新市街はきれいな町だった。広くて立派な造りの家がならぶ、静かで清潔な町……だが、うーん、あまりにも静かすぎやしないか？　これじゃまるでゴーストタウンだ。

大通りにはひとっ子ひとりいない。そればかりか昼日中、どの家もしっかりと窓をとじているのだ。

これはいったいどうしたことだろう？

●手近な家を訪ねて訳を聞く……⇩374へ

●しばらく歩いてみよう……⇩194へ

52

ぼくは天井のボトマスターをにらみながら必死で考えた。こいつを倒すには、どうすればいいんだ……。

ついにヤツは天井を離れた。そして、まっすぐに落下してくる。ぼくはその真下に駆け寄った。

「てやあ――っ！」

気合いもろとも、落下中のボトマスターを両断！　ねばりつくような体液をふりまいて、ふたつになったボトマスターはグシャリと地に落ちた。

剣をおさめて額の汗をぬぐう。さあ先を急ごう。（LIFEエネルギー♡プラス2）

⇩156へ

53

毒の沼地を通り過ぎ荒涼たる谷へと踏み込んでいく。生あるものの影などひとつもない。静寂だけがその谷を支配している――。

しばらく行くと、谷の奥に、洞窟があった。

行ってみるか……。

⇩191へ

54

好奇心を押えることがどうしてもできなかった。やはり物音の正体を確かめてみることにしよう。

道のわきに足を踏み入れると、繁みをかき分けてその向こうをのぞき込む。

繁みの向こうにいたのは――メグマットだ！

キツネとアルマジロとカンガルーをまぜあわせたようなそいつは、荒い鼻息をつき、敵意に燃えた目でぼくのほうをにらんでいる。

引き返す余裕はない。相手は今にも飛びかからんばかりに身構えているのだ。

こうなったら、やるか、やられるか、だ。ぼくは剣を引き抜くと、地をけった。

⇩143へ

55

胸元まで泥水の中に埋まりながら、やっとのことでドロ沼の最奥部までたどりつく。そこには、大理石でできた大きな神殿がそびえ立っていた。神殿の柱はところどころ石が崩れ落ちており、いかにも荒れはてた雰囲気だ。これも、ガノンや魔物どもの放つ妖気のせいなのだろうか……。

入口は真っ正面にあった。その奥からは薄明るい光がもれてくる。用心しながら中へ入っていった。

ぼくが中へ入ると同時に、突然、背後にあったはずの入口がすうっと消えてなくなってしまった。同時に、ひどく陰惨な声が聞こえてくる。いや、頭の中に直接話しかけられているのだ！　声の主はガノンだった。

「ワハハハハ……。リンク、貴様はここでくたばるのだ。この神殿は、一度入ったら守護神を倒さぬ限り出ることはできぬ。だが、守護神の部屋がどこにあるかはわかるまい……」

なるほど。一方通行ってわけか！ **(これより神殿を出るまでの間はタイムアタック式になります。制限時間は5ポイント)**

そうとなったら、とにかく歩いて守護神の部屋を見つけるしかない。神殿の奥へと足をふみ出した時、ぼくは不意に自分を見つめる目があることに気づいた。頭上を見ると、不気味なひとつ目のヒトダマがこちらをにらんでいる。ファイアモアだ！
リフレックスの呪文を覚えているか？

●YES……⇩244へ　●NO……⇩127へ

56

洞窟の内部は完全な闇に閉ざされていた。よどんだような空気が不気味さをいっそうきわだたせている。
ぼくは壁に右手をつき、手探りで進むことにした。一歩一歩、慎重に足を運ぶ。右手に伝わる冷たい岩の感触は何とも言えず気味が悪い。⇩4へ

57

ぼくはミドの町をあとにした。行く手には広大な砂漠がひろがっている。

●ラウルの町に行く……⇩291へ　●サリアの町に行く……⇩41へ
●パラパ砂漠の神殿に行く……⇩344へ　●ミドロ沼の神殿に行く……⇩429へ
●王家の墓の神殿に行く……⇩305へ

58

「何か神殿のことを知りませんか、何でもいいんです」
「ごめんなさい」
彼女はすまなそうに言った。
「私に神殿のことはわからないわ。そのかわり、というのも何だけど、宿屋に行ってごらんなさい。……私があなたに教えてあげられるのは、そのくらいだわ」
彼女に宿屋の場所を聞くと、ぼくは礼を言って家を出た。

●宿屋へ向かう……⇩210へ
●向かわない……⇩133へ

59

やがて洞窟(どうくつ)を抜け、パラパ砂漠(さばく)へと足をふみ入れた。
遠くに蜃気楼(しんきろう)が見える。ぼくは、神殿へ向かってまっすぐに歩いていった。神殿に近づいていくにつれて胸が高鳴り、ぼくは軽く武者ぶるいする。
よし、行くぞ！

⇩6へ

60

さんざん迷った末、ぼくは左の道を選んだ。
先に進むにつれ、その道は次第に細く狭くなっていく。両側の壁が迫ってきて、まるで岩の裂け目に入り込んだようだ。
この道でよかったのだろうか……。
なんとなく不安を感じる。

⇩213へ

61

店の中では大男が剣をふりかざし、金を出せとわめき散らしている。今にも人質の女に斬りかかろうとしているところだ。
「その人を放せ！」
ぼくは怒鳴った。剣を抜き、大男の前に躍り出る。
「相手になるつもりか、小僧！」
大男は女を放し、ぼくにむき直って剣を構えた。剣を持つ腕に、山のような筋肉がもりあがっている。強敵だ……！

バトルポイント　リンク（B）大男（4）で戦う。結果は？

●勝った……………⇩273へ　●負けた……………………⇩118へ

62

ギルボックはその大きなひとつ目でぼくを見すえながら、まっすぐこっちへ飛んでくる。
来い！
ぼくは手にした剣に必殺の気合いをこめた。
――ていっ！
タイミングをはかって跳躍。空中で、ギルボックの目に剣を突き立てる。
成功だ！　ギルボックは地に落ちて息絶えた。
ギルボックの死体から剣を引き抜いて、すぐにゾーラの方へ向かう。ゾーラはすでにぼくのすぐ近くにまで迫っていた。ヤツは口から光線を吐こうとしている！
――間に合うか!?
ぼくはすかさずゾーラの元へ駆け寄って剣を横に払う。バサッ！　ヤツの首は宙を飛んで沼の中へと没した。

⇩53へ

63

水を目にしたとたんに、ぼくはどうしようもないのどの乾きを覚えていた。目の前の水は、あまりに美しく清らかに澄んでいる。
そうだ、今ここで飲んでおかねば……この先、水が手に入るという保証はない……。

散々（さんざん）迷ったあげくに、ぼくは水を飲むことに決めた。
「あっ！」
その時だ、うっかり足をすべらせてしまった。
バッシャ――ン！
うわっ――頭から水の中へ。必死で手足をバタつかせる。だが、いくらもがいてもどうにもならない。
ゲホゲホッ、く、くるしい……。なんだこれは、流される一方じゃないか！
これはただの湧（わ）き水ではない。地下水流だ！　激しい流れにどんどん押し流されてしまう。苦しい……助けて……。

⇩179へ

64

戦意より、恐怖のほうが勝っていた。ぼくは叫び声をあげ、その廃屋（はいおく）をとびだした。
一刻も早く逃げたほうがいい。ぼくは全速力でその場から去った。

●旧市街へ行こう……⇩166へ　●もう町を出よう……⇩169へ

65

――ここはどこだ……。

気がついてみると、ぼくは砂漠にひとり倒れていた。空間のひずみに巻き込まれて、こんな所に投げ出されたのだ。
体には別に異常はない。剣もそのままだ。ゆっくりと立ち上がる。空を見上げると、灼熱の太陽がギラギラと輝いていた。
ぼくはヨロヨロと歩き出した。方角など、まったく分からない。しかし、一刻も早くこの砂漠を抜け出さねば……。

⇩420へ

66

「このトカゲ野郎！」ぼくはカッとして怒鳴った。剣を抜き、身構える。
「こっちも退屈してた所だ。相手になってやる！」

●剣で戦う……………⇩170へ
●呪文攻撃をかける……⇩301へ

67

この先、水が得られるという確証はない。そう考えたぼくは、黒い点のほうへ向かうことにした。
近づくにつれ、その黒い点はどんどん大きくなっていく。やがて、涼しそうな木陰の下の青い水がはっきりと見えた。やっぱりオアシスだ！

ぼくは小踊しながら走った。こんこんと湧き出ている水に頭から飛び込む。まさに、生き返るような思いだった。乾ききった体にたっぷりと水を補給する。

すっかり元気を取りもどしたぼくは、また砂漠の果てをめざして歩き始めた。（LIFEエネルギー♡プラス2）

⇩366へ

68

ぼくは、聖なるブーツをはいていた。これさえあれば大丈夫！　ぼくが海中に足をふみ入れると、ブーツの聖なる力で海水はあっという間にひいていく。まるでモーゼの奇跡のようだ。

海水がひいた後には、浅瀬がつながって一本の道を作っている。ぼくはその道を歩いて、神殿へとたどりついた。

⇩147へ

69

ぼくは、聖なる笛を吹きはじめる。

たちまち、妙なる調べが部屋中に満ちあふれた。この音を聞いて、ヤツが何らかの反応を示せば、そこから突破口が開けるかもしれない。

だが、ぼくは目の前にくり広げられた光景を見て脳天をぶんなぐられたようなショック

を受けた。
笛の音が流れるのとほぼ同時に、ゼルダ姫の体が突然硬直し、激しくけいれんしはじめたのだ！
なぜ!? なぜ姫が聖なる音色を聞いて苦しまなきゃならないんだ!?
すっかり混乱したぼくは……。

●思わず吹くのをやめてしまう⇩369へ
●かまわず吹き続ける……⇩249へ

70

失意にかられてぼくはその荒廃した通りをトボトボと歩いていた。
「待って」
少女がぼくを追ってきた。ふり返ると、この光景にはあまりにも不似合いな美しい少女の姿があった。ぼくと同じくらいの年齢だろうか。身なりは貧しいが清潔そうな笑顔は、苦しい旅を続けてきたぼくの心をなごませてくれる。
「私のところへ来て。あなたはとっても疲れているわ。私の家で休んでいって」
少女が言った。

●少女の家へ行く……⇩343へ
●もう町を出よう……⇩57へ

71

ぼくは剣を構え、攻撃をかわしつつマーゴに迫った！

バトルポイント　リンク（A）、マーゴ（5）で戦う。結果は？

●勝った……………⇩84へ　●負けた……………⇩435へ

72

落盤の恐怖を身をもって知ったぼくは、やはり安全な道をとることにした。いつかは地上に出られると信じて、ゆっくりと歩いていく。あせりは禁物だ。また分岐点にさしかかった。今度は左右二方向に分かれている。

●右へ行く……………⇩156へ　●左へ行く……………⇩88へ

73

エークマンは自由自在に飛行する。

——気をつけろ、ヤツの挑発に乗ってはだめだ……。

剣を握りしめる手に汗がにじんできた。突如、エークマンが空中に舞い上がった。ヤツは、そのまま斜めに滑空してこちらに襲いかかってくる！

まっすぐに剣を構えて立ったぼくは、すれ違いざまにヤツの右腕と右の羽根を斬り落と

した。

——グエエ——ッ！

おびただしい量の血が洞窟内に飛び散り、ヤツは絶叫を残して息絶えた。ヤツが倒れたあたりには、青いつぼが転がっていた。**（ＬＩＦＥエネルギー♡プラス４。青いつぼ入手、レベルが２に上がる。チェックリストに記入）**

⇩４１０へ

７４

——どこかで水音がする……。

ぼくはその場に立ち止まって、耳を澄ました。水音のするほうを聖なるローソクの光で照らしてみる。大きな岩の陰にこんこんと水があふれているのが目に入った。湧き水のようだ。

この水、果たして飲めるのだろうか。毒が含まれていないとは断言できない……。

●水を飲む……………⇩６３へ

●水を飲まない ……………⇩１５６へ

75

厚い雲のすき間から時折顔をのぞかせていた太陽も、今や地平線の彼方に沈みかかっている。風が一層冷たくなった。
——もうすぐ、夜がやってくる……。
ぼくは足をとめて考え込んだ。今日はここで野宿しようか、それともこのまま歩き続けようか……。
どうしよう、こんな所にとどまっていてはいつどんな敵に襲われるかもわからないし、かと言って、夜道を行くのもやはり危険だ。
それに、ぼくはもう疲れきっている……。

⇩13へ

76

それにしても、こいつはデカい——こんなヤツに勝てるのだろうか……。
剣を構えてヤツの出方を待つ。
やがてヤツは、天井を離れて落下してきた。思わず緊張する——。
「——ああっ!?」
着地した瞬間、ヤツは五匹のボトに分裂した！　それらはいずれも、通常のボトよりはるかに大きい。その五匹が、前後左右からいっせいに襲いかかってくるのだ。必死で剣を

ふり回したがとても間に合わない。

こりゃ、たまらない！

ぼくはかろうじて一匹を叩き伏せると、もと来た道を一目散に引き返した。

（LIFEエネルギー♡マイナス2）

⇩121へ

77

「リンクと言います。旅をしているんです」

答えると扉が開いた。テーブルの上に置かれた小さなあかりだけが部屋を照らしている。

女の人が、ぼくを出迎えてくれた。

「いったい何があったんですか？　まだ陽も高いと言うのに、この町はまるで真夜中のようだ」

「パルタムのせいじゃよ」

あかりのむこうからしわがれた声がした。次第に闇に慣れた目をこらすと、老婆の姿が見える。いや、それだけではない。室内には、数人の女の人がテーブルを囲んでいる。

「パルタム？」

「そうです。ある日突然、町へやってきて、はむかう者は皆殺しにされてしまいました。私の夫も殺され、まだ幼い子どもたちは人質にとられてしまったのです。……それだけで

は飽き足らず、パルタムは町で殺りくをくり返して……。ですから皆こうして息をひそめ、隠れるようにして暮らすハメになったのです。どうかあなたも早く逃げてください」

ひとりの女の人が言った。ここにいる人たちは皆、家族を殺されたり、子どもを奪われた不幸な人たちなのだ。

●関わらないほうがいいだろう…⇩20へ

●町の人を助けてあげよう …⇩214へ

78

バルバジアの吐く炎を右に左にかわしながら、ぼくは無防備な竜の頭を突きまくった。

戦いはいつ果てるとも知れず、延々と続く。ぼくの体力が尽きるのが先か、ヤツが倒れるのが先か……。

それでも、弱点に攻撃を集中したのが効を奏し、炎竜の最大の武器――火炎放射も、しだいに当初の勢いを失ってきた。

「とどめだ!!」

満身の力をこめて剣をななめに振りおろす。

鈍い音とともに、すごい手ごたえがぼくの左腕に伝わってきた。

炎竜の首は見事に斬り落とされ、広間の床に転がる。その中から、まばゆい光に包まれ、何かが飛び出してきた。

78

78●バルバジアの弱点は頭だ！　ぼくはヤツの吐く炎をかわしながら、ジャンプしてヤツの頭に斬りかかった!!

光はやがて、十字の形をとりぼくの手に吸いこまれた。
十字架だ！　ついに手に入れたぞ!!　**（十字架入手、チェックリストに記入）**

やがて、首の消失したバルバジアの胴ががくがくと揺れはじめた。そしてスローモーションのように、ゆっくりと炎の奔流の中へのみこまれていく。

苦しい戦いだった。だが、ついにこの神殿をクリアできたぞ！　そう思っただけで、戦いの疲れも軽くなるようだ。

さて、どちらへ向かう？

●パラパ砂漠の神殿へ……⇩6へ
●大神殿へ……⇩21へ
●サリアの町へ……⇩201へ
●ミドロ沼の神殿へ……⇩429へ
●ラウルの町へ……⇩158へ
●ミドロの町へ……⇩318へ

79

しかし、最強の剣士の腕は予想以上のものだった。たちまちのうちに、ぼくは壁ぎわに追いつめられる。

青いヨロイの奥で、冷酷な眼がギラリと光った。ヤツの長剣が、うなりをあげて一閃する！

ぼくは必死にシールドで受け止めようとした。だが、加速された長剣は、シールドをぶ

ち破ってぼくの首を吹っ飛ばす。
　ここまで来てやられるなんて……。

END

80

　ぼくの腕で、この化け物がはたして倒せるだろうか？
　だが、マズラが行く手をふさいでいる以上、倒すよりほかに先へ進む方法はない。ぼくは剣を抜き、身構（みがま）えた。

バトルポイント　リンク（H）、マズラ（4）で戦う。結果は？

●勝った……………………⇩**411へ**
●負けた……………………⇩**233へ**

81

　谷をぬけると、そこは毒（どく）の沼地だった。何とも言えない不快な臭気（しゅうき）が立ちこめている。とても息をしていられない。ぼくは思わず顔をしかめる。
　突然、沼の水がゴボゴボとわき立った。何だ？　驚いて立ちすくむぼくの目の前に、沼の中からゾーラがゆっくりとその姿をあらわした！
　思わず後ずさり……。その時、背後にも異様（いよう）な気配（けはい）を感じてふり返る。後ろからはなん

と、ギルボックが追ってくるではないか！
さて、どちらと先に戦うか!?
●ギルボックと戦う………⇩167へ　●ゾーラと戦う………⇩116へ

82

ならず者の言葉を、かならずしも信じたわけではなかったのだが、ぼくは裏通りへ行った。
裏通りはひどいあり様だ。どの家も、とても人間が住んでいるようには見えない。
「やあ、旅の人かい？」
ひとりの男が声をかけてきた。……戦士だ。一目でそれとわかる。人のよさそうな笑顔をむけてくる。
「寄っていかないか。大した食いもんもないが、少しは腹の足しになる。それに、旅の話をぜひ聞かせて欲しいな」声をかけてきたのはエラーと名乗る男だ。
さっきのならず者の言っていたのはこの男のことだろうか？
●男の家へ寄っていく………⇩306へ　●寄らない………⇩151へ

83

マジカルキーを取り出し、鍵穴にさしこんだ。
カチリという小さな音がする。扉はすべるように開いた。
中をのぞき込んで、ぼくは思わず自分のあさはかさを悔やんだ。そこにいたのは王国の親衛隊員・アイアンナックだったのだ。
しかも、ヤツは真紅のヨロイを身にまとっている。同じアイアンナックでも、黄色いヨロイの連中とは段ちがいに強大な敵なのだ！

バトルポイント　リンク（E）、赤アイアンナック（5）で戦う。結果は？

●勝った……⇩388へ　**●負けた**……⇩397へ

84

骨をたち割る音とともに視界をマーゴの返り血が包んだ。宙を舞うマーゴの左手！　カラカラに乾いた土色の皮膚が、おぞましい。痛みにもがくマーゴの脳天にぼくはすかさずとどめの太刀をふりおろした。
真っぷたつに裂けるその体は腐臭に満ちた粘液となって溶けていく。**（LIFEエネルギー♡プラス5）**　⇩172へ

85

ぼくは、炎の川を一気に飛びこえて先に進んだ。
行手(ゆくて)にまぶしい光の点が見える。出口だ！　ぼくは遂(つい)に洞窟(どうくつ)を抜け出したのだ。
——次はいよいよ大神殿だ……。
ぼくは決意を新たにすると、着実(ちゃくじつ)な足取りで歩き出した。

⇩347へ

86

くやしいけど仕方(しかた)ない。ぼくは引き返すことにした。エレベーターに乗って上に登り、奥の部屋の扉(とびら)を開ける。

⇩114へ

87

ならず者たちは快(こころよ)く、とは言い難(がた)い態度でぼくを宿屋に案内した。崩(くず)れおちないのが不思議なほど古びた宿だ。この町では泊まり客もめったにないだろう。
出された料理は、カビくさい材料ばかりを煮こんだあやし気なスープで、こちらもお世辞(せじ)にもおいしいとは言えない。
……料理を口にしたぼくは、身体のしびれる感覚に襲われた。吐(は)き気。全身がけいれんをはじめる。もう自分では身動きもとれない。

ならず者たちのうすら笑いが、最後にぼくの目にやきついた。……ハメられたのだ。ヤツらは料理の中に毒を入れたに違いない。

ぼくの冒険も、ここで終わりだ……。

END

88

左の道は次第に広く大きくなっていく。しかも登り調子だ。思った通り――その道は洞窟の出口に通じていた。地上に出たぼくは、深呼吸をして新鮮な空気を胸一杯に吸い込む。遠くのほうに町が見える。

よし、あの町へ行って見よう。

●ラウルの町に行く……………⇩291へ　●ミドの町に行く……………⇩311へ

●サリアの町へ行く……………………………………⇩41へ

89

エレベーターがふいにがくんと停止した。故障か？　まだ下まで着いたとは思えないのだが……。

その時、手に持ったクリスタルの光が急に増した。まるで、ぼくに何かを知らせている

ようだ。
確か、こいつは妖精(フェアリー)のエネルギーを封(ふう)じこめたものだったよな。とすると……この近くに、強いエネルギーがあるってことか！
だが、そのエネルギーが正しい力なのか、邪悪(じゃあく)な力なのかまではわからない。
ぼくはエレベーターの中で、しばし考えこんだ。
扉(とびら)を開けて調べてみるか？

●扉を開ける……⇩265へ
●開けずに下へ降りる……⇩187へ

90

聖なるブーツを身につける。
ブーツには、人間の走る速さを二倍にするという不思議な力がある。ぼくは、助走をつけて一気に大岩を飛びこした。　**⇩318へ**

91

泉(いずみ)の周囲(しゅうい)に目を走らせてみる。右手のほうに、森の中へと続く小道があるのを発見した。
しっかりとした道のようだが、再び森へと引き返すのはどうも気が進まない……。

●右手の道を行く……⇩367へ
●泉にそって歩く……⇩171へ

92

ぼくの剣は深くゴーリアの胸をえぐった。どす黒い体液をまき散らしながら、ゴーリアは地面をのたうちまわり、やがて土と同化していった。（LIFEエネルギー♡プラス3）

「息子がこのような魔物にとりつかれていようとはな」

ふり返ると老人が立っていた。

「お爺さん……」

「早く行け。そうだ、宿屋に寄るがいい。主人がきっとお前の力になってくれるだろう」

老人は、息子を失なった悲しみをふり切るように言い放った。ぼくは……。

●宿屋へ行く……………⇩210へ　●もう町を出る……………⇩182へ

93

どすん。

ぼくは何かやわらかい物の上に落っこちた。（**タイムポイント・マイナス1**）

おかげでケガもせずにすんだ。手足のあちこちをすりむいた程度の傷は負ったけど、こんなの大したことはない。

助かった！　そう思ってホッとしていると、お尻の下から声がした。

「くぉらぁ～～～！　いきなりオレを下敷きにしよったな！　ぬしゃあ何者じゃ!!」

ぼくがあわてて飛びのくと、声の主はゆっくりと立ち上がる。
そいつは鳥の顔をしていた。アイアンナックのものより頑丈(がんじょう)そうな真紅(しんく)のヨロイで身を固めている。ヤツはぼくの顔を見て、

「お、おはんはリンク……ちょうどいい。オレはフォッカー。世界の征服をたくらむ秘密結社(けっしゃ)……もとい、神殿を守る最強の剣闘士だ。貴様(きさま)を倒すために待っとったとよ。いざ、尋常(じんじょう)に勝負するですタイ!!」

ぼくは思わず笑い出しそうになった。だが、フォッカーが並の強さでないことは知っている。今戦って勝てるか？

●戦う……⇩136へ
●逃げる……⇩196へ

94

別れぎわ、バグはぼくにこの町に住む賢者(けんじゃ)のことを教えてくれた。この町でも最長老のひとりというその賢者なら、きっとぼくの知りたがっている神殿の情報を知っているだろうと言うのだ。

●賢者の家に行ってみる……⇩123へ
●行かない……⇩240へ

95

前門のカロック、後門のマズラ。逃げようにも逃げ場なし。すべての状況が、ぼくにとって圧倒的に不利だった。

呪文もすべて使ってみた。が、まったく効果がない。しまいには、「ザラキ」だの「パルプンテ」だの、とんちんかんな呪文まで口走ったが、もちろんダメだ。

「おいっ！　何とかしてくれよ！　ここから逃げられさえすれば、後は何にも言わないから!!」

思わず口に出して叫んだ。そのとき、信じられないことが起こったのだ!!

突然、フェアリークリスタルがぼくの懐中から飛び出し、宙に浮いた。次の瞬間、赤い通路の中は聖なる光で埋めつくされる。ぼくはそのまま気を失い、倒れた。

……気がつくと、ぼくは大神殿の外に横たわっていた。意識は比較的はっきりしている。頭を振って立ち上がると、ぼくの頭脳の中に誰のものともわからぬ声が聞こえてきた。

「勇者ロト、じゃなくてリンクよ。妖精からの知らせで、お前を助けてやった。ここは大神殿の裏側だ。さあ勇者よ、もう一度トライだ！　そうすればきっと道は開かれる。ガノンを倒すのはそなたしかいないのじゃぞ!!」

「待って下さい。あなたはいったい誰です？」

「わし？　わしはこの世界を作り出した者じゃ。ただ今二十二歳……おっと、おしゃべり

が過ぎたようじゃな。では、さらば……」
不思議な声に励まされ、ぼくは再び大神殿に挑戦する！

⇩347へ

96

ぼくの剣はゲールの赤い口につきささった。ゲールは床をのたうちまわり、肉を溶かし骨だけになってもあばれ続けた。だがやがて骨はくだけて、ちりのようになって消えていく。
ゲールは死んだ。その後に、ハートの器が残されている。**（ハートの器入手。ただし今のレベルで持てるハートの器の上限を超える場合は取ることはできません）**
ぼくは外に出る。扉は、あっけないくらい簡単に開いた。

●エラーを知っている……⇩16へ　●知らない……⇩148へ

97

「よそ者には橋は渡せないよ」
門番は近づいてきたぼくを見るなり言った。とりつくシマもない。
「そこを何とかお願いします」
頼み込むぼくの言葉をまるで聞いていない。大あくびをしていかにも退屈という風だ。

96●ぼくの剣は、ゲールの赤い口に突き刺さった。ヤツは
床に倒れてのたうちまわる。やったぞ！

「まだ何か用かい？」
うーん、何だか腹が立ってくるなァ……。
●ムリヤリ入ってしまおう……⇩351へ　●町に入るのはあきらめよう　⇩169へ

98

ヤツはおそらく、ガノンの手下の中でも最強の部類に入る魔物にちがいない。小手先の呪文攻撃など通用しないだろう。今こそ、最強の呪文を使う時だ！
「サンダー!!」
光と雷鳴が、ぼくの視覚・聴覚を麻痺させる！
しばらくして、耳鳴りをこらえながらあたりを見回してみた。ゲールは落雷に直撃されて目を回している。それでも、ヤツはまだ死んではいなかった。
「ま、まさか貴様がその呪文を持っていたとは……」ヤツはうめきながら、こん棒をかまえた。
⇩170へ

99

マジカルキーをさしこむ。カギはたちどころに開いた。**（タイムポイント・マイナス1）**
中にはまた通路が続いていた。いったい何のつもりで道のまん中に扉なんか作ったん

98～99

だ? そんなことを考えながら進んでいくと、いきなり前方から湿った空気を切り裂いてブーメランが飛んできた。

とっさにシールドで受け止める。キーン! 鋭い音を残してブーメランは床に弾んだ。間髪を入れず、第二、第三の攻撃が襲ってくる。右に左にジャンプしてかわしながら、ぼくはブーメランの主をすばやく目で追った。

「おんどれがリンクか。すまんが、首とらしてもらうでえ!」

声とともに現れたのは、青い衣をまとったゴーリアだった。

「何言うてけつかんねん、このへげたれが」

ぼくは叫んだ。

「返り討ちにしてくれるわ!!」

「大きな口をたたく前に、うしろを見てみたらどうや」ゴーリアの言葉につられてふり向くと、そこには硬いトゲが無数に生えた殺人生物ミューがいつのまにか迫っていた。

ひええ! 前門のゴーリア、後門のミューってわけか!! これはしんどい戦いになりそう!!

まずどちらを先に攻撃する?

●青いゴーリアを攻撃……⇩141へ

●ミューを攻撃……⇩283へ

100

急降下してくるフォッケルに対し、剣をまっすぐ突き立てる！
剣はヤツの下腹を貫いた。串刺しになったフォッケルは、血をふき出しながら、もがく。
やがて、怪鳥のような（実際怪鳥なんだけど）悲鳴をあげて、動かなくなった。
ぼくがその場を立ち去ろうとすると、
「待てい！　わしの大事な友だちを……」
怒りに燃える目で、さっきの老婆がぼくをにらんでいる。
「貴様は、貴様は……!!」
何だかよくわからないが、どうもぼくは悪いことをしてしまったらしい。こういう時は逃げるに限る。ぼくは通路を全速力で走り出した。
「こらあ――待てい！」
ごめんよ！　ばあさん。今度来た時、十分おわびするから許して!!

⇩441へ

101

岩陰に身を隠して、何とか落石をふせぐ。だが、このままじゃどうにもならない。
急いであたりを見回したぼくは、自分の背後に小さな横穴があることに気がついた。飛んでくる岩に注意しながら、あわててその横穴へと飛び込む。

かなり狭(せま)い穴だが、意外に奥は深い。先へ先へと進んでみよう。

⇩395へ

102

今のレベルは4以上で、LIFEエネルギー♡は20個以上あるか？

●YES……………⇩28へ　●NO　…………⇩381へ

103

だめだ……どこまで行っても闇(やみ)また闇。あきらめちゃいけない、どこかに出口はきっとある……。

闇の中を手探(てさぐ)りで進んでいたぼくの意識が、突然混乱(こんらん)した。ふっと意識が遠のくような、夢の中で夢を見るような、そんな感覚がぼくを捕える。

空間のひずみに巻き込まれたんだ！

ぼくは知らない間に空間のゆがんでいる場所に踏み込んでいたのだ。だが、そう悟(さと)った時はもう遅かった。やがて、ぼくの意識は完全にブラックアウトした。

⇩383へ

104

ぼくはまっ暗な洞窟を手さぐりで歩いていった。
ガサガサガサ……。
何かが近づいてくる物音がする。あっと思った時には、無数の触角がぼくをとらえていた。こいつらは、人の生命エネルギーをエサにしているらしい。体の力がみるみるうちに抜けてくる。**(LIFEエネルギー♡マイナス2)** さては、こいつがローダーだな!
必死にローダーの触角を振りほどき、転がるように洞窟の中を走った。

⇩59へ

105

ゴーリアはまだこちらに気づいていない。いま斬りかかれば、あっけなくカタをつけることはできるだろう。だが、不思議なことにヤツからは、魔物特有の妖気が感じられない。攻撃の意志はないのだろうか……。
しばらくして、ゴーリアは人の気配を感じたらしくゆっくりと振り向いた。
「これはこれは、リンクはんじゃにゃーきゃ。久しぶりだがや」
ヤツは人なつっこい笑みを浮かべてぼくのほうへ歩いてきた。
「おっと、そんなにこわい顔をするんじゃにゃーよ。これでも心をいれかえてまっとうに暮らしとるんだぎゃー。ガノンのとこで働いとったって給料は安いし、わしみてゃーな

下っ端はおみゃーに斬り捨てられるのがオチだがや。こな商売さっさとほかして捨てて、カタギになったほうが安穏に暮らせるってもんだぎゃー」
どうやら、その言葉にウソはなさそうだ。ぼくとしても、ムダな戦いを避けられるならそのほうがいい。
「ところで、おみゃーさん知っとうがや？　ガノンはあんさんを抹殺するためにごっつう強いヤツをふたり用意してるそうだぎゃ。ただ、そいつらは何だか〝聖なる音色〟にだけは弱いそうじゃけど……」
なんだなんだ。こいつ、わざわざぼくに情報まで教えてくれるっていうのか⁉
でもまあ、大神殿の手がかりが得られたことはなによりだ。ぼくはゴーリアに礼を言いなにがしかの小銭を恵んでやった。
「へえへえ、毎度すまんだにゃー」ヤツはもみ手をしながら、ぺこぺこ頭を下げた。
ぼくはゴーリアと別れ、先へ進もうと部屋の中を見回した。

⇩9へ

106

現在のLIFEエネルギー♡の数は？

●9以上……⇩334へ
●8以下……⇩252へ

107

どちらの部屋に先に入ったか？

●右……………………⇩197へ　●左……………………⇩350へ

108

ゴーリアのブーメランに気をとられるとヤツの術中にはまる。

ぼくはヤツの懐に飛びこんだ。至近距離ではブーメランを使うことはできない。接近戦で勝負だ！

得意技を封じられたゴーリアは、あわてて逃げようとした。

させるかっ！　ヤツを壁ぎわに追いつめ、剣を手に飛びかかっていく。

「や、やめてくれ。わてはまだ死にたくないのや！　ちょ、ちょっと待っ……うぎゃ〜!!」

おまえの命ごいを聞いていたら、いくら命があっても足りないよ！　ぼくはその場でヤツにとどめを刺した。うしろにいたはずのミューもいつのまにか姿を消していた。ゴーリアがやられたことで戦意を失ったらしい。弱虫め！

⇩202へ

109

つぼをとった途端、足元に無数の亀裂が走った。ここももうすぐ崩れ落ちる！

「ジャンプ！」
呪文をとなえた瞬間、ぼくの体は羽根のごとく軽やかに舞う。かろうじて脱出に成功した!!

⇩261へ

110

ぼくは黄色の扉を開けた。
その扉のむこうにいたのは――なんと、アイアンナック！
全身をヨロイで固めた強大な亡霊剣士だ。こいつは黄色のアイアンナックだが、あなどることはできない。
バトルポイント　リンク（C）、アイアンナック（4）で戦う。結果は？

●勝った……⇩45へ
●負けた……⇩430へ

111

ぼくは、今持っているすべての呪文をフォッカーに向かって唱えた。
だがヤツはまったくこたえた様子がない。ぼくは呆然とした。
「おはんの呪文もそれで終わりでごわすか。今度はこっちから行きますタイ！」言うが早いか、ヤツは剣をふり上げ飛びかかってきた。

ぼくは必死でフォッカーの攻撃をかわした。だが、ヤツとぼくとでは剣の腕に天と地ほどの差がある。たちまちぼくは剣もシールドもたたき落とされてしまった。
丸腰になった僕を、フォッカーはまるで狩りでも楽しんでいるかのように追いつめていく。ぼくの体中に、無数の傷がきざみこまれた。
そのくせ、ヤツはわざと急所をはずしてとどめを刺そうとしない。
「くそっ！　さっさと楽にしろっ!!」
ぼくは息もたえだえになって叫んだ。
「そんなに死にたいでごわすか。ならば望み通りにしてやるたい！」
フォッカーはあざ笑うと、ぼくの脳天に剣を振り下ろした。今度こそ終わりだ……。

END

112

ヤツを傷つければ、ぼくも傷つくことになる。これでは、たとえ勝利しても、ぼく自身まで息絶えてしまうではないか！
ぼくはいったん退いて戦い方を考えようと思った。だが、殺すことに無上の喜びを感じているもうひとりのぼくは、鋭い出足でぼくの逃亡を許さない。ヤツのふるった剣を右肩に受け、苦痛のあまりうめき声をあげる。

その時、ぼくはあることを考えついた。ヤツはぼく……ぼくはヤツ……ぼくを傷つければヤツも傷つく……。

ぼくは静かに剣を抜き、自分の腹にゆっくりと突き立てた。流れ出す血が床を濡らす。

ふたりのぼくは、まったく同じ体勢で倒れこんだ。本体の命を断つことによって、影の命をも断ったのだ。

しかし、この幕切れはあまりに……悲しすぎる……。

END

113

強い！　フォッカーの実力はケタ違いだ!!

ぼくは鳥人剣士の鋭い攻撃を受け止めることだけで精一杯。やはりこいつに勝つことはできないのか……。

やぶれかぶれで剣を振り回し、フォッカーに突っこんでいく。その時、奇跡ともいうべきことが起こった！

ぼくの剣を受けとめたフォッカーが、汗で自分の剣をとり落としたのだ。チャンス！　すかさず剣を下からすくい上げる。血しぶきをあげ、鳥人の右腕が宙に飛んだ。

「ぐおうっ！」

さしものフォッカーも、苦痛にうめく。ぼくは剣を構え直し、体ごとヤツにぶつかっていった。

……やったのか!?

気がつくと、ぼくの剣は鳥人の下腹に柄まで刺さっている。

「よくぞオレを倒したな。ばってん、オレんごときにこぎゃん手間をかけちょったら、ガノン様には勝てんタイ……」捨てゼリフを残し、フォッカーは絶命した。

不思議なことに、ヤツが息をひきとると、その死体はまばゆい光に包まれた。その光がおさまった時、ぼくは最後の間に立っていた。

⇩17へ

114

扉を開いて中に入る。だが、部屋の中はからっぽ。あたりを見回したけど、何もなさそうだ。

部屋の中をあちこち歩く。部屋のまん中まで来た時、ふいにぼくのまわりの景色がすべるように上に動いた。

同時に、落下していく時のくすぐったい感覚がぼくを襲う。一瞬、何が起こったのか理解できなかった。

⇩280へ

115

ガノンの挑発に乗ったら、ヤツの術中にはまる。ぼくはかまわず姫のもとへかけ寄った。
「大丈夫ですか！」急いで鎖を解く。
その刹那、姫の瞳が金色に光った。
なにっ!?
ぼくはあまりのことに言葉を失った。どこに隠し持っていたのか、姫は短刀を抜くと刃も折れよとばかりにぼくの右胸に突き立てたのだ。
「な、なぜ……。」
必死に姫から離れる。**（LIFEエネルギー♡マイナス15）**だが、姫は金色の目をこちらに向けると、無表情のまま立ち上がり、一歩一歩こちらへ近づいてきた。

⇩**254**へ

116

ゾーラはその口から強力な光線を発する。背後から狙われたら、イチコロだ。まずこいつから倒さねば……。
ヤツは首を左右に少しづつ動かしながら、ゆっくりと口を開いた。光線を吐こうとしているのだ！
そうはさせるか！

イチかバチか——ぼくは手にした剣をヤツに向かって投げつける。
「グエエ——ッ！」
剣は見事にヤツの口に突き刺さった。ゾーラは沼のほとりに倒れ込む。剣の切っ先が後頭部から突きでている。ぼくはすぐにゾーラの死体から剣を引き抜いた。
そしてすかさずギルボックのほうをふり返る。ヤツは目を閉じていた。その状態のギルボックには、いかなる攻撃もきかないという。戦うだけムダということか……。
ギルボックは相手にせず、すぐにその場を離れる。

⇩53へ

117

念のため、ローソクを取り出してみた。神々しい光が、あたりをすみずみまで照らし出す。
そこに広がった光景を見て、ぼくは仰天した。何だこれは！　天井に無数の目が開いている。その目はすべて、ぼくのほうをじっとにらんでいた。
モアだ！　生きた人間にとりつき、精気を吸いとって輝く邪悪なヒトダマ——こんなのに束になって襲いかかられたら、いくらぼくでもたまったもんじゃない。ミイラにされるのはごめんだよ！

●戦う……⇩294へ
●逃げる……⇩373へ

どうやらぼくの挑んだ戦いは無謀だったようだ。大男は軽々と大ぶりの剣をふりまわす。そして何度目かに、ぼくの体をその剣がかすめた。激痛に耐えかねてぼくの体は床に倒れ込む。意志とまったく反したその動作。（LIFEエネルギー♡マイナス3）
人垣の中から数人の男がぼくを助けようととび出してきてくれた。お陰で事なきを得たがぼくは恥かしさとくやしさでいても立ってもいられなかった。

●もう町から出よう……………………………………⇩57へ
●とりあえずその場から逃げる……………………………⇩247へ

118

119

道なき草原をぼくはどこまでも突き進んだ。密生した灌木を押し分けて前へ出る。
その時、目の前に横たわっていたヤツを見てぼくは息をのんだ――ゲルドアームだ！
ゲジゲジかムカデのようなかっこうをしたそいつは、全身からシュウシュウという不気味な音をたてている。しかもこいつは、その鋭い牙に猛毒をひめているのだ。
どうしよう、ヤツはまだぼくに気がついてはいないようだが……。

●戦う……………⇩238へ　●引き返す　……………⇩11へ

120

久し振りに町を目にして、ぼくはむしょうに人恋しくなった。町——あそこには人が大勢いることだろう。もちろん食べ物だってあるに違いない。もうたまらない。ぼくは、急いで岩山を駆(か)け下りた。

●ラウルの町に向かう……⇩158へ　●ミドの町へ向かう……⇩318へ
●サリアの町へ向かう……⇩201へ

121

ここはどこだろう……。

さっきと同じ道を引き返していたはずなのに、まったく見覚えのない場所に出た。洞窟(どうくつ)の中なんて、どこも似たようなものかもしれないが、そこは明らかに初めて通る場所だった。知らない間に別の横穴へ入り込んでしまったのかもしれない。こんな所で迷子(まいご)になるなんて……。地底の堂々めぐりなど、考えただけでもゾッとする。ぼくは不安を打ち消すように頭をふると、一層(いっそう)、足を速めて先を急いだ。

⇩204へ

122

突然、ヤツの目から一条(いちじょう)の光線(ビーム)がほとばしった！　かろうじてその一撃をかわす。轟音(ごうおん)

ともに、ぼくの背後の壁がガラガラと崩れ落ちた。何て破壊力だ！
こんな光線に当ったらそれこそひとたまりもない。
こりゃだめだ――ぼくは井戸の水をあきらめ、あわてて廃墟を後にした。（LIFEエネルギー♡マイナス2）
しかし、のどの乾きはひどくなる一方だ。もはやこれまでか……。
いや、待て。あれは何だ！
その時ぼくの目にうつった、泉の風景。それは蜃気楼のようにユラユラとゆらめいている。あれは本物の泉か、それともただの幻か？

●行ってみる……………⇩185へ
●行かない　……………⇩404へ

123

賢者の家へむかった。大きな通りに面した立派な家だ。
ぼくを出迎えたのはぼくと同じくらいの年齢の女の子だった。賢者の孫娘だろうか？
ぼくは訳を話し、賢者に会わせてほしいと頼んだ。
「ええ、それは構わないけれど……」
少女は口ごもった。彼女は――実は賢者のひ孫だと言うのだが――会っても無駄かもしれないと言うのだ。

「お爺さんはもう百歳をとっくに越えているの。だから最近はもの忘れもひどくて……」
何ていうことだ！　せっかく神殿の情報が手に入ると思っていたのに……。
「でも、会っていってほしいわ。今は誰も訪ねてくれる人もいなくて寂しい思いをしていると思うの」
哀願するように彼女は言う。ぼくは……。

●とにかく会ってみる……⇩47へ
●会わずにほかへ行こう……⇩240へ

124

行けども行けども、眼前に広がっているのは乾いた砂山だけ——気も狂わんばかりの熱気は、ぼくの体力を刻一刻と吸い上げていく。
水……水……。
その時、かすみかけたぼくの目に、蜃気楼のような影がうつった。
それは、砂漠にうちすてられた廃墟だった。人の気配はまったく感じられない。ぼくはフラフラとその廃墟の中へと入り込んだ。
中はひっそりと静まり返っている。
ぼくは井戸を求めて廃墟をさまよった。
あった！　中庭に、古びた石造りの井戸が見える！

我を忘れて井戸へと駆け寄る。だが、その時、ぼくは井戸の近辺に潜む何かの気配を感じとった。ぼくが足をとめるのと、井戸の手前の地面がボコッと盛り上がるのが同時だった。――何だ？

手を反射的に剣の柄にかける。

テクタイト！　おそろしく長い四本の足を持つひとつ目のお化けグモ――。

おそらくこいつは井戸の前に潜んで水を求める旅人を捕えていたに違いない。何てことだ！　せっかく水を目の前にしたというのに……。

●戦う……⇩19へ
●逃げる……⇩404へ

125

彼女はぼくを一軒の古びた宿屋に案内した。何のことはない。ぼくを旅の途中と見て客にしようと声をかけたのだ。

「見てくれはこの通りのあばら屋だけどね。ここの親爺の料理はちょっとしたもんだよ。絶対損はないから宿はここにお決め」

中年女はしたたかに笑って宿代を言った。どのくらいふっかけてくるんだろうといぶかしんだが、あっけないくらい安いものだ。

●宿屋に入る……⇩210へ
●入らない……⇩133へ

126

ぶうんとうなりをあげて飛んでくるこん棒をシールドでうけとめる。だが、ヤツのこん棒の破壊力の前に、あらゆる防御は無力だった。シールドにたちまちヒビがはいり、バラバラになってしまう。

間髪を入れず、次の攻撃が襲う！　今度は剣ではじき返そうとしたが、こん棒は剣もろともぼくの体をまっぷたつに両断した。

END

127

「リフレックス」の呪文さえあれば、ヤツの火の玉攻撃をはね返すことができるのに……。だが、そんなことを言ってる場合じゃない。こいつを倒さないことには、先へ進めないのだ！

バトルポイント　リンク（I）ファイアモア（3）で戦う。結果は？

●勝った……………⇩440へ　●負けた…………………⇩231へ

128

星ひとつない闇夜の草原。こわくないと言えばうそになる。だがぼくにはやらなければ

ならないことがある。この闇の向こうに、大いなる使命が待っているのだ。

突然、風が止んだ。不吉な気配にぼくは思わず足をとめた。

前方に何かいる！

ぼくは闇の中で目をこらした。その輪かくが次第に明らかになるにつれ、ぼくの動悸ははやまっていった。

闇に光る真っ赤なふたつの目。凶暴な獣のような吐息。

――闇の中にたたずんでいたのはメグマットだ！

そいつの目は、憎悪と敵意に燃え上がっている。どうやら、戦いは避けられそうにない。

⇩143へ

129

扉に手をかけてみた。もし中に人がいたら泥棒扱いをされるかもしれない。袋だたき、なんてことにもなりかねない……。

だが、扉には固く錠がおろされていた。押しても引いてもビクともしない。こりゃダメだ。ぼくがあきらめようとしたその時、

「あなたは誰？」

か細い女の声が、家の中から聞こえた。やはり人は居たのだ。皆、何かを怖れ、昼間か

ら家中の窓も扉も閉めきって隠れていたのだ。この町もすでに、魔物たちに支配されているのだろうか？

●「旅の者だ」と答える…………⇩77へ

●答えずに先へ行く…………⇩194へ

130

ようやく出口が見えてきた。バゴバゴの大群ももう追ってはこない。

やれ、助かった——。

ぼくは洞窟を抜け出ると、思い切り深呼吸をした。

さあ、次はいよいよ大神殿だ！ ⇩347へ

131

「リンク、お前は力を得るにふさわしい戦士だ」

エラーはサンダーの魔法を授けてくれた。呪文を唱えるとその言葉が稲妻となって敵を撃つ。——最強の魔法だ。**(サンダーの魔法入手。チェックリストに記入)** ⇩361へ

132

ヤツは長大な剣を引き抜いた。まともにやりあってはとてもかなう相手じゃない。だが、

何としてもここを突破せねば……。
——ブン！
ジャーマフェンサの剣がうなりを上げて振りおろされた。その瞬間、ぼくは思いきり跳躍する。
「くらえっ！」
両手で握った剣を前に突き出してヤツの懐へととびこむ。
やった！　ぼくの剣がヤツの胸を深々と貫く。ジャーマフェンサは一言も発せぬまま、砂と化してその場に崩れ去った。
ふう……。
大きく息をついて額の汗をぬぐう。おそろしい敵だった。ひとつまちがえればやられていたかもしれない。ぼくは今さらながらに震え、後にのこされたわずかばかりの砂をながめた。
「おや？」砂の中に何かがある——何だ、あれは？
ぼくは砂山のほうへこわごわ近寄った。これは、もしかしたら……。
そうだ、やっぱり聖なるブーツだ！　思わぬ発見にぼくは踊りあがった。こいつはツイてる!!　**（聖なるブーツ入手、チェックリストに記入。これよりタイムトライアルの際の経過時間が半分になります）**

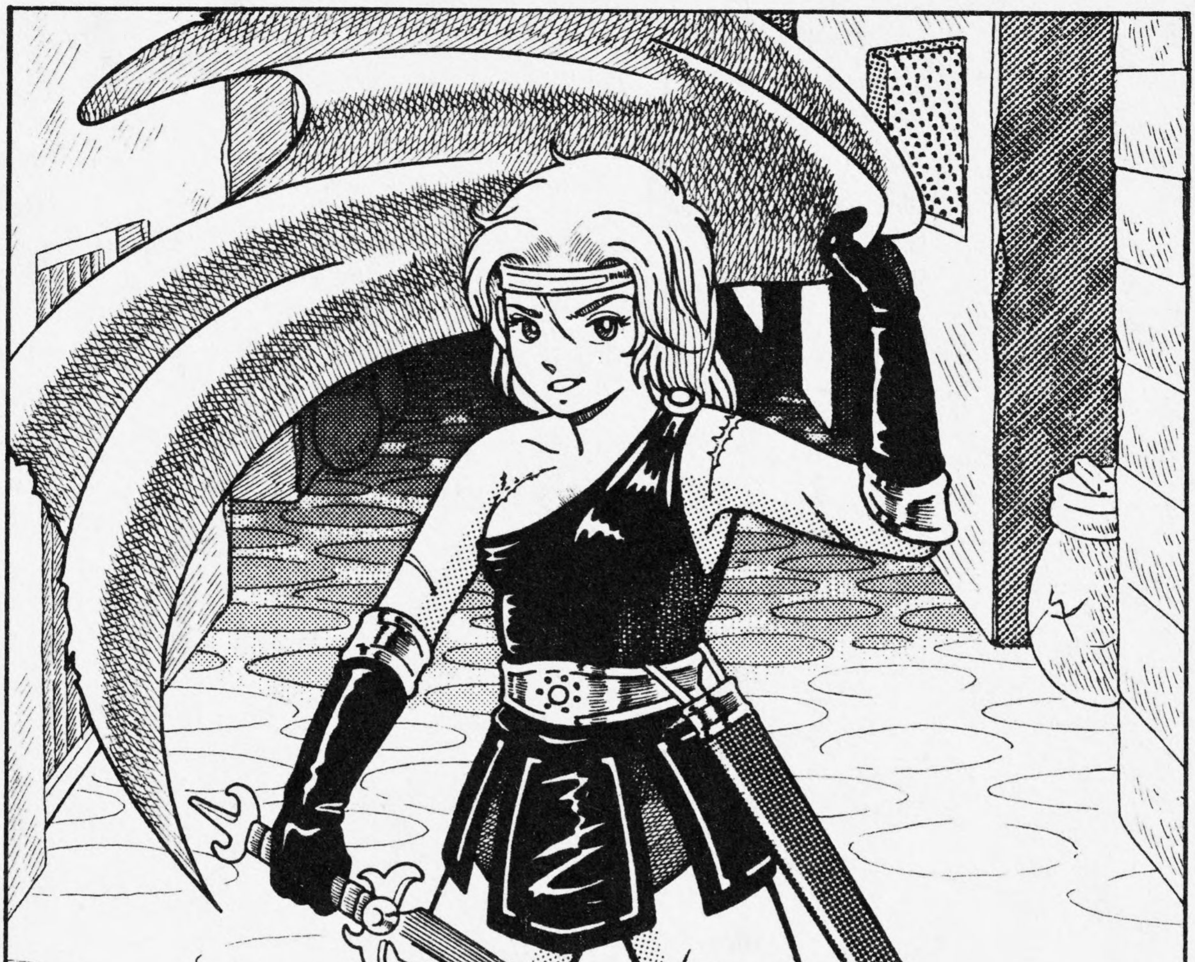
130～132

●ラウルの町に行く…………⇩291へ
●ミドの町に行く…………⇩311へ
●サリアの町に行く………⇩41へ
●ミドロ沼の神殿に行く ……⇩429へ
●王家の谷の神殿に行く……………⇩305へ

133

「ちょっとお待ちよ」
路地に入ったところでぼくは冴えた女の声に呼びとめられた。振り返るとひとりの女戦士がぼくのほうをにらんで立っている。
「旅の途中の戦士と見たが……？」
「ええ、そうですけど」
ぼくの答えを最後まで聞かないうちに、女戦士は剣を抜いた。この狭っくるしい路地で辻試合をするつもりなのか？
「私も旅の途中だけど金が底をついてね。……どちらかが剣をおとすまで。いいだろう？」
挑むように言って、女戦士はマントをぬぎ捨てた。あらわな肌に、いくすじもの傷が蛇のように這う。その醜い傷を人目にさらしながら、むしろ彼女の表情は誇らし気だ。
背中を見せれば今にも斬りかかってきそうな勢いだ。ぼくは剣を抜き、彼女の前で構えをとった。

133



133 ●ぼくに辻試合を挑んできた女戦士は、さっとマントを脱ぎ捨てた。女とはいえ、かなり手ごわそうだ。

バトルポイント　リンク（F）、女戦士（4）で戦う。結果は？
●勝った……………⇩228へ　●負けた……………⇩281へ

134

念には念を入れ、聖なるローソクで照らしてみた。だが、老人の実体はそのままだ。ぼくは、彼が本当の味方だと確信した。ところが……。
「リンク、そなたにいいものを授けよう」
老人は、だしぬけに妙な呪文を唱えはじめた。と同時に、体が石のように硬直して動けなくなる。すっかり味方だと信じきっていたぼくは、あわてて叫んだ。
「貴様、何者だっ！」
●何とかして剣を抜き、戦う⇩208へ　●リフレックスの呪文を唱える⇩387へ
●観念して、なすがままにまかせる……………⇩310へ

135

子どもたちは、パルタムに人質として誘拐されていたのだ。町の人は子どもたちの身を案じて、殺りくをくり返すパルタムを、野放しにせざるを得なかったのだろう。
ぼくは子どもたちをそれぞれの家に送りとどけてやることにした。だが、どの家も固く

扉(とびら)を閉(し)めている。町の住人は、どこかに集まって隠れているのかもしれない。
子どもたちの母親は、ある一軒の家に集まっていた。

⇩43へ

136

現在のレベルは4か？

●YES……⇩392へ
●NO……⇩24へ

137

エレベーターの前には、ほの暗い通路が目の前を横切っている。右も左も、奥のほうは暗くて何があるのかわからない。どちらへ行くのが正しい道なのだろう？

●右へ行く……⇩236へ
●左へ行く……⇩337へ

138

聖なる笛を取り出し、吹いてみた。
妙(たえ)なる音色(ねいろ)が、部屋中に満ちあふれる。だが、壁のすき間はぴくりとも動かなかった。

⇩259へ

139

ここまで来たからには、もうできるだけ早くここを突破するしかない。しかも、なるべくヤツらに気づかれないように……。
ぼくは足音を殺して静かに先を急いだ。全身に気味の悪い汗がふき出してくる。
突然、ボトがいっせいに落下しはじめた。しまった、気づかれたか！
次々に落ちてくるボトをかわしながら、ぼくは全速力で走った。だが、ヤツらの数はそれこそ無限と言ってよかった……。

⇩４２６へ

140

これ以上時間が経過すると、姫の命にかかわる。もはや一刻（いっこく）を争う事態になっているのだ！
ぼくは、抜け穴に入ることを決意した。これは大きな賭（か）けだ。もし失敗した時は、自（みずか）らの手で命を断（た）つ覚悟（かくご）だった。
橋の上から、穴に向かって飛び降りる。ぼくの体は、すっぽりと穴の中へ吸いこまれた。極彩色（ごくさいしき）の渦巻（うずまき）が、ぼくの周囲をすごい勢いで流れている。やはりこの穴はワープゾーンだったのだ！　そして渦巻が消え去った時、ぼくは毒々しい紫色の部屋へと移動していた。

⇩２６２へ

141

ミューは、ゴーリアにあやつられているようだ。それなら、ゴーリアをたたけばミューとも戦いやすくなるはず！　ぼくは剣を抜き、青い狼と対峙した。

バトルポイント　リンク（D）、青ゴーリア（4）で戦う。結果は？

●勝った……………⇩108へ　●負けた……………⇩219へ

142

目的もないままに町をうろつく。だが何も起こらなかった。何人かの人に情報を求めたが、皆一様に首を振って去っていく。町の住人は魔物の巣食うこの土地で、あえてそうしたものから目をそむけて暮らしているのだろうか……。

結局、歩き回ったのは無駄骨だったようだ。いつまでもこの町にいてもしかたないかもしれない。

●もう町を出る……………………………………⇩57へ
●やはり女の言っていた老婆に会いにいく……⇩320へ
●もう少しこの町にとどまって様子を見る……⇩218へ

143

すばやく接近し、勢いよく剣を振りおろした。
だが、ぼくの剣はむなしく宙をきる——。
ヤツの姿が消えた！
どこだ、ヤツはどこに行った!!
その時、異様な気配に空をふりあおいだぼくの目に、メグマットの黒い影がうつった。
上だ！　ヤツはぼくの頭上に跳躍したのだ。
とっさに横に飛びすさって、上空から襲いくるヤツの鋭いツメをかわす。
間一髪！　だが敵の攻撃は少しもおさまらない。ヤツは再び空中へと跳躍した！
そんなことが何回続いただろう。戦いは果てしなく続いた。

バトルポイント　リンク（J）、メグマット（3）で戦う。結果は？

●勝った……………⇩427へ　●負けた　……………⇩32へ

144

バゴバゴだ！　体がすべて骨でできているおそるべき肉食魚——その大群が、口から火の玉を吐き出しながらやってきたのだ！
ああ、何てやっかいな連中に出くわしてしまったんだろう！　**（LIFEエネルギー♡**

マイナス2）
●リフレックスの魔法を持っている⇩248へ　●持っていない…………⇩290へ

145

ぼくは男の子の手を引いて広場へもどった。まだベソをかいている男の子に父親の特徴を聞きながら人ごみをかきわけるように歩く。いったい広場を何周したことだろう？　ぼくは、くたびれてその場にへたり込んでしまった。（LIFEエネルギー♡マイナス2）

その時、
「あ、父ちゃんだ！」
突然、男の子が声をあげた。
ずんぐりした体つきの大男が、ぼくたちの前に立っている。
「勝手に歩き回ってはいけないと言っただろう」
「ごめんなさい。お兄ちゃんが一緒に探してくれたんだよ」
今泣いたカラスが……。男の子はもうゴキゲンになっている。
「君も旅の途中かね？　俺はサリアという町から来たんだが。どうだね、一緒に食事でも。お礼にご馳走しよう」
男はそう言ってぼくを誘ってくれた。

●せっかくだからご馳走になろう……………………⇩221へ
●やっぱり断る……………………………⇩257へ

146

あえて薄氷を踏む思いをする必要はない。目ざす最後の門はもうすぐのはず。ここは、遠回りでも安全策をとろう。

ところが……。

橋の向こうに道はなかった。あるのは、高々とそびえる青い壁ばかり。おまけに、ぼくが渡り終わると同時に、橋は音を立ててがらがらと崩れ落ちてしまったのだ！　退路を断たれ、進路をふさがれてはもはやなす術がない。

ぼくはその場にぺたんとすわりこんでしまった。虚脱感だけが体を支配する。

ああ、なんてむなしい終わり方なんだ。

ひゅううう……。

END

147

海岸近くの丘に建っている神殿に向かって歩を進める。

神殿は、訪れる者すべてを拒んでいるようだった。白亜の石柱が、あたかも天に挑戦するかのように高くそそり立っている。

だが、ぼくはこの中から聖なる十字架を取ってこなければならない。中にどんな恐ろしい敵が待ちかまえていようとも……。

ぼくはくずれかけた石の扉を開け、神殿の中に入った。

入ると同時に、門は固く閉ざされる。

（これより先、神殿を出るまではタイムトライアルになります。制限時間は5ポイント）

入ってすぐの所にエレベーターがある。さっそく乗りこみ、地下に向かった。

⇩312へ

148

ぼくはしばらく旧市街をうろついた。だがこれと言った手応えは何もない。ここにはもう手がかりはないのかもしれない。だとすればいつまでもここにいては時間のムダだ。

●もう新市街へは行った……⇩169へ

●まだ行っていない……⇩393へ

149

アルローダの弱点はあの大きなひとつ目だ。目を、目を狙うんだ……！
ぼくは何とかヤツの懐ろに飛びこもうと、じっとスキをうかがう。
突然、ヤツの巨大なハサミがふりおろされた。
——ブン！
うなりをあげてくり出されるハサミを、ぼくは必死でかわす。ヤツのしっぽにも気をつけろ……アルローダのしっぽには猛毒があるんだ！
再び襲ってきたヤツのハサミを、ぼくは剣ではじいた。今だ！
鋭いキバをのぞかせたヤツのあごの下にころがり込んで、ヤツのひとつ目めがけて、下から思いきり剣を突き上げる。
グエ——ッ！
アルローダはひっくり返って地面をのたうち回った。ツメ状になったしっぽの先からは透明な液体が飛び散っている。もしあのツメがぼくの体に触れていたら……。
そう思うとゾッとした。**（LIFEエネルギー♡プラス3）**

⇩**326**へ

150

目の前に飛んできた首に向かって剣をふるった。だが、宙を舞う首はぼくの剣を何なく

149 ●アルローダのハサミが、うなりをあげて襲ってきた。
剣を立て、ぼくはヤツの攻撃をはねのける！

かわす。
くそっ、何だ、この首は!?
ぼくは空中の首を剣で必死に追い回した。
うわっ！
突然、背後から何かが斬(き)りつけてきた。首なしのジャーマフェンサの体だ。
そうか、首をとばして相手をひきつけ、そのスキに本体が襲いかかる――それがこいつの戦法か！（**LIFEエネルギー♡マイナス6**）
そうとわかれば、おとりの首なんか相手にしちゃいられない。ぼくは首なしジャーマフェンサのほうへと向きなおった。さあ来い！

⇩**445**へ

151

歩いているうちに旧市街のはずれに出た。大きな古い建物がある。まるで幽霊屋敷のようだ。
妙(みょう)なことだが、この幽霊屋敷が、ぼくを呼んでいるように感じる。この中に、いったい何があるのだろう……。
ぼくはいても立ってもいられなくなった。何かがある。何かが、ぼくを待っている。

●入ってみる……………⇩**309**へ　**●まずは人に聞いてみる**　………⇩**10**へ

152

先に進むにつれ、その道はどんどん細くなっていった。道はやがて草むらの中に完全に消えていった。
いつの間にか本道からはずれてしまったのかもしれない。
とにかくぼくは、見渡す限りの草原のまっただなかで立往生してしまったのだ。こうなったら、適当に方角だけを決めてどこまでも突き進むしかない。

●南へ行く……⇩119へ　●北へ行く……⇩431へ

153

神殿の中の通路は、壁といい天井といい、すべてがまっ白だった。おかげで、光があまりさしこまないにもかかわらず、中は非常に明るい。
通路を進んでいくと、ふいに前方から宙を裂いて、こん棒が飛んできた！
とっさにジャンプしてかわす。
こん棒は背後の壁を直撃し、壁は一瞬にして粉々になった。
何という破壊力だ！　ぼくが茫然としていると、こん棒の主が悠然と姿を現した。
そいつは大トカゲだった。青いヨロイと盾に身を固めている。
「オレの名はゲール。魔界から来たガノン様の援軍だ」

ヤツは名乗ると、星型鉄球のついたこん棒を軽々と振り回しながらぼくに迫ってきた！

●戦う……………………⇩66へ　●逃げる ……………………⇩338へ

154

レボナックはいったん退く（しりぞく）と、剣を構え（かまえ）、じりじりと間合い（まあい）をつめてきた。
ヤツとぼくの視線が火花をちらしてからみあう。
その緊張の糸が極限（きょくげん）まではりつめた時、レボナックとぼくはほとんど同時に地をけってジャンプした!!

バトルポイント　リンク（G）、レボナック（7）で戦う。結果は？

●勝った……………………⇩336へ　●負けた……………………⇩340へ

155

相手がいかにせん多すぎた。たちまち無数の目玉にとりつかれる。
体中の力が急速に抜けていく。ぼくの体は、たちまちカサカサになって朽ち（くち）はてた。
モアたちは勝ち誇っ（ほこっ）たように空中を飛び回る。邪悪（じゃあく）な青い光が、通路に満ちあふれた。
無念だ……。

END

155 ●ぼくは、たちまちモアの大群にとりつかれた。体の力が急速に抜けていく。無念だ……。

156

バサバサバサッ！

突然、異様なはばたきの音が聞こえた。ぼくは剣を引き抜いて身構える。敵か？

うわっ!!

巨大な黒い影がぼくの頭をかすめた。エークだ！　暗闇に巣食う残忍な吸血コウモリ！

⇩365へ

157

その岩のすき間を奥へ奥へと入り込んでいった。それがいったいどこまで続いているのか、見当もつかない。

やがて、道幅がわずかに広くなった。ぼくはようやく歩調をゆるめる。

その時、前方の天井に何か大きなものがぶら下がっているのがぼんやりと見えた。

何だろう――？

目をこらしてそっちを見る。近づくにつれ、そいつの輪郭が次第に明らかになっていく。

ボトマスターだ――それも超大物の！

バトルポイント　リンク（B）、ボトマスター（2）で戦う。結果は？

●勝った……⇩52へ　●負けた……⇩76へ

158

ぼくはラウルの町の入口にたどりついた。
町の規模はそれほど大きくはないが、人の出入りは多い。この町ならあちこちから情報が集まっているだろう。先を急ぎたい気もするが、神殿のことを教えてもらえるなら、それにこしたことはない。

●町へ入る……………⇩359へ　●入らない ……………⇩182へ

159

だめだ。いくらやってみても、同じ所をぐるぐる回るばかり……。
そのうち体力も尽きてきた。ぼくはその場にがっくりと膝をつく。
今ぼくにできることは何もない。むなしく時間が経つのを見送っていくこと以外は……。

END

160

ぼくは心に決めた方向をただまっすぐに行くことにした。うん、やはりそれが一番だ。
しばらく行くと、大きな岩がある場所に出た。その岩の上には、小さな白い花が咲いている。立ちどまってその花を眺める。

だが、よく見ると、その花を中心としてあたりの景色がユラユラとゆらめいている。
何だろう？　ぼくは思わずその花の方へ足を踏み出した。
その時、激しいめまいにも似た感覚がぼくを襲った。
いけない！　ここは空間の裂け目なんだ!!
悟った時には、もう遅い。次の瞬間、ぼくは完全に気を失っていた。

⇩65へ

161

暗がりの中を、さらに手さぐりで進んだ。人のいる気配はある。気配は床をすべるように動いている。前方かと思えば背後、背後かと思えば頭上――。
ぼくは次第に大きな不安を抱きはじめた。敵は何十人となく存在し、ぼくをとり囲んでいるのか？　それともとびぬけて素早い動きなのか、それとも……それとも……？
突然、気配は背後からぼくを襲った。その瞬間、ぼくはようやく暗がりに慣れた目に敵の姿をとらえた。
二本の角を持つ仮面。せせら笑うような目、いや、目ではない。本来、目のあるはずの位置には、闇よりなお暗いふたつの穴がある。
パルタムだ！
暗い宙をヤツの剣が舞った。正確にぼくめがけて振り下ろされる。とっさによけはした

が、わずかにその剣はぼくの体をかすめた。体をふたつに裂かれるような衝撃がぼくを襲った。（LIFEエネルギー♡5個失う）

●剣を抜き、戦う……………⇩339へ　●逃げる……………⇩64へ

162

太陽とは反対の方向にどこまでもまっすぐ歩いていこう。

ぼくは再び歩き始めた。

しばらく進むと急に視界が開けた。

そこは、かなり大きな泉だった。いや、ちょっとした湖と言ってもいい。

ぼくはその泉のほとりに立って、しばらくその水面を眺めていた。水上を渡ってくる風は、さわやかな冷気を含んでいる。何とも気持ちのよい風だ。

⇩91へ

163

大男には殺意はなかった。ぼくを若造と見てからかったというところだろう。

とどめの一撃をすんでのところでとめると、男ははじめて、大きな傷のある顔に笑いを作った。

「勝負あったな」

もともとけわしい顔つきだが、笑うと一層、凄味が増す。ぼくはプライドを打ち砕かれてしまった。飲んだくれの元戦士にさえかなわないなんて……。**（LIFEエネルギー♡マイナス4）**

●もう町を出よう……………⇩57へ　**●まだもう少し様子を見よう　…⇩70へ**

164

その通路のまん中に、扉があった。

カギはかかっているのだが、ぼろぼろにサビついている。ぼくが扉をけとばすと、バラバラになって崩れ落ちた。**（タイムポイント・マイナス1）**

その向こうはやや広い部屋になっていた。かたわらに籐でできたイスが置かれており、そこにはひとりの老人がすわっている。

何で神殿の中に人間がいるんだ!?

●声をかけてみる…………………………………………⇩215へ

●魔物が化けているのかもしれない。無視して通り過ぎる　……⇩34へ

165

ぼくがボトの群れをまたたく間に蹴散らしたのを見て、容易ならざる敵だと判断したの

だろう。アイアンナックは、右手に身のたけほどもある長剣をひっ下げてぼくに近づいてきた！

⇩385へ

166

旧市街に入った。たしかにあまり豊かな町ではなさそうだ。門番の言っていた鬼というのは、本当にいるのだろうか？　もしかしたら、ガノンの手下かもしれない。

「おい、そこの！」

その声に、ぼくはとっさに身構えた。

「やれやれ、物騒だな」

剣を手にかけたぼくに、男は言った。鬼ではなく、ぼくを呼びとめたのは町のならず者たちだった。十人はいる。ひとりひとりは強そうには見えないが、いっぺんにかかってこられたら勝ち目はない。ぼくは慎重にヤツらの出かたを待った。

「ま、通行料と思ってくれりゃいい。ふところの金を洗いざらい置いてってもらおうか。そうだな、ついでにその剣と盾ももらっておこう。売っぱらえば酒代くらいにはなる」

どうやらこの男が頭をとっているようだ。手ごわそうなのはこいつひとり。あとは雑魚ばかりというところか……。

●戦う……………⇩48へ　●逃げる　……………⇩223へ

167

目を閉じている時のギルボックは、いかなる攻撃も受けつけないと聞く。ヤツを倒すのは、目を開けている今のうちしかない！

ぼくは一瞬のうちにそう判断すると、剣を抜いてギルボックのほうへ向きなおった。

バトルポイント　リンク（Ⅰ）、ギルボック（3）で戦う。結果は？

●**勝った**……⇩**62へ**　●**負けた**……⇩**444へ**

168

ぼくは亀裂に向かって猛然と走り出した。亀裂の手前で思いきり地をけって、向かい側へと跳躍！

ぼくの体は宙に舞った。風が鋭いうなり声を上げながらぼくの耳元を通り抜けていく。向かいの草原が見る見るうちに大きくなっていき、ぼくは見事に着地に成功した。

やった――!!

だが、次の瞬間、ぼくの足下の土がガラガラと音を立てて崩れ出した。

あっ!!

叫ぶひまもなく、ぼくの体は亀裂の底へまっさかさまに転落して行った。

そんな！　まだ旅を始めたばかりだというのに……。

END

169

サリアの町に背を向けて歩き出す。モルゲの沼を越え、荒野へ……。

●ラウルの町に行く……⇩291へ
●ミドの町に行く……⇩311へ
●パラパ砂漠の神殿に行く……⇩344へ
●ミドロ沼の神殿に行く……⇩429へ
●王家の墓の神殿に行く……⇩305へ

170

「ケケケ、覚悟(かくご)しろ！　リンク!!」
ゲールはこん棒を振り回しながら飛びかかってきた！
バトルポイント　リンク（C）、青ゲール（6）で戦う。結果は？

●勝った……⇩428へ
●負けた……⇩126へ

171

しばらく泉に沿って歩いてみることにした。森の中を行くより、そのほうが気分がいいだろう……。

泉は思った以上に大きかった。どれくらい歩いただろうか？　岸辺の木々の間に草原が見え隠れする場所に出た。

⇩225へ

172

家を出た。さっきあの裏通りで会った女が立っている。ぼくを待っていたのだろうか？

「実は、私はあんたを試したんだよ。私はずっと勇者を待っていた。一目見てあんたがその勇者だと感じたんだ。あんたなら、きっと勝つと思っていたよ」

彼女はそう言って、ハートの器をぼくに差し出した。**（ハートの器入手。ただし今のレベルで持てるハートの器の上限を超える場合は取ることはできません）**

「さあ、もうお行き。はしけから離れ島に渡る船が出ているよ」

「離れ島には、いったい何があるんですか？」

「私には、道を示してあげることしかできない。答えは道を進んだものだけが手に入れられるんだよ」彼女は別れを告げて去っていった。

●はしけへ行く……………⇩21へ
●行かない　……………………⇩57へ

173

「ファイア！」
ぼくの剣から炎があふれだしてきた。炎はそのまま、ゲールに向かって一直線にほとばしる！
だが、ゲールは鼻でせせら笑うと左手の盾をかざした。炎は盾を容赦なく焼くが、ことごとくはじき返されてしまう。
呪文がきかない！　ぼくは凍りついたように動けなくなってしまった。
ゲールは勝ち誇った表情でぼくに近づき、脳天にこん棒を振り下ろす。
ぼくの頭がザクロのように叩き割られる瞬間、じっと助けを待っているであろうゼルダ姫の姿が見えたような気がした……。

END

174

ぼくは青のマジカルキーで、真ん中の青い扉を開けた。中へ踏み込んだぼくの目の前にあらわれたのは——ダイラ！
魔界から来た、おそるべきバケモノだ。オノ使いの名手とも聞いている。手ごわい敵だ。
バトルポイント　リンク（E）、ダイラ（5）で戦う。結果は？

●勝った……………………⇩354へ
●負けた……………………⇩430へ

175

広場に面した一軒の家を訪ねた。
「ドアは開いているよ。入ってきなされ」
ノックに応えて、低いしわがれた女の声が返ってきた。ドアを開け、家の中をのぞいてみる。車椅子に座った老婆が、ぼくを出迎えてくれた。
「旅のォ、人かね？」まぶしそうに目を細めて、老婆はぼくを見上げた。ぼくはその言葉にうなづき、ドアを閉めて部屋に入っていった。
「こっちへ来て何か旅の話をしてはくれないかね？」
老婆が言った。車椅子での生活では外に出ることもままならないのだろう。このうす暗い部屋に閉じこもりきりで退屈しているに違いない。
●旅の話をする……………………⇩419へ
●神殿のことは聞けそうにないので家を出る……⇩31へ

176

奇妙な案内人と別れ、ぼくはしばらく町をうろついていた。通りを小さな男の子が泣き

ながらトボトボと歩いている。いったいどうしたんだろう？

●声をかけてみる……⇩287へ　●無視して行く……⇩240へ

177

ぼくはゆっくりとタコの足へ近づいていった。
「お久しぶりじゃの、リンクどん」
赤いお化けタコは、沼の中から頭を出してきた。
「どういう風の吹き回しだい？　オクタロックよ」
まだヤツを信用しきれなかったぼくの問いに、オクタロックは笑って答えた。
「いやさ、おまんの強さを見て、急に戦うのがあほらしくなったんじゃ。あても命は惜しいけんの……。どや、ここで逢うたのも何かの縁じゃ、一杯やっていかんか？」
おいおい、ぼくは未青年だぞ！
それでも、ヤツはぼくを強引に坐らせると酒びんを持ち出してくる。
奇妙な酒盛りがはじまった。オクタロックはすっかり上機嫌だ。もともと赤い顔が、酒のせいでさらに赤くなっている。
「リンク、おまんはいいヤツだぜよ。あてみたいなタコと一緒に酒飲んでくれるんじゃから。あてはおまんに惚れたぜよ！　最高、最高!!」

……変なヤツだ！
でも酒はうまかった。ヤツの話では、お客さん用にとっといた「ブラックオクトパスの12年もの」だそうだが……（LIFEエネルギー♡プラス1）
やがてヤツに別れを告げ、ぼくは神殿目ざして沼を進んでいく。オクタロックは、神殿へ向かうぼくを、
「がんばりや～～！　おまんなら、きっとガノンをやっつけられるはずじゃ！」
と励ましてくれた。

⇩55へ

178

殺意はない。ぼくを若造と見て、からかおうという腹なのだろう。だが、それは甘かった。ぼくはヤツのスキをついて攻撃をくり返す。
大男の剣が大きく宙を斬った。ぼくの剣の先が、男の喉もとにつきつけられたのはまさにその瞬間だ。男の顔からすうっと血の気が引くのがわかる。もう一歩、いや半歩深く踏み込んでいれば、ぼくの剣はヤツの喉もとをえぐっていた。……勝負はぼくの勝ちだ。
（LIFEエネルギー♡プラス4）
「なかなかやるな、坊主。あ、いや……」
「リンクだよ」

「旅の途中か」
ぼくはうなずき、神殿へむかう旅の途中だということと、これまでのいきさつを話した。
「そうか……。神殿には恐ろしい魔物がいるというぞ。だが、お前なら魔物に勝つこともできるかもしれないな。そんな気がするよ。がんばれよ、リンク」
大男の言葉は、ぼくにとって何よりのはげましとなった。
ぼくは、ミドの町を出ることにした。

⇩57へ

179

気がついてみると、ぼくは周囲を森に囲まれた泉のほとりに倒れていた。
あの地下水流は、この泉につながっていたのか……。
それはかなり大きな泉だった。体の節々が痛んだが、気力をふりしぼって起き上がる。

⇩91へ

180

ぼくは、聖なるブーツをはいていることにはたと思い当たった。何でこんなことに気づかなかったのだろう！　ブーツにまかせていれば、聖なる力でぼくを導いてくれるじゃないか。

ぼくは足を止め、瞑想（メディテーション）に入った。心を水のように澄ませ、いっさいの邪念（じゃねん）を頭の中から排除（はいじょ）する。

やがて、ぼくの足は地面からスッと浮き上がった。そのまま、すべるように進んでいく。

迷路のような通路を抜け、大きな広間までやってきた時、ぼくの体は動きを止めた。

⇩17へ

181

ゲールのこん棒がふりおろされた。どうにかよけることができたが、こん棒は壁にめり込むほどの威力（いりょく）がある。あんなものをまともにくらったら一撃でおだぶつだ。

ファイアの魔法でゲールの力は落ちているが、手ごわいことにかわりはない。

やられるかもしれない。

バトルポイント リンク（A）、ゲール（4）で戦う。結果は？

●勝った……………………⇩96へ
●負けた……………………⇩50へ

182

ぼくはラウルの町に背を向けて歩き出した。

目前に荒野が広がる。その光景に向けて、ぼくは再び進みはじめた。

●ミドの町に行く………⇩311へ　●サリアの町に行く………⇩41へ
●パラパ砂漠の神殿へ行く……⇩344へ　●ミドロ沼の神殿へ行く……⇩429へ
●王家の谷の神殿へ行く………⇩305へ

183

だが、ヤツの動きを止めることに成功した。ぼくはすばやく剣を抜く。
先制攻撃をかけている分、状況はこちらに有利になっているはずだ。ぼくにも十分に勝ち目はある！
ヤツの弱点はどこだ⁉　考えられるのは二ヵ所。ヨロイのつぎ目――つまりレボナックの関節を攻めるか、乗っている空飛ぶ馬を斬ってヤツを孤立させるかだが……。
●ヨロイのつぎ目に斬りかかる…⇩331へ　●空飛ぶ馬に斬りかかる…⇩356へ

184

ぼくは男と家を出た。
「神殿には行くな」
さっきまでの、人の良さそうな声とはまるで異質な声が、男の口から発っせられた。
ぼくは身構える。様子が変だ。

184 ●男の顔がこわばり、醜い姿に変わっていく。服を引きちぎり、ゴーリアに変身した！

男の顔がこわばり、明らかに変化していく。服を引きちぎりながら体つきまでもが変わる。全身が剛毛(ごうもう)に覆(おお)われた醜(みにく)い姿――ゴーリアだ!!

●(もっていれば)サンダーか、ファイアの呪文(じゅもん)を使う……………⇩396へ

●剣で戦う……………⇩421へ　●逃げる……………⇩436へ

185

ぼくはその泉のほうへと歩き出した。もし、蜃気楼(しんきろう)だったら、もうおしまいだ。だが、どのみちこのまま水がなければ、ただ死を待つばかりなのだ。

半(なか)ば絶望的な行進だった。しかし、近づくにつれ、泉は消え去るどころかますますはっきりと見えてくる。

蜃気楼じゃない!　本物だ!!

助かった……ぼくはしみじみそう思った。

泉でしばらく休息したぼくは、おもむろに立ち上がって周囲を眺(なが)める。そして、はるか遠方にそびえ立つ岩山を見つけた。

何だろう、あの岩山は……。

⇩326へ

186

ぼくは剣を抜き、ウィズザールに斬りかかった。
だが敵の呪文攻撃は思いのほか強烈だった。たちまち巨大な空気の壁にぶち当たったぼくの体は、もんどりうって床にたたきつけられる！
「ぐえっ……」
一瞬呼吸が止まり、体中に激痛が走った。**（LIFEエネルギー♡マイナス2）**

⇩282へ

187

どこまでも続く赤い壁。ぼくがまわりを見回しているとどこからか声がかかった。
「おまえがリンクだな」
ふり向いたぼくは、そこにぼくの3倍はあろうかという巨人がヌッと立っているのを見て思わず飛びのいた。
強固なヨロイにつつまれた馬面の魔物。こいつはマズラだ！
馬面の巨人は、ばかでかいこん棒をぶんぶん振り回している。あんな武器でなぐられたら、ぼくの体は粉々にされてしまうだろう。

●戦う……………⇩272へ
●逃げる……………⇩315へ

188

バトルポイント　リンク（H）、バルバジア（6）で戦う。結果は？

●勝った……⇩78へ

●負けた……⇩371へ

189

「覚悟！」

ぼくはジャーマフェンサに向かって斬りつけようとした。

その時、すさまじいばかりの〈念〉がぼくに向かって放射された。圧倒的なパワーだった。ぼくの全身からたちまち力が抜けていく。

デクノボウと化したぼくに、ジャーマフェンサがゆっくりと近づいてくる。ヤツは手にした剣を大きく振りかぶった。それが、ぼくがこの世で見た最後の光景となった。

END

190

ガノンの言葉に気を取られ、姫のもとにかけ寄ろうとした足をふっと止めた。

ガノンは、ちょっとしたぼくのスキを見逃さなかった。もっとも卑劣な手段を使い、ぼくに心理的なゆさぶりをかけてくる！

突然、姫の目がカッと開いた。その瞳は、金色に光りながらぼくをにらみすえている。まるで獣のような目だ。ぼくは、彼女がもはや正気でないことをとっくに見破っていた。姫は、衣の中から短刀をとり出し、スッと抜いた。魂を抜き取られた屍生人さながらのぎこちない動きで、こちらへ向かって一歩、また一歩と近づいてくる……。

⇩254へ

191

ぼくは恐れることなくその洞窟へ入っていった。中は完全な闇の世界だ。

聖なるローソクは?

●ある……⇩398へ　●ない……⇩375へ

192

十分に後ろへさがり助走をつけて対岸へ思い切り跳躍した。絶妙のタイミング。うまいぞ!

だがその時、とんでもないことが起こった。どこからともなく飛来したモアがぼくをとらえたのだ!

ハートの数は?

●16以上……⇩407へ　●15以下……⇩302へ

193

前にここへ来た時、ぼくはゲールを倒した。その時と同じように閉じこめられてしまったのだ。
用心深くあたりを見回す。うす暗い中に、何者が潜んでいるのか？……気配は感じない。これからいったい、何が起こるのだろう？ゲールは死んだはずだ。他のどんな敵がいるのか？
だが、何も起こらない。ぼくは拍子抜けしてしまった。まだ心臓がドキドキしている。
扉に手をやった。あっけないくらい簡単に開く。ぼくは外へ出た。

⇩148へ

194

しばらく町をうろつくうち、どうやら町の中心らしい場所へ出た。ここにも人影はない。静まりかえって、まるでゴーストタウンのようだ。
人の気配は確かにある。少なくともまったくの無人ではないようだ。
ぼくは、背後に視線を感じてふり返った。町の中心地にはあまりにも不似合いな廃屋が、そこにある。この中に誰かいるのだろうか？
また、視線を感じる。子どものようだ。よろい戸のすき間からこちらを見る。だがすぐに戸は閉じられてしまった。

とても人の住んでいる家には見えない。この町の中でその家だけが百年も前に捨てられ朽ちるにまかせているようなのだ。

●中を調べてみる……⇩46へ
●ほおっておく……⇩20へ

195

多少、強引な方法だけど、剣で突き崩すのがいちばん早い。

ぼくは剣をふるい、壁のすき間をこじあけにかかった。しかし、壁も目いっぱい抵抗する。結局、うんともすんとも動かなかった。あーあ。骨折り損のくたびれもうけだ。

⇩259へ

196

現在のハートの数は？

●9以上……⇩439へ
●8以下……⇩24へ

197

ぼくは左の扉を押し開けた。中でぼくを待ち受けていたのは——グーマ！　牛を改造して造り出された頑強な兵士だ。

ぼくはヤツが手にしているものに目をやった。それは鎖のついた鉄球だった。あんなものをぶつけられたら、それこそひとたまりもない！

バトルポイント　リンク（Ⅰ）、グーマ（3）で戦う。結果は？

●勝った……⇩402へ
●負けた……⇩368へ

198

ぼくは彼女の家に案内された。そこでは彼女の祖母だと言う老婆がぼくを迎えてくれた。

「お前は旅の戦士だね？　青いつぼを持っているか？」

●青いつぼを持っている……⇩424へ
●持っていない……⇩256へ

199

奥に通じるドアに、カギはかかっていない。剣を抜き、ドアをけり開けて一気におどりこんだ！

気負って入っていったのはよいが、部屋の中はまったくの空っぽ。ぼくは思わず拍子抜けした。

●部屋を出て、エレベーターの所までもどる……⇩33へ
●一応、部屋の中を調べてみる……⇩325へ

200

炎の球はシールドではよけられない。そこで一発、

「リフレックス!!」

炎の球は魔法の力で一瞬のうちに反転する。加速された炎は、そのまま一直線に小竜の体へ吸いこまれた。

ぐわん！

大きな火柱があがった。アーネルは自らの炎で身を焼かれ、断末魔の絶叫をあげる。これがホントの「自業自得」ってヤツだな！

アーネルの死体から、何かが転がり出てきた。見ると、それはハートの器だ！

ラッキー!! ぼくは器を拾い、軽やかな足どりで歩き出した。**（ハートの器入手。ただし、今のレベルで持てる上限を超えている場合は取ることができません）** ⇩１６４へ

201

もうすぐサリアの町だ。かつて不落といわれた砦から発展した町……。周囲をめぐる深い堀が来る者を拒む。あまりにも閉鎖的な様相だ。

町の入口には大きな門が造られ、そこから橋を渡して中へ入れるようになっている。ぼくは橋を渡してもらおうと門番のところへ行ってみた。

●バグの手紙を持っている……⇩401へ
●手紙は持っていない ………⇩97へ

202

ようやく、ここを抜けることができる。そう思って歩き出そうとした。だが、一歩足を踏み出すと、そこには床がなかった。いや、床にはめこまれていた石のひとつが落とし穴のふたになっており、その石を踏み抜いたのだ。ぼくはそのまま落とし穴を転げ落ちていった。

ひえー、なんてドジなんだ。

⇩93へ

203

ぼくは途中、道を教えてもらいながら、さっきの男の子の言っていた、物知りな老人の家を訪ねた。

「ここに物知りのお爺さんが住んでいるって聞いたんですが……」

ぼくを出迎えたのは老人の息子と名乗る男だった。訳を話すと快くぼくを老人の部屋に案内してくれた。

「神殿、とな?」

「はい、何でもいいんです。神殿のことを知っていたら教えて下さい」

「神殿にはそれぞれその守り神がいる。パラパ砂漠にある神殿の守り神を倒せばお前は時間を手にすることができる。それはお前の旅になくてはならないものだ」
老人はそれだけをいって目を閉じた。

⇩418へ

204

洞窟の中を一心に歩いていたぼくは、上方から光が差し込んでいることに気がついた。思わず立ちどまって見上げる。光は天井付近の岩の間から漏れているようだ。おそらく、あそこには地表と接するわずかなすき間があるのだろう。岩をよじ登れば、行けないことはない。しかし、登っている時にまた落盤でもあれば、その時こそ一巻の終わりだ……。

●岩をよじ登っていく…………⇩382へ
●このまま前へ進む…………⇩72へ

205

やがて通路の一番奥までやってきた。そこには、下の階へ向かうエレベーターがある。エレベーターの横には、扉があった。見たところ、カギはついていない。
おそらく、守護神の部屋は地下のもっとも低い階にあると思われる。先を急ぐならエレベーターに乗って下の階に行くほうがいいかもしれぬが、ぼくは横の扉が妙に気にかかっ

た。何か、戦いに役立つ宝物(たからもの)があるような気がしたのだ。

●エレベーターに乗る……………⇩246へ

●扉を開ける……………………⇩114へ

206

ぼくはとっさに剣を抜いた。

バトルポイント　リンク（B）、フォッケル（4）で戦う。結果は？

●勝った……………………⇩100へ

●負けた……………………⇩314へ

207

エークマンは耳まで裂(さ)けた口をゆがめて黄色いキバをむき出した。ヤツはぼくのことを笑っているのだ。

「くそっ」

カッとなったぼくは、剣をふりかざしてヤツに向かって突進した。満身(まんしん)の力をこめて剣を振り降ろす。その瞬間、ヤツはヒラリと空中へと舞い上がった。必殺の一撃をかわされたぼくは、バランスを失って思わずよろめく。ヤツは、その機(き)をのがしはしなかった。ぼくの背中に覆(おお)いかぶさった敵は、後ろからのぼくの首筋にその鋭いキバを突き立てた。

END

208

動かぬ手を必死に動かし、剣を抜いた。
それを見て、老人の表情におびえの色が走る。彼女は呪文を中断し、後ずさりする。おかげで、ぼくの体の自由は回復された。
「さあ、言ってもらおうか。おまえさん、ガノンの手下だな！」ぼくは残忍な笑いを浮かべ、剣を老人に突きつける。
「ひええ〜〜〜！　お助けを。わしはただのジジィじゃよ！　信じておくれ」
老人は悲鳴をあげて部屋をとび出し、そのままどこかへ行ってしまった。
何だったんだ、あのじいさんは？　急に疲れがどっと押し寄せてきた。**（LIFEエネルギー♡マイナス1）**部屋を出て通路へ出る。

⇩441へ

209

左の扉を開け、中に入る。
中に人影がある。
油断なく剣を構えながら目をこらすと、どうやらゴーリアらしい。
ヤツは赤い衣をまとい、鼻歌まじりにブーメランを磨いている。その歌はぼくの耳にも聞こえてきた。

♬オレのかわいいブーメラン
どこへ投げても結局は
オレのところへもどってくるぜ
すごい武器だぎゃブーメラン
にくいヤツだぎゃブーメラン♪
何なんだコイツはいったい……。

●剣で斬(き)りかかる…………⇩278へ

●しばらく様子を見る…………⇩105へ

210

ぼくは宿屋に入った。外から見た時はひどいあばら屋だったが内部はそれほど汚(きた)なくはなかった。宿屋の主人も人あたりがよく、そして何より料理の味はとびっきりだった。
ぼくは今までの旅の疲れをいやし、すっかり元気をとりもどした。**(持てるハートの数だけ、LIFEエネルギーを満杯(まんぱい)に)**
ぼくはすっかり満足した。

●以前ゴーリアを倒したことがある…………⇩379へ

●(倒していない人は)宿屋を出る…………⇩133へ

211

ふところからローソクをとり出した。まぶしいまでの光が放たれ、その荒れ果てた室内を照らした。そこに浮かびあがった姿は——。

二本の角を持つ、まがまがしい仮面の影がうかびあがる。青い甲冑にその身を包んだ不気味なガイコツの姿……。パルタムだ！

神殿を守るため、死の底からよみがえった兵士たち。その中から選びぬかれた凄腕の兵士がこいつだ。ぼくは……。

●サンダーの魔法を使う……⇩14へ　●ファイアの魔法を使う……⇩230へ
●剣で戦う……⇩339へ　●逃げる……⇩64へ

212

ぼくの剣が放った火の玉が、マーゴの体を貫いた。もがきながら床に倒れるマーゴ。だが、それは致命傷ではなかったようだ。マーゴは再び起きあがり、鬼の形相で襲いかかってくる。ファイアの呪文は効かないのか！（LIFEエネルギー♡マイナス6）⇩71へ

213

突然、天井が崩れ出した。大きな岩が次から次へと降ってくる。落盤だ！　それも、こ

んな狭い道で!!

●前方へと駆け抜ける……………………⇩348へ

●引き返す……………⇩121へ　●岩陰に身を隠す……………⇩101へ

214

「ぼくがきっとパルタムを倒して子どもたちを助け出します!」

ぼくはそう約束してその家を出た。パルタムは町の中心近くにある、今は廃屋も同然の家にいるらしいと言う。彼女たちに場所を教えてもらい、ぼくはその廃屋へむかった。

⇩46へ

215

老人はいすの上で眠りこけている。

「もしもし、もしもし!!」ぼくは老人に声をかけた。何か情報が得られるかもしれない。

「うーん……わしゃ眠いんじゃよ……」老人は目をしょぼつかせながらぼくを見る。

とたんにじいさんの目が大きく見開かれた。その顔に、喜びの色が満ちあふれる。

「リンク!　リンク!　わしゃあ、おまえさんが来るのを待っとったんじゃよ!!」

ぼくはその時ハッと思い当たった。ははあ、この人はハイラルで知らぬ者のいないあの

ヒントじいさんだな……。
「おぬし、ここに聖なる十字架を取りに来たんじゃろ？　十字架は、バルバジアっちゅうでっかい竜の化けものが持っているぞよ。倒すなら、ジャンプの魔法を使って頭を徹底的に攻めることじゃ」
やっぱり味方だったのだ！　どうやら信用してもよさそうだが……。

●念のため、聖なるローソクで照らしてみる……⇩134へ

●礼を言い、立ち去る（ローソクがない人も）……⇩441へ

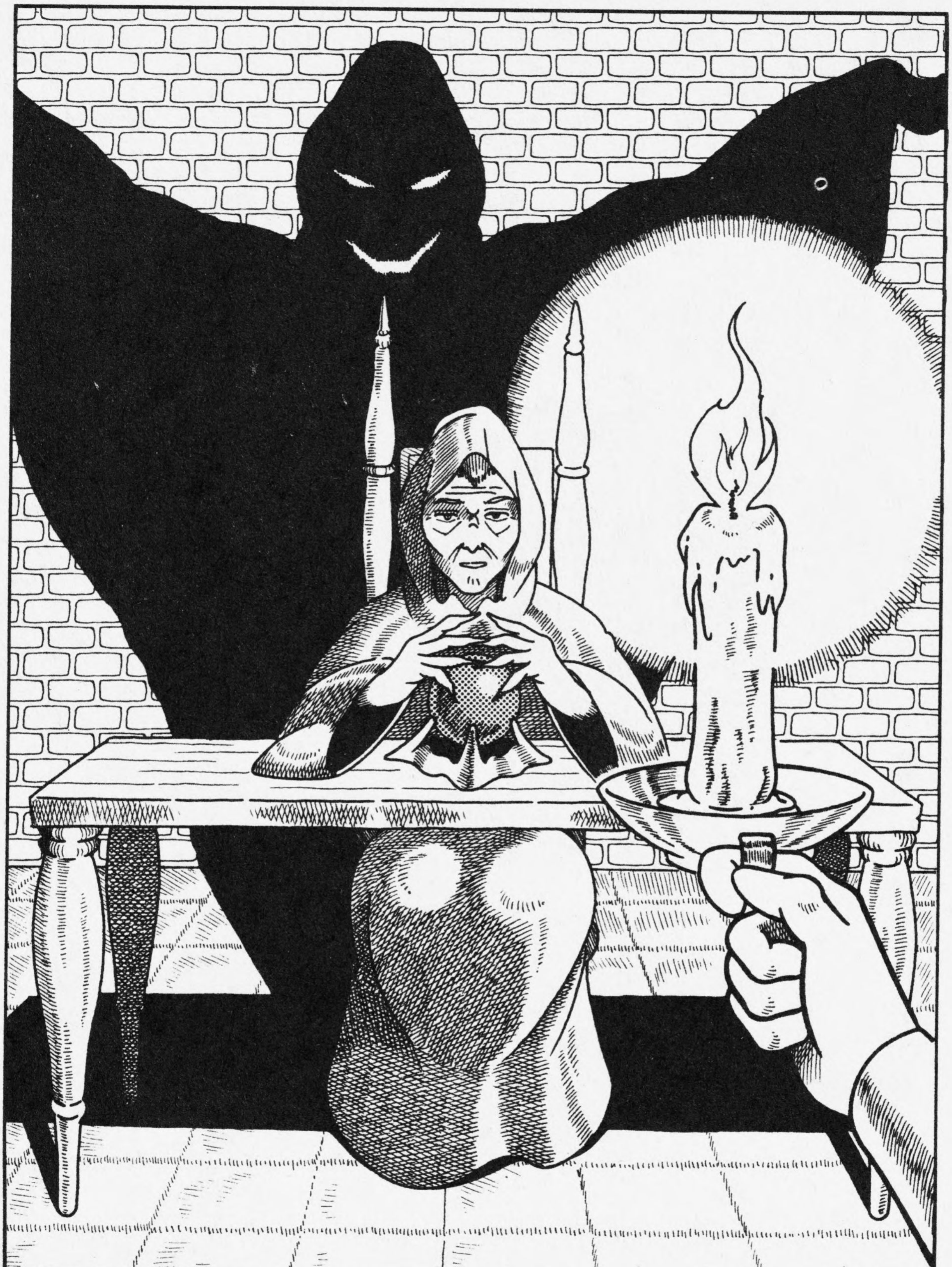
216

ふところからローソクをとり出す。とたんに部屋は魔法の光で満たされた。
光に照らされ、老婆の影がその姿を刻明に描いていく。邪悪に歪んだ異形の影。魔術師ウィズザールによって造りだされた妖怪――マーゴだ。!!
ぼくは剣を抜き、テーブルをはさんで座る老婆に斬りつけた！

⇩84へ

217

ぼくは砂の中へ倒れ込んだ。その時、ぼくの目の前へ、砂中に潜んでいたリーバーがその姿をあらわした。



216 ●ローソクの光に照らされ、老婆の影が浮かびあがる。
その実体は、邪悪に歪んだ妖怪――マーゴだった！

ブヨブヨとした気味の悪い体に四本の触手をはやしたリーバーは、舌なめずりするようにゆっくりと近づいてくる。
早く逃げなければ！　だがどうすることもできなかった。疲れ果てたぼくの体はまったく言うことを聞かず、起き上がることさえできない。
リーバーが、ゆっくりとぼくの上にのしかかってきた。そして……。

END

218

うす汚れた裏通りを歩き続けた。町の中心部とは比べものにならない荒廃ぶりだ。昼日中から腰の立たなくなるまで酔った男たちがたむろし、やせ細った子どもたちがもの欲し気な視線を投げてくる。
道ばたに座っていた大男が、ぼくを見てその巨体をむっくりと起こした。進もうとする道をふさいで立ちふさがる。どうやら力づくで通るより、ほかにないようだ。
男は腰の剣を抜いた。うっすらと錆がういてはいるが、かつては名刀だったに違いない。
「抜きな、坊主」
挑発するように男は言った。ぼくは……。

●剣を抜く……………………⇩405へ

●関わらずに町を出る　…………⇩57へ

219

ゴーリアは次から次へとブーメランを投げてくる。その変幻自在な動きに幻惑され、ぼくはまったく動けなくなってしまった。
「これぞゴーリア流幻夢曲刀殺や！　ええ夢見ながら地獄へ去ね!!」
最後にヤツの投げたブーメランは、ぼくの首に向かって弧を描いた……。

END

220

全速力で走った。橋はあいかわらず踏み出す足元から崩れ落ちていく。しかも、この水路はやけに幅が広い。いくら走っても、渡りきれないのだ。
息せき切って駆けていくうち、前方にかすかに光るものが置かれているのを発見した。あれは……体力をアップしてくれる薬草のビンだ！　今までの戦いでかなり体力を消耗しているだけに、あのつぼはぜひとも取っておきたい。だが……このもろい足元が気になる。
はたして、橋が崩れる前に、つぼを取ることができるだろうか？

●多少の無理は承知で取りに行く……⇩423へ
●橋を渡ることが先決。無視する……⇩261へ

221

男の子の父親はバグと名乗った。食事をごちそうになりながら、ぼくたちはお互いに旅の出来事(できごと)を語り合った。

バグの面白おかしい話やおいしい料理。ぼくは久しぶりに楽しい時間を過(す)ごすことができた。**(LIFEエネルギー♡プラス3)**

⇩94へ

222

フォッカーの手から逃(のが)れ、ふと気がつくとぼくはどこにいるのかまったくわからなくなっていた。

やみくもに歩いて出口をさがす。だが同じ所をぐるぐる回っているらしく、何度やっても同じ所に出た。**(タイムポイント・マイナス1)**

こんな所でまごまごしていたら、タイムオーバーになってしまう! ぼくは途方(とほう)に暮れた。聖なるブーツはあるか?

●YES……⇩180へ　●NO……⇩159へ

223

逃げよう。こんなヤツらのたむろする町で、いったいどんな情報が得られると言うのだろう。

「はっはっはっ、根性のねぇガキめ。お前にゃ剣も盾も似合わねぇぞ!」
背後から、あざけるようにならず者たちが笑うのが聞こえる。ぼくはくやしいのと、はずかしいのとで、いても立ってもいられなかった。

●新市街へ行く……………⇩51へ　●もう町を出ていこう　………⇩169へ

224

あてどもなく草原を進むうちに、右手の方に何か黒いものが見えることに気がついた。こんもりと繁った森だ。草原と接したその森の奥には何があるのか見当もつかない。
どうしよう、行ってみようか……。
もう草原を歩くのはうんざりだ。それに、涼しい森の中なら、体力の消耗も最小限におさえられるだろう。

●森のほうへ行く……………⇩345へ　●行かない　…………………⇩160へ

225

ひたすら草原を突き進むぼくの目の前に、突然、別の光景が広がった――見渡す限りの砂漠。
「タンタリ砂漠だ!」

ぼくは思わず叫んだ。ついに草原を抜けたのだ！
よし、この砂漠を越えていこう——。
ぼくは砂漠へ向かってゆっくりと足を踏み出した。

⇩420へ

226

右の通路に入った。
単調な石の壁が続いている。万一、魔物が出てきた時のために剣を構え、足音を殺して歩いていった。
前方にやたらと大きなキノコが生えている。ぼくはさして気にもとめず、その横を通り過ぎようとした。
ところが！
キノコは突然カッと口を開いた。
何でキノコに口が……などと思う間もなく、吐き出された炎の球がぼくに向かって飛んでくる。
ヤツはキノコではない。地から生え出してきた小竜・アーネルだった。

●剣を抜く……………………⇩335へ
●（持っていれば）リフレックスの呪文を使う……………⇩200へ

227

船はまもなくむこう岸に着いた。そこは、周囲を草原に囲まれたナボールの町だ。だが、今は町の見物をしているヒマはない。ぼくはナボールの町を横目で見ながら、草原の道を進んでいった。

⇩384へ

228

腕は互格だったろう。だが、運はぼくのほうにあったようだ。女戦士の手を離れた剣が地面につきささり、勝負は幕となった。

「今まで色んなヤツと剣を交えたけど、互格に渡り合えたのはあんたが最初だよ」

そう言って女戦士は声高に笑った。その誇らし気な表情といったら……。

まったくこれじゃどっちが勝ったかわからないじゃないか！　だが、ぼくの中には確かな自信が生まれていた。ぼくはこの歴戦の女戦士に勝ったのだ。（LIFEエネルギー♡プラス4）

⇩241へ

229

町に行くのは後でもいい。ぼくは言い知れぬ予感にひきずられるまま、なおも岩山の道を進んだ。

突然、足元がグラグラと揺れ出した。地すべりだ！
平衡感覚を失ったぼくは、足を踏みはずして岩の斜面を転がり落ちた。
「うわ——っ!!」
斜面の下には、地の裂け目が黒々とした口を開けている。どうしようもなかった。ぼくはそのまま地底へと吸い込まれていった。

⇩416へ

230

ファイアの呪文をとなえた。ぼくの剣からほとばしり出たエネルギーが、火の玉となってヤツの体を貫く。あばらの二、三本はふきとばしただろう。
パルタムは、文字通り崩れるように床に倒れた。やった！　仕留めたか？
だが、パルタムは死んではいなかった。あばらを失なった上半身を大きく傾け、なおも剣を構えてむかってくる！
こいつにはファイアの魔法は効かないのか!!　ぼくは剣を構え、パルタムとにらみ合った。

⇩323へ

231

ファイアモアの弱点は目だ。そのほかのところを攻めても意味がない。もちろん、目が

閉じられている時も同じ。ぼくは剣を構(かま)え、ファイアモアの目に向かって一直線に突っこんでいった。ところが……。ぼくが剣を振りおろした時、ヤツの目はかたく閉じられていた。そして無数の火の玉がぼくの体を包みこむ。

「うわぢゃ〜!」文字通り火だるまとなり、ほうほうのていで逃げ出す。(LIFEエネルギー♡マイナス3)

⇩440へ

232

聖なるブーツを持っていないぼくは、しかたなく海の中に入っていった。

渡る方法がない以上、泳いであの島に行くほかないのだ。

しかし、神殿の建つ島までは意外に遠かった。途中(とちゅう)でへばりそうになるのをこらえ、ぼくは泳ぎ続ける。やっと島についた時、ぼくはへとへとになっていた。(LIFEエネルギー♡マイナス1)

……ほとんどバカだな。神殿に入る前に、もう体力を消耗(しょうもう)してるんだから。ぼくはあまりの情けなさに泣きたくなった。

⇩147へ

233

「くらえっ!　馬面流棍術奥義(マズラりゅうこんじゅつおうぎ)・破鋼壊石烈棍(はこうかいせきれっこん)!!」

赤い空間を切り裂いて、ヤツのこん棒がぼくを襲う！
ぼくは、とっさにしゃがんでこん棒をかわそうとした。だが……。
側頭部にすさまじい衝撃を受けた。馬面の巨人は、こん棒を振る勢いを利用して、そのままの体勢でまわし蹴りを放ったのだ！　一瞬のうちに、ぼくの頭は消失した。

END

234

メグマットに敗れ、身も心もすっかり打ちのめされたぼくは、重い足をひきずるようにして草原を歩いていた。
目の前に何かゆらめく影が……。なんだろう……ひょっとすると、あれは、森!?
まぼろしじゃないんだろうな。――ぼくの胸はドキドキと鳴った。祈るような気持ちで足を速める。まぼろしなんかじゃない、本物の森だ！
――やった、ついに草原を抜けたんだ！　もうこんないまわしい草原とはおさらばだ。
ぼくは歓声をあげると、森へ向かって突っ込んでいった。

⇩345へ

235

ゴーリアのブーメランがぼくの体をかすめた。（LIFEエネルギー♡マイナス2）

だめだ、勝てない!!
ぼくは一目散に逃げ出した。こんなおそろしい町はもうごめんだ。

⇩182へ

236

右の通路をまっすぐに進んでいく。ほどなくして、前方からガシャン……ガシャン……と一定の間隔で聞こえてくる足音に気がついた。
現れたのは異形の魔物だった。青いヨロイとカブトに身を固めているが、その中身はガイコツなのだ。
死霊界から甦った騎士――パルタムだ!
バトルポイント　リンク（E）、青パルタム（5）で戦う。結果は?

●勝った……………⇩322へ
●負けた……………⇩7へ

237

ぼくは、呪文を唱えた。だが、レボナックはぴんぴんしている。その青いヨロイには傷ひとつついていない。呪文はまったくききめがなかったのだ!
「ハハハハハ……。リンク、貴様も大したことはないな。オレの豪剣、うけてみよ!」
言い終わらぬうちに、ヤツの剣がものすごい勢いで突き出された。ぼくは胸を貫かれ、

思わずうめき声をあげる。流れる血が、ぼくの胸を真っ赤に染(そ)めた!

END

238

ゲルドアームはいやな臭(にお)いをあたりにふりまきながら、地面の上にただ横たわっている。気味の悪い無数の足だけがひっきりなしにうごめいていた。

もし背後から襲われたりしたらひとたまりもない。

ぼくは心を決めると、ゆっくりと剣を抜いた。勢いをつけて繁(しげ)みから飛び出る。ぼくはゲルドアームの方に向かって一気に躍(おど)りかかった。

こっちに気づいたゲルドアームは、ムクリとかま首をもち上げた。開かれた二本の大きな牙(きば)の間には、ぬめぬめとした粘液(ねんえき)が光っている。

バトルポイント リンク(H)、ゲルドアーム(2)で戦う。結果は?

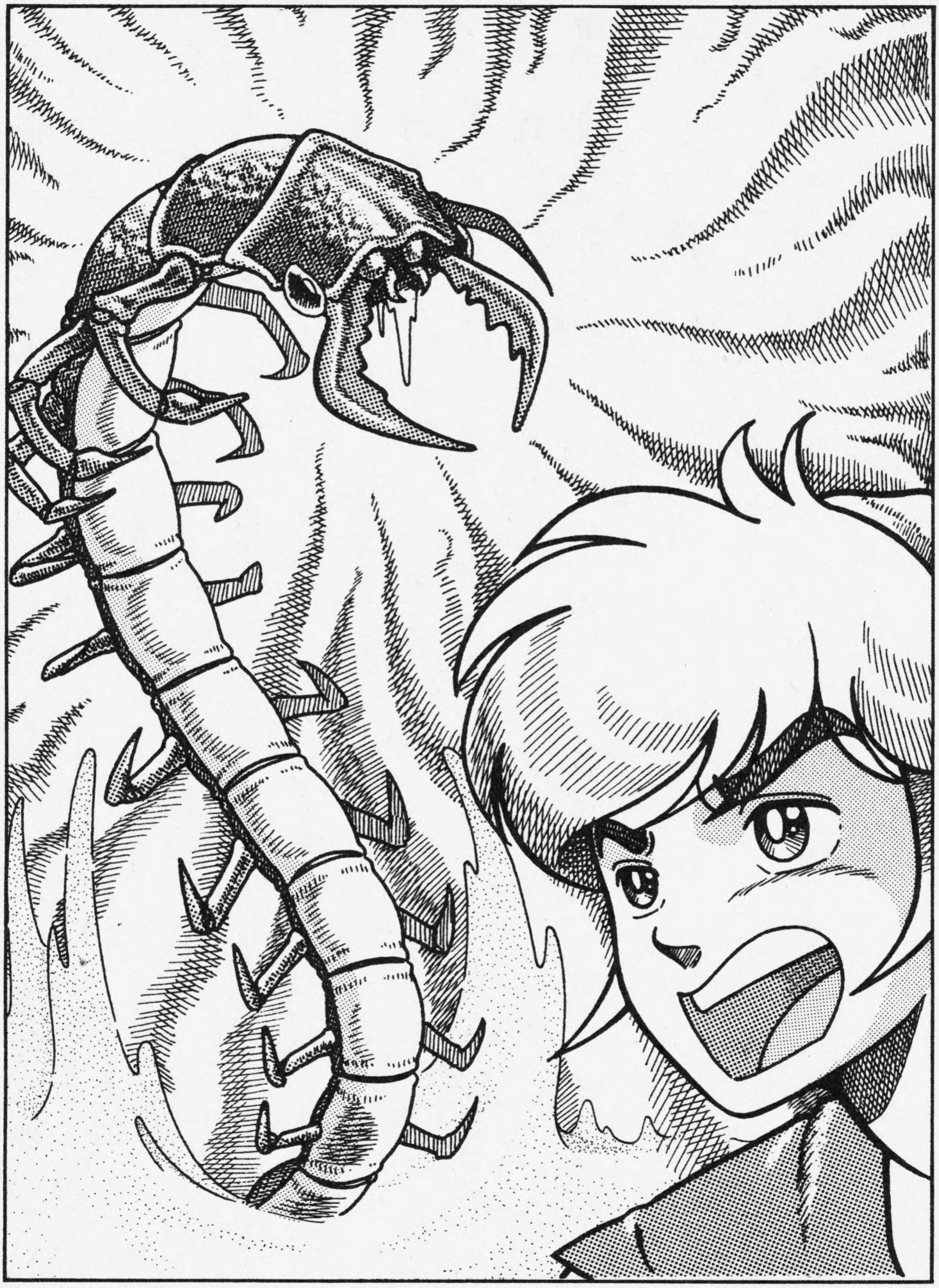
●勝った……………⇩414へ ●負けた……………⇩316へ

239

シュッという軽い音とともに、ぼくは上の階へ吸い上げられた。

だが、この階は入口があった階ではないようだ。なぜなら、色がまったく違う。

238〜239



238 ●ゲルドアームはいやなにおいをふりまきながら、気味の悪い足をうごめかせていた。毒の牙が鋭く光る。

この階の色は青一色だ。あたりに十分気を配り(くば)ながら、ぼくは青の道を進みはじめた。通路には何もいる様子がない。いや……待てよ。ぼくは、すぐ近くにひそむ妖気(ようき)を鋭く感じとった。姿は見えないけど、敵は確かに存在する！

そう思って足を止めたとたん、何かが頭上から落下してきた。

よく見ると、落ちてきたのは巨大なボトだ。そいつは、地面に落ちるとたちどころに5匹のボトと化した。変だ。ぼくの感じた妖気は、こんな下っぱ野郎のものではなく、もっと魔性(ましょう)を持つ闘気(オーラ)だったように思えたのだが……。

ぼくの予感は当たっていた。ボトのうしろから、青の騎士(アイアンナック)が現れる。アイアンナックの中でも最強の者だけが身にまとうことを許(ゆる)される青いヨロイ——噂(うわさ)には聞いたことがあるが、見るのははじめてだ！　さて、どちらを攻撃する？

●ボトを攻撃……………⇩349へ　●青アイアンナックを攻撃…⇩385へ

240

「きゃー、誰か助けてぇー」

町中に若い女の悲鳴(ひめい)がきこえた。この真っ昼間から何事だろう？　大通りにたむろしていた者たちの目が、いっせいに一軒の雑貨屋に向けられる。物見高(ものみだか)い野次馬(やじうま)連中が、我先(われさき)にと店へ走る。ぼくも悲鳴をあげる女を助けようと店へ向かった。

⇩61へ

241

女戦士がずっと旅をしていると言うので、ぼくは神殿のことを聞いてみた。どんなことでもいい。とにかく情報が欲しい。
「神殿に行くのかい。あそこには魔物がウヨウヨしてるって言うよ」
彼女はやめろと言う。だがやめるわけにはいかないのだ。ぼくはこれまでのいきさつを話した。
「ふーん。なるほど、そういうわけがあるなら力になってやりたいけど、でも私も神殿のことはあまりよく知らないんだ。ただ、神殿の中には、落とし穴がいっぱいあるって話しだよ」
「穴に落ちたら危ないというわけか……」
「いや、それがそうじゃないんだよ。落とし穴の中には、そこを通らなければ決して目的地にはたどりつけないってものもあるんだ」
女戦士は腰をあげた。
「じゃあ、私はもう行くよ。あんたも早くこの町を出たほうがいい。ここにもあんたの敵がいるからね」
そう言い残して女戦士は立ち去った。

●町を出ることにする……⇩182へ
●もう少し調べよう……⇩443へ

242

もうどのくらい歩いただろうか。次第に不安が大きくなっていく。
あれ……あれはなんだろう?
そのうち、それまでとは違う光景が目に入ってきた。もしや、……ぼくはいっそう足を速める。その光景は視界の中でどんどん広がっていく。夢じゃないぞ、こいつは――。
とうとう草原を抜けたんだ!
草原の尽きた後には、見渡す限りの砂漠が広がっていた。タンタリ砂漠だ。ほくはためらわずに砂漠へと足を踏み出した。

⇩420へ

243

小竜は、速射砲のように炎球を連発してきた。
反射的にシールドで受け止める。が、超高温の炎はみるみるうちにシールドを溶かしはじめた。
あちっ! たまらない熱さだ! (LIFEエネルギー♡マイナス2)
火だるまになったぼくは、転がるように逃げ出した。
うしろから、アーネルの「ケッケケ……」という勝ち誇った鳴き声が聞こえてくる。
おのれ……この屈辱、絶対に忘れないぞ!

⇩164へ

244

ファイアモアは、ぼくの頭上を飛び回りながら火の玉を落としてきた。この火の玉は、マジカルシールドでも防げないやっかいな代物だ。

だけど、ぼくには奥の手があった。

「リフレックス！」呪文を唱えると、マジカルシールドは不思議な光に包まれた。そして、ファイアモアの放つ火の玉を見事にはじき返す！

火の玉攻撃さえ封じてしまえば、こいつはさほどこわい敵ではない。ぼくは、ファイアモアの目をめがけて、思いっきり剣を突き立てた。

ヤツは弱点の目を貫かれ、力なく地面に落ちる。ぼくはヤツに近寄り、とどめを刺した。

（LIFEエネルギー♡プラス3）

⇩440へ

245

ぼくは、岩の上を越えていくことにした。ごつごつした岩肌に手をかけ、一歩一歩登っていく。

岩は予想外に大きく、登って向こうへ降りるまでに相当の時間がかかった。

あー、しんどい。（LIFEエネルギー♡マイナス1）

⇩318へ

246

エレベーターに乗ってさらに下の階へと進む。それにしても、この神殿はやけに構造が複雑だ。いったいどこに守護神がいるのだろう……。

エレベーターを降りると、通路は左に向かって一直線にのびている。ぼくがその通路を進もうとすると、突然、巨大な影が行く手をさえぎった。

ヘルグーマだ！　ハイラルに住む野牛を改造し、強固なヨロイをつけたその姿は、まさに魔界のパワーファイターと呼ぶにふさわしい。ヤツは、左手に持ったオノをふりかざしてこちらに向かってきた!!

バトルポイント　リンク（D）、ヘルグーマ（5）で戦う。結果は？

●**勝った**……………⇩**330へ**　●**負けた**……………⇩**360へ**

247

誰か神殿について教えてくれそうな人はいないだろうか。歩いているうちにぼくは下町のほうへ来てしまったらしい。ひと目でゴロツキとわかる連中がたむろする通りに出てしまった。いかがわしい雰囲気のする酒場の前に女が立ち、まるで品定めでもするかのようにぼくを見ている。盗賊の女ボス、なんていうんじゃないだろうな……。

「旅の人だね」

突然、女が口を開いた。ビクビクしているぼくを見すかしたように笑っている。ぼくがうなずくと、

「珍しいこと、このあたりに旅の人がくるなんてね。休んでおいきよ、取って食いやしないから」

そう言って女はまた笑った。どうしようか……？

●酒場に入ってみる……⇩357へ

●先を急ぐと言って断わる…⇩417へ

248

「リフレックス！」声をかぎりに呪文を叫ぶ。たちまち盾に不思議な力がみなぎってくる。それでバゴバゴの吐く火の玉をはじき返すと、ぼくはすばやくヤツらの間を駆け抜けた。

後ろも見ずに洞窟の中をひた走る。

――走れ、走れ！　こんなおそろしいところはもうまっぴらだ!!

⇩130へ

249

苦しみはじめたのは、姫だけではない。ぼくの邪悪な分身も、エビのように身をよじり、両手で宙をかきむしっている。

どうやら、事態がのみこめてきた。姫の体は、何か別な外部からの力で操られているら

しい。笛を吹いたことで、姫を操っている者もブラックリンクと共に苦しむ破目になったのだ。

魔物どもは聖なる音に弱い！　この幻魔宮を攻略する重大なヒントが得られたぞ!!

苦しむ姫を見るには忍びなかったが、心を鬼にしてぼくは笛を吹き続けた。

ゼルダ姫、しばらくの間しんぼうして下さい。必ず助け出しますから！

⇩44へ

250

ぼくは間髪を入れずその出入口へ飛び移った。

すべり込みセーフ！

立ち上がって前方の様子を見る。その廊下は薄暗い中を、どこまでもまっすぐに続いていた。先のほうは暗くてよく見えない。ぼくはその廊下を突き進んだ。

ガシャッ、ガシャッ、カシャッ……。前方から妙な音がする。ぼくは立ち止まって耳を澄ませた。やがてその音の主は暗闇の中からヌッと姿を現した。

スタルフォンだ！

剣と盾を手にしたガイコツ兵士は、全身の骨をきしませながらゆっくりと近づいてくる。

バトルポイント　リンク（J）、スタルフォン（3）で戦う。結果は？

●**勝った**……………⇩408へ
●**負けた**……………⇩303へ

251

ぼくは、もう一度だけ壁じゅうを調べてみた。神殿には入口はひとつだけしかないはず。ここから先に進む手段が何かあるに違いない。

この試みは成功した。右の壁のかたすみに、何かをさしこむ穴があるのを発見したのだ！

これはカギ穴ではないから、マジカルキーを使っても開くとは思えない。

待てよ。この穴の形は、どこかで見たことが……。思い出した！　これは、フェアリークリスタルの形じゃないか!!

ぼくはさっそくクリスタルを取り出し、穴にさしこんでみる。

すると、正面の壁が音もなく上にすべっていく。そのうしろには、まっ白な道があった。

クリスタルを抜きとると、ぼくは中へ足を踏み入れる。

⇩319へ

252

この程度の落石、強引に突っ切ってやる！

果敢に落石のまっただ中へ突っこんでいった。だが、今までの戦いでぼくは予想以上に体力を消耗していたらしい。

突然、足元がふらついた。踏ん張って体勢を立て直そうとするが、石に足をとられて転んでしまう。

そして頭上から、超特大の岩が、降ってきた。
ペシャンコにつぶされて死ぬなんて……ああなんてみじめな最期なんだ……。

END

253

ぼくは広場を歩いている女の人を呼びとめた。
「あの、ちょっとおたずねしたいんですが……」
ぼくは今までのいきさつを話した。そして神殿のことを知っていたら教えてほしい、と頼んだ。すると、
「この町にもあなたの敵はまぎれ込んでいるわ。うかつなことをしてはだめよ」
ぼくの行動をいましめるように言って、彼女は足早にその場を去っていこうとするが。

●彼女を追いかけてその言葉の意味を追及する……………⇩304へ
●少し歩いて町の様子を調べる…⇩31へ　●手近な家を訪ねてみる ……⇩175へ

254

「わしの最後の切り札はこれだ！　はたして姫をその手で斬ることができるかな」
ぼくは自分の無力さに歯ぎしりした。

ぼくの内心の激しい動揺などつゆ知らず、ゼルダ姫はますます近づいてくる。
「来るな……来ないでくれ、ゼルダ姫……あなたを斬るわけにはいかないんだ!!」
たまりかねたぼくは、剣を抜き放った。切っ先を姫の眉間に向けてぴたりと構える。
姫はふと立ち止まると、哀しい顔で首を振った。その表情は、正気の時にかえっている。
ぼくは思わず剣を収め、姫にかけ寄ろうとした。とたんに、姫の刃がぼくの肩をかすめた。
「だめだ……やめろ！　やめてくれ!!」半狂乱になり、ぼくは叫ぶ。
ぼくの肉体は、またたくまに短刀で切り裂かれてズタズタになった。
このままではなぶり殺しにされる。その時、不意に姫の声が頭の中に響いた。
「許して下さい、リンク……私は、邪悪な魔物に操られているのです。体が……体がいうことをきかない！　リンク、助けて!!　でないと、私はあなたを……殺してしまう！」
その声を聞いた時、ぼくの心の中で何かが音を立ててはじけた。
「ガノン、貴様というヤツは……うおおおお!!」

●ブラックリンクとの戦いで、笛を使った……⇩49へ

●笛以外のアイテムを使った……⇩342へ

255

ぼくは急いでリフレックスの呪文をとなえた。みるみるうちに、不思議な力が手にした

盾に満ちてくるのが感じられる。
ぼくは盾を頭上にふりかざした。すると、目に見えない強力なバリヤーが発せられたように、盾はすべての岩をはじき返した！
どんなもんだい！　ぼくはゆうゆうと谷を通過した。

⇩81へ

256

ぼくは青いつぼを持っていない。そのことを言うと老婆は残念そうにぼくを見た。
「そうかい……。それでは私が力を与えてやることはできない。だが、がんばって旅を続けるんだよ」
ぼくはがっくりと肩を落としてしまった。だが、ここでいつまでも気落ちしているワケにはいかない。

●家を出る……………⇩389へ
●老婆の孫娘にも話しを聞こう⇩58へ

257

「実はぼくは神殿のことを調べているんです。先を急ぐので、せっかくだけど……」
「そうか。残念だなァ、そうだ神殿のことを知りたいんなら、きっとサリアの町にも教えてくれる人がいるだろう。あそこは他所者にはつっけんどんだが、俺の友達と言えば態度

も違うだろう」バグと名乗ったその男は、そう言ってぼくに手紙を持たせてくれた。（**バグの手紙入手、チェックリストに記入**）

⇩94へ

258

途中(とちゅう)まで登った時、めまいにも似た異様(いよう)な感覚がぼくを襲った。

――何だ、これは⁉

何か不思議な〈ちから〉がぼくに作用しているのだ。時間を逆行するような意識の混乱。そのままぼくは気を失ってしまった――。気がつくとぼくはミドロ沼にいた。

⇩429へ

259

ぼくの判断が間違っていなかったことは実にうれしい。だけど、問題はどうやって壁を開けるか、ということだ。

考えたあげく、結論が導(みちび)き出された。月並みではあるが、小道具(アイテム)を使ってみよう。

何を使う？

●聖なる笛……………⇩138へ　●聖なる十字架…………⇩327へ

●強引(ごういん)ではあるが、剣で突きくずしてみる……………………⇩195へ

260

「ジャンプ！」
助走をつけ、勢いよくとんだ。決して小さくはない橋なのだが、魔法の威力は絶大だ。軽々と橋を飛び越すと、もうサリアの町は目前に見えていた。

⇩201へ

261

かろうじて、崩れる橋を渡りきり、さらに通路を進んでいく。
その途中、ぼくは厳重に封印された扉を見つけた。いかにも古びた石造りの扉だが、実に頑丈そうだ。中に秘宝でも隠しているのだろうか。

●（マジカルキーがあれば）扉を開けて見る……⇩83へ
●無視して先に進む……⇩38へ

262

紫色の部屋に現れたぼくは、ついに来るべき時が来たことを悟った。そこには、この神殿に入る直前でぼくと剣をまじえた男——ほかでもない自分自身の影が立っていた。ヤツの背後には大きな祭壇がそびえ立つ。その上に、鎖で縛られたゼルダ姫の姿があった。
「ぐわっはっはっはっ……。リンクよ、よくぞここまでやってきた。だが、これからの戦

いに勝たねば、姫を救うことはおろか、この神殿から出ることすら不可能だ」
地からわき出すようなガノンの声が聞こえてくる。ついに邪悪の者と雌雄を決する時がやってきた!!

⇩355へ

263

「リフレックス!」
炎をはじき返すなら、この呪文に限る。ぼくはさっと盾をかざし、美しくも凶々しい炎を受け止めた。
炎は見事にはじき返された。それでも、あまりの火勢にぼくの体も吹っ飛ばされる。
正直言って、ぼくはあまりに強大な敵を前に恐怖心を抱いていた。今はまだ呪文の力で持ちこたえているが、攻めようにも弱点が見当たらない。
だが、とにかくこいつを倒さねば姫を救うことは不可能だ。ここから逃げ出したくなるのを必死にこらえ、ぼくは剣を構えた。

⇩188へ

264

――よし、行くぞ!
ぼくは剣を手にして岩かげから躍り出た。アルローダは巨大な単眼でぼくのほうをにら

みつける。
そして、ぼくを威嚇（いかく）するかのように二本の巨大なハサミをふり上げた。
ヤツはジリジリと近づいてくる。剣を握（にぎ）る手に汗がにじみ出す。
バトルポイント　リンク（A）、アルローダ（3）で戦う。結果は？
●勝った……………⇩149へ　●負けた　…………………⇩2へ

265

ぼくは、エレベーターの扉（とびら）に手をかけてみた。すると、扉はすっと開くではないか！
ぼくの目の前には、小さい部屋があった。そこには、キラキラと聖なる光を放（はな）つつぼが置いてあった。
つぼに飛びつき、一気に飲みほす。体がウソのように軽くなった。**（持っているハートの器をすべて満杯に）**
クーッ、効（き）くぅ！
すっかり浮き浮きした気分になり、ぼくは再びエレベーターに乗りこんだ。
やがてエレベーターは下の階へ着いた。
ドアが開くと、今度はあたり一面が血のように赤い。どうやら、上が〝白い階〟下は〝赤い階〟ということのようだ。
⇩187へ

266

困った……こんな時はどうすりゃいいんだろう……。
ジャンプの呪文は？

●持っている……⇩376へ
●持っていない……⇩434へ

267

「サンダー！」
青い稲妻が走る。轟音とともに、稲妻はレボナックの体へすいこまれた。
「ぼげえ！」
雷の直撃をうけ、レボナックは馬ごと地面にたたきつけられる。討ちとったか!?
だが、ヤツは傷つきながらも体勢を立て直した。ヨロイからはぶすぶすと黒いけむりが吹きあがっている。最強の呪文を使っても、まだ死なないのか!!

⇩183へ

268

さて、今度はどうしよう。となりの部屋にでも入ってみようか？

●YES……………………………⇩107へ
●NO、またはどちらの部屋も入った……………⇩399へ

269

あのこん棒の威力はすごい。シールドで受け止めることはとうてい不可能だろう。
ならば、その威力を逆に使ってやる！
「リフレックス！」
ゲールの放ったこん棒は、一瞬のうちに反転した。そしてヤツに向かって飛んでいく!!
だが、さすがは魔界の闘将だ。ゲールは信じられないほど素早い身のこなしでこん棒をかわす。
「なかなかやるな。小僧！」ゲールはゆっくりと戦闘体勢をとった。

⇩170へ

270

妖精の力を借りれば、ブラックリンクにダメージを与えることができるかもしれない！
妖精よ！　このぼくに魔法の力を貸してくれ!!　クリスタルを取り出すと、ブラックリ

ンクは明らかにたじろいだ。ぼくを防戦(ぼうせん)一方に追いこんだ鋭(するど)い攻撃が影をひそめ、クリスタルのまばゆい光に押されて一歩、二歩と後ずさる。

⇩44へ

271

白い壁が延々(えんえん)と続いている。敵の姿はない。えてしてこういう所には、落とし穴が仕掛(しか)けられていることが多い。十分気をつけなければ……。

ところが、情けないことにぼくはまたも落とし穴にはまってしまった。

「うわあああっ！」

ぼくは、まっ赤な通路のまん中に投げ出された。どうやら、この神殿は階によって壁の色が統一されているらしい。ここは「赤のフロア」というわけだ。

右を見ても左を見ても、赤い道がのびているばかり。これじゃ、どっちへ進めばいいものやらさっぱりわからない。

●右へ行く……⇩364へ
●左へ行く……⇩187へ

272

今のレベルは3以上？

●YES……⇩411へ
●NO……⇩80へ

273

ぼくの剣が大男の剣をはじきとばす！　大男はその一撃で傷を負った様子だ。服が血で汚れ、先刻までの横柄な態度もすっかりなりをひそめている。**（LIFEエネルギー♡プラス4）**

店の主人と数人の男たちが大男を捕えた。さっき人質になっていた女が、お礼にファイアの魔法を教えてくれる人を紹介してくれると言う。**（ただしレベルが3になっていない人は教えてもらえません）**

●赤いつぼを持っている……⇩307へ　●持っていないので店を出る…⇩247へ

274

ヤツは長剣を自分の手足のように操り、ぼくに攻撃の的を絞らせない。

半ばヤケクソで、ぼくはシールドを思いきりヤツに向かって投げつけた。

ぐわしゃん！　アイアンナックの剣によって、シールドは横へはじき飛ばされる。その時、ぼくは青い騎士の頭上へ高々とジャンプしていた。

「もらったァ!!」

脳天に、剣を、折れよとばかりにたたきこむ。もんどりうって倒れこんだアイアンナックは激しくけいれんした後、がくっと動かなくなった。

死んだのを確かめるため、ヤツに近づく。その時、騎士のヨロイから、一本のビンがぽろっとこぼれ落ちた。

拾い上げてみると、それは魔法の薬だ。ふたを取って一気に飲みほす。とたんに、重苦しくぼくの手足にたまっている疲労がすっと軽くなった。(LIFEエネルギー♡プラス5)

あたりを見回すと、ボトたちはいつの間に逃げてしまったのか影も形もない。⇩448へ

275

ファイアの呪文をとなえた。構えた剣から火の玉が発してゲールの体を貫いた。火の玉はゲールの背後の壁をくずす。だが、それにもかかわらず、ゲールは死ななかった。

腹をブチ抜いた火の玉のあとから、ドロドロとはらわたをはみ出させ、なおもこん棒をふり回してくる。⇩181へ

276

扉を押し開いてその先に進む。やがて大きな広間に出た。何の飾り気もない、だだっ広いだけの部屋だ。だが、部屋中にすさまじい妖気が充満している。

おそらくは、ここがこの神殿の中心部だろう。

何かが部屋の奥にいた。そいつは、次第にこっちへ近づいてくる。

ガシャン、ガシャン。鉄のヨロイがゆれる音がする。
ジャーマフェンサ！　この神殿の真の守護神は、こいつだったのか!!
ヤツは侵入者であるぼくをにらみつける。鋭い視線がぼくを射抜いた。ジャーマフェンサの首が、音もなく宙を飛んでぼくに襲いかかってくる。ぼくはすっかり面くらった。
首か、それとも本体か――いったいどっちを攻撃すればいいんだ!!

●本体を攻撃する……⇩445へ
●首を攻撃する……⇩150へ

277

水路を渡ると、その先にはさらに下の階へ向かうエレベーターがあった。
いったいこの神殿は地下何階まであるのだろうか？　ぼくはエレベーターに乗り、下の階におりた。**（タイムポイント・マイナス1）**

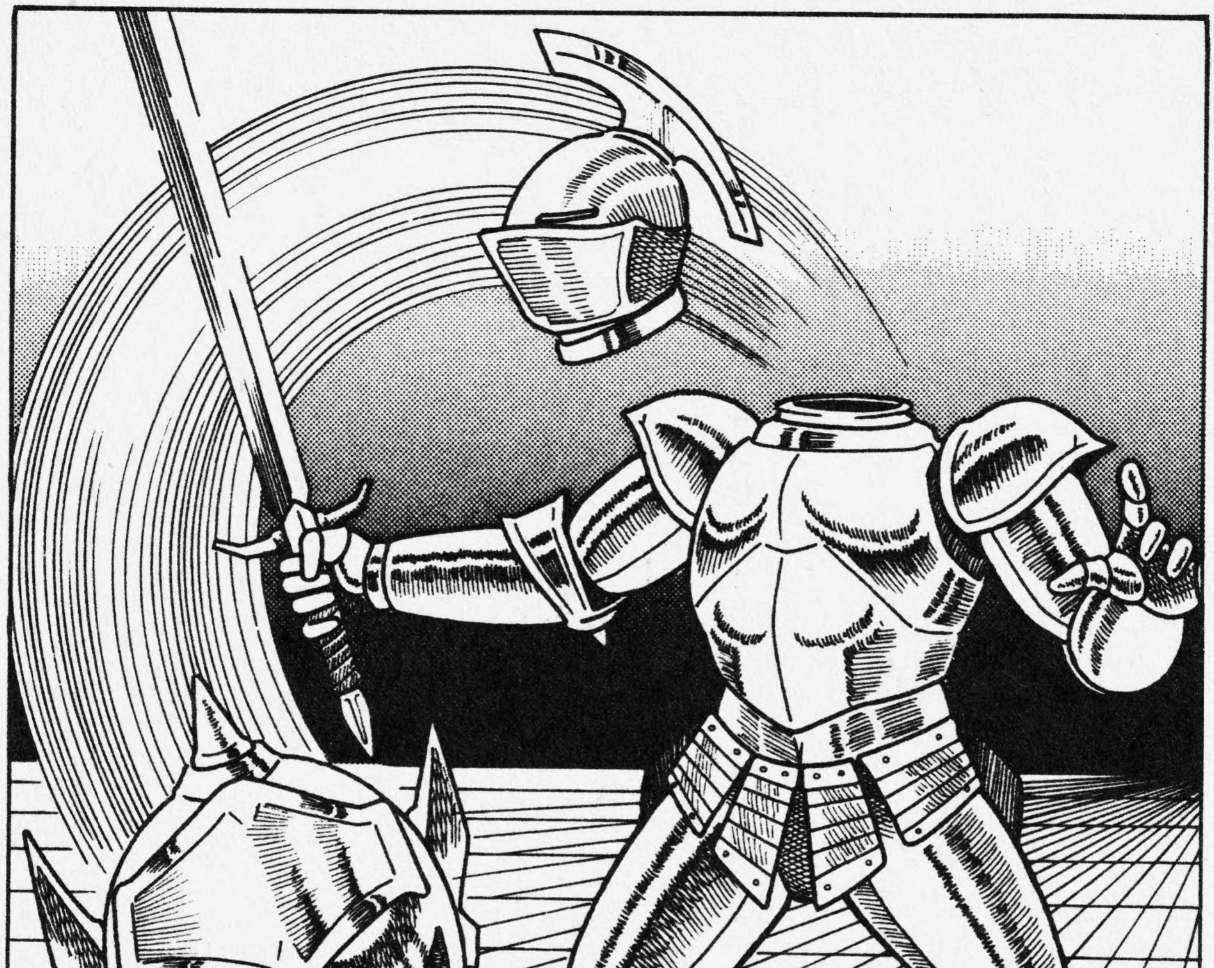
⇩422へ

278

どうやら相手はこちらに気づいていないようだ。ようし……ぼくはゴーリアの背後からこっそりと忍び寄った。
「とおっ！」一気に剣を振るう。
ヤツは一撃でまっぷたつになった。何と歯ごたえのない敵なんだ。

⇩9へ

277～278



276 ●ジャーマフェンサはぼくをにらみつけると、首を次々と飛ばしてぼくに襲いかかってきた！

279

あいにくと、マジカルキーは持っていない。どうやってこの扉を開けようかと思案していると、背後に突然、大音響が響きわたった。
ふり向くと、今まで通路だったところに、石のシャッターがおりている。ぼくは四方を壁に囲まれ、完全に孤立してしまった。
そんなバカな!! ここまで来て、こんな幕切れを迎えるなんて……。今までぼくがやってきたことは、いったい何だったんだ!?
などとグチを言っても、しょせんはムダなこと……。

END

280

落とし穴にはまったのだ! ぼくは自分の注意不足を悔んだ。だが、落ちてしまったものは仕方がない。こうなったら落ちる所まで落ちてやる!
やがて、ぼくの体は小さな部屋の中に投げ出された **(タイムポイント・マイナス1)**。
ここはいったいどこなのだろう?
「待っていたぞ、リンク」不意に声が響いた。
「オレはウィズザール。魔法使いだ。オレの呪文攻撃、うけてみよ!!」ぼくの目の前に、

いつのまにか白い頭巾をかぶった男が立っている。男はしゃべり終わるとともに、口の中でぶつぶつ呪文を唱えはじめた。目に見えない空気の壁が、束になってぼくを襲う!!

●剣を抜いて戦う……⇩186へ
●リフレックスをとなえる…⇩438へ
●ファイアをとなえる……⇩378へ
●サンダーをとなえる……⇩27へ

281

「うわあ～」

はじきとばされるようにぼくは地面に転がった。ぼくの手を離れた剣は、光る弧を描いて空を舞い、鈍い音をたてて落ちた。(LIFEエネルギー♡マイナス4)

「はっはっはっ、おととい来るがいい、腰抜けの坊や。はっはっは」声高に笑う女戦士。ぼくは彼女にふところのわずかな金を巻き上げられて町を出る破目になった。くそー、こんなはずじゃなかったのに……!

⇩182へ

282

バトルポイント　リンクは(F)、ウィズザールは(4)で戦う。結果は?

●勝った……⇩308へ
●負けた……⇩363へ

283

ミューの弱点はやわらかい下腹だ。そこを突くためには、ミューをひっくり返すのが最も効果的な攻撃方法にちがいない。だが、敵もそのことは熟知していた。ミューは触手を床にのばし、地面にぺったりとはりついた。これでは唯一の弱点をせめることができない。

ぼくは完全に攻めあぐんだ。そのスキを見のがさず、ゴーリアのブーメランがうなりをあげる。かわしきれず、腕や足をずたずたに斬られた。鮮血が飛び散る！（**ハートエネルギー♡マイナス2**）⇩**141**へ

284

マジカルキーを使い、ドアを開けた。

「あっ！」ぼくは思わず立ちすくんだ。いきなり頭上から、大きな石が雨あられと降り注いできたのだ！　頭となく、肩となく、石がかすって無数の傷を負う。こんなワナまで仕掛けられていたのか!!

ぼくは剣を振り回して何とか降り注ぐ石つぶてを払い落とそうとした。だが落石はあまりにも激しく、とてもすべて払うことなどできはしない。

どうしたらいいんだ!!

●なんのこれしき、強行突破だ⇩**106**へ

●ひとまず退却。引き返す……⇩**86**へ

285

エレベーターに乗りこみ、上の階へと登っていった。
この階は、すべてが青で統一されている。赤の次は青か……。いいかげん、目がチカチカしてきたよ！
通路を進んでいくと、やがて橋がかかっている所に行き当たった。下には地下水路が流れている。
「!?」ぼくはふと足を止めた。水路のまん中に、何かがあるのを発見したのだ。
そこは、水路の中でも小高く盛り上がっており、水面より上に出っぱっている。どうやら、見たところ人ひとりが通れるぐらいの穴があいているようだ。
ひょっとしたら……あの穴はワープゾーンかもしれない。うまくいけば、一挙(いっきょ)に姫のとらわれている最後の部屋まで行ける可能性もある。だが、一歩間違えれば、とんでもない所に飛ばされてしまうという事態(じたい)もありうる。
どうしたものだろう。

●イチかバチか、穴の中へ突っこんでみる……………⇩140へ
●危険はおかさず、橋を渡って先に進む……………⇩146へ

286

エレベーターを出ると、目の前にはふたつの扉があった。どちらもまったく同じような扉である。さて、どっちに行くか……。

●右の扉をあける……………⇩350へ

●左の扉をあける……………⇩197へ

287

「どうしたんだい?」

ぼくは声をかけてみた。これだけ大声で泣いているのに、周囲の人たちは皆、見て見ぬふりをきめこんでいる。

「えーん、父ちゃーん」

男の子はさらにボリュームをあげて泣き続ける。ぼくのことなど構ってくれそうにない。話しはちっとも要領を得ないのだが、ぼくはわめき散らしている男の子の言葉を根気よく聞いてやった。

どうやら男の子は父親と旅をしている途中で、この町へ立ち寄ったらしい。だが町の人ごみの中で父親とはぐれてしまった、ということのようだ。

●いっしょに父親をさがしてあげる……………⇩145へ

●関係ないので放っておく……………⇩240へ

288

モアの大群は、ぼくを目がけていっせいに急降下してきた！

バトルポイント　リンク（G）、モア（3）で戦う。結果は？

●勝った……⇩409へ

●負けた……⇩155へ

289

ならず者の男と、剣を構えて向かい合う。

ぼくのにらんだ通り、剣をまともに使えるのは頭をはっている男だけだった。雑魚どもを片づけると、最後にその男が残った。一騎討ちだ！

男のくり出してくる剣をよけ、ぼくは剣をふりあげた。男は身をすくめる。

この勝負、ぼくの勝ちだ。**（LIFEエネルギー♡プラス3）**

「命ばかりはお助けを。あんたの部下になって一生どこへでもついて行きますから……。とりあえず、食事のできるところへ御案内しましょう」

男はぎこちない愛想笑いで顔をゆがめ、もみ手すり手ですり寄ってくる。うーん、どうしたもんだろう？

●とりあえず食事をさせてもらう……⇩87へ

●役に立ちそうにないので放っておく……⇩18へ

290

ヤツらはすぐにぼくを発見した。たちまち四方八方から次々に群がってくる。なすすべはなかった。体中の肉がヤツらに食いつくされる。

後には骨も残らないだろう——。

END

291

ラウルへと向かう道は快適そのものだった。うららかな陽光がさんさんと照りつけるのどかな風景の中を進んでいく。

⇩158へ

292

テクタイトは依然としてこちらの様子をうかがっている。気をつけろ、ヤツは光線を発射するチャンスを狙っている……。

その大きなひとつ目から発射されるビームが、テクタイトの最大の武器なのだ。ぼくは剣をゆっくりとふりかぶった。

ぼくが手にした剣を投げるのと、ヤツが光線を発射したのとはほぼ同時であった。剣を投げた瞬間、ぼくはすばやく地面に転がる。ヤツの光線は、ぼくの頭をすれすれにかすめ

ていった。
そして――ぼくの投げた剣は見事、ヤツの目に突きささっていた。
ガックリと倒れ伏すテクタイト。
ぼくは井戸に駆け寄ると、澄んだ水を汲み上げて何杯も飲んだ。灼けつくのどに水の冷たさが心地良い。(LIFEエネルギー♡プラス2)
すっかり元気を取りもどしたぼくは、足取りも軽く廃墟を後にした。
⇩366へ

293

ぼくはミドの町へ入った。町の中心となっている広場へ向かう。
「お若いの、旅の人だね」
声がぼくを呼びとめた。ふり向くとこの土地の者らしい男が立っている。
「そうだけど」
「この町はちょっと物騒でね。スリにカッパライと色々そろってる。俺が案内すりゃ、そんなのに出会わずにすむぜ」
もみ手すりで男は言った。

●この男と合うのは初めて……⇩321へ
●(以前に会ったことがあれば)男と別れる……⇩247へ

294

モア自体はさほど強い敵ではないけれど、こうたくさんいると実にめんどうだ。こんな所で時間を食っているヒマはないんだが……。今のレベルは3以上？

●YES……………………⇩449へ

●NO ……………………⇩288へ

295

やがてぼくは、広い空間のまったただ中に放り出された。
「あたっ！」石だたみの床に腰骨をしたたかに打ちつける。腰をさすりながら立ち上がりまわりを見回してみた。

⇩422へ

296

大神殿の全貌をまのあたりにして、ぼくの口からは思わず驚愕の声がもれた。
「こ、これは……」
とにかく大きい。今まで通ってきた神殿などとは比べものにならないぐらいだ。
この中にゼルダ姫がとらわれている！　そう思うだけで、ぼくはいてもたってもいられなかった。神殿に向かって歩を進める。
「ばかめ！　わざわざ死ににやってくるとはな、リンク」

296 ●ぼくは、目の前に出現した敵を見て言葉を失った。
そこには……ぼく自身が立っていたのだ！

ガノンの声が頭の中に飛びこんできた！　「貴様のために、とっておきの戦士を出迎えに送っておいた。もうすぐ貴様の目の前に現れるはずだ……」

その声が消えた時、最強の敵がぼくからほんの十歩ほど前に立っていた！

今まで数々の魔物と対戦し、これを撃滅してきたぼくは、今や多少のことで動揺しないだけの精神力を身につけているつもりだった。しかし……こんなことが信じられるだろうか……。

そこに立っていた最強の敵とは……。

ぼく自身だったのだ!!　⇩23へ

297

右のほうの道へと足を踏み出した。少し行くと、不審な物音は道を少しはずれたところにある繁みの中からしている。

——何だろう？

持ちまえの好奇心がムクムクと頭をもたげてくる。やはりウサギかなにかなのだろうか？　何がいるのか確かめてみたくなった。

ちょっと待て、ぼくは大事な旅の途中ではないか。でも、やっぱり気になる……。

●繁みの向こうを探ってみる……⇩54へ　●探らずにそのまま行く……⇩160へ

298

「それでこそ男ぞ。手かげんはせんから、そのつもりでかかってこい！」

鳥人剣士は、ゆっくりと剣を抜いた。

バトルポイント　リンク（C）、フォッカー（7）で戦う。結果は？

●勝った……………⇩113へ　●負けた……………⇩446へ

299

いったいどこに魔物が潜んでいるんだ!!　しびれて動かない腕で必死に剣を抜いた。やみくもに振り回すと、見えない魔物もややひるんだらしく、体の力も少しだけ回復した。ここはとにかく逃げるが勝ちだ。震える足を踏みしめて立ち上がり、転がるように走る。そのうち魔物もあきらめたようだ。妖気は薄らぎ、やがて遠くへ去った。

⇩409へ

300

ぼくは呪文を唱えた。さて、その呪文は……。

●サンダーの呪文を使う……⇩267へ　●他の呪文で戦う……………⇩237へ

301

攻撃用に使える呪文(じゅもん)は三つ。何を使う?
●ファイア……⇩173へ　●リフレックス…⇩269へ　●サンダー　…⇩98へ

302

ズルリ――ほくはモアの背中からあっと言う間にすべり落ちた。
「うわあああ――」
そのまままっさかさまに炎の海へ――。
こんなことってあるもんか……ぼくにはまだまだやることがあるんだ……それがこんな最期(さいご)をとげるなんて、あんまりだ……どうやら、この世に正義はないらしい……。

END

303

スタルフォンの全身からすさまじい妖気(ようき)が立ちのぼっている。
カキーン!　ヤツのくりだした剣を寸前で受けとめる。すごい力だ。ヤツは叩(たた)きつけるようにして何度も剣をふるう。このままではぼくの剣が折れてしまう!
「このっ、このっ、このっ!」

ぼくはメチャクチャに剣をふり回すと、そのまま一目散に逃げ出した。いつまでもこんなバケモノの相手など、してられるもんか！（ＬＩＦＥエネルギー♡マイナス５）

⇩390へ

304

彼女に追いつくのは容易なことだった。だがぼくが肩をつかんだ途端、彼女はまるでぼくにとり殺されるとでも言うように悲鳴をあげて逃げだしてしまった。

悲鳴におどろいて我を失なったぼくだったが、すぐに広場中の視線が集中していることに気づく。

……彼女の言っていたぼくの敵は、もしかしたら身近なところにいるのかもしれない。だとすれば、こんなところで騒ぎを起こしてはヤツらの思うツボだ。

●町を出ることにする………⇩182へ　●とりあえずその場を逃れる⇩133へ

305

神殿は、王家の墓にほど近い小島に建てられている。

そこを目ざしていく途中、ぼくは思い立って王家の墓を訪れた。

ここには、王家の血縁の者すべてが葬られている。その中には、トライフォースをもってこの地を治めた偉大なる王の墓もあった。

ぼくは墓標（ぼひょう）の前に立たずみ、手をあわせた。
「偉大なる王よ……ぼくをお守り下さい。姫は、必ずこの手で救い出してみせます。その時まで、トライフォースの御加護（ごかご）があらんことを……」

⇩341へ

306

「神殿のことを、何か知りませんか、何でもいいんです」ぼくはエラーにたずねた。
「いやあ」男は首を振った。
「神殿のことを知っているのは賢者（けんじゃ）ぐらいじゃないのかなあ」
「そうですか。あなたは、もう旅には出ないんですか？」
「うん。今はこの町を守っている。
ここにも魔物が潜（ひそ）んでいる。これまでに俺が何匹も倒したが、……ゲールだけはなかなか尻尾（しっぽ）をつかませない」
ぼくは思わず目を見張った。鬼が棲（す）むというのはまんざら作り話しではないらしい。
「リンクと言ったな。もしゲールを倒したらまたここへおいで。君は、ゲールと戦うことになるよ。さあ、お行き」
エラーの言葉に小さくうなづき、ぼくは礼を言ってエラーの家を出た。

⇩151へ

307

女はぼくを町に住む魔術師のところへ案内してくれた。
「お前がリンクか？」
魔術師はぼくが来るのを待っていたというふうに言った。ぼくはうなづき、魔術師の前に赤いつぼを差し出した。
「ふむ。確かにお前はファイアの魔法を持つにふさわしい戦士のようだ」
魔術師は、ぼくにファイアの魔法を授(さず)けてくれた。**（ファイアの魔法入手。チェックリストに記入）**
剣の先から火の玉を発する魔法。――それは敵の体を貫通(かんつう)するほどの威力(いりょく)を持つ。
「だが、この魔法とてお前を無敵にしてはくれないぞ。決して魔法に甘えてはならない。わかったな？」
魔術師のいましめの言葉に、ぼくは力強くうなずき、魔術師の家をあとにした。

⇩247へ

308

ウィズザールを撃滅(げきめつ)したぼくは、その通路を歩きはじめる。
ここがどこなのか、守護神(しゅごしん)の部屋から近いのか遠いのかまったくわからなかったが、じ

っとしていても仕方がない。とにかく動き回って出口を見つけなければ！
ところが、ぼくはまたまたワナにはまってしまった。この通路にも、落とし穴が仕掛けられていたのだ。
「うわあ～～～!!」
ぼくの体は、きりもみ状に回転しながら暗い穴の中を転げ落ちていく！（タイムポイント・マイナス1）　⇩295へ

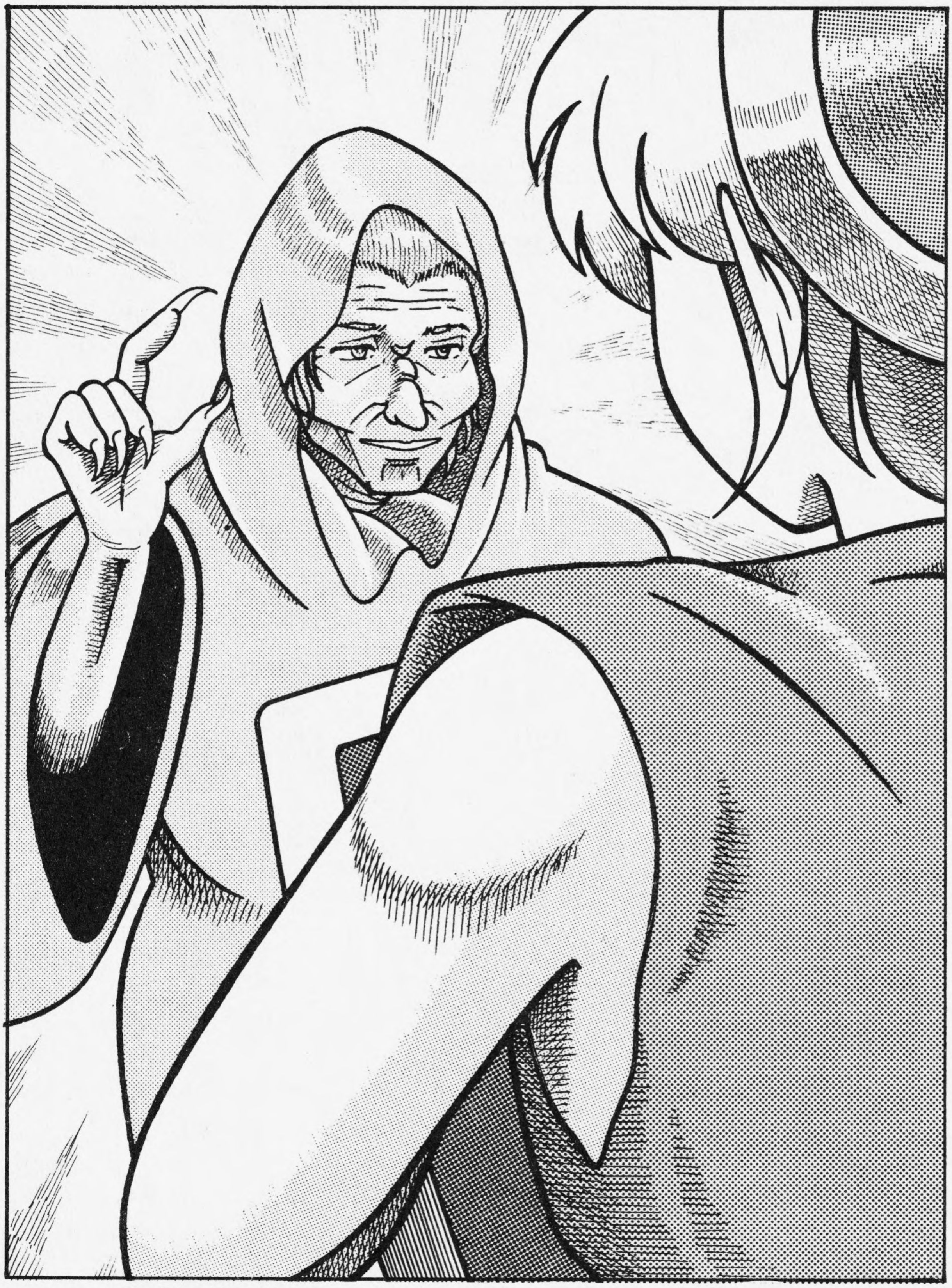
309

屋敷の扉は開いていた。ぼくはゆっくりとその中に足を踏み入れた。中は暗くてよく見えない。ぼくはさらに足を進めていく。思ったより部屋は広いようだ。
その時、ぼくの背後でとつぜんバタンという大きな音とともに、扉が閉まった。

●ここに来るのははじめて…………⇩3へ　●前にも来たことがある　……⇩193へ

310

油断していたぼくが悪かったのだ。ぼくは観念し、目を閉じた。えーい、もうどうにでもなれっ!!
ところが、老人の口からは意外なことばが飛び出した。



310 ●老人は、ぼくのたてに魔法の力を与えてくれた。神殿
の中にも、ぼくを助けてくれる人がちゃんといる！

「おぬしの盾に魔法をかけた。しばらくは体の自由がきかんだろうが、魔物と戦う時にきっと役に立つはずじゃ」

(以後、リンクは戦いの際、自分のバトルポイントに1を加えて戦うことができます)

ぼくは老人を疑った自分の不明さを恥じた。魔物がうごめくこの神殿の中にも、ぼくを助けてくれる人がちゃんといる！　そのことがわかっただけでも、勇気百倍だ。

老人に礼を言い、ぼくはふたたび先に進みはじめた。

⇩441へ

311

ミドへの道をまっすぐ歩いていく。

路上には魔物も出ず、実に静かだ。ところが、ミドの町まであとわずかというところで、意外な障害が待ちうけていた。

巨大な岩が、ミドの町へと通じる一本道を完全にふさいでしまっていたのだ。

う回して草原の中を通っていってもいいのだが、魔物がひそんでいる可能性がある。なるべくなら、むだな戦いは避けて歩きたい。

聖なるブーツを持っているか？

●YES……⇩90へ
●NO……⇩245へ

312

エレベーターが下の階へついた。（タイムポイント・マイナス1）

すばやくあたりをうかがう。だが、何も出てくる気配はない。盛大な魔物のお出迎えを想像していたぼくは、ちょっと拍子抜けした。

それにしても変だ。あまりに静かすぎる。加えて、ぼくの感覚はこのあたりに妖気がみなぎっているのを痛いほど感じとっていた。

油断は禁物だ。ひょっとしたら、目に見えない魔物がひそんでいるのかもしれない……。

聖なるローソクを持っているか？

●YES……………⇩117へ　●NO……………⇩442へ

313

最強の呪文で一気にケリをつけてやる！　行くぞ！

「サンダー」を唱えた。雷鳴がとどろき、炎と稲妻の壮絶なせめぎあいが演じられる！

勝ったのは炎のほうだった。炎竜はまったくダメージをうけた様子がない。逆に、ぼくは全身を炎に包まれ、大やけどを負う。（LIFEエネルギー♡マイナス7）

体だけではない。剣もシールドもぐにゃりと曲がっている。

小手先の呪文攻撃など通用しないことを、ぼくは体で思い知らされた。

⇩188へ

314

だが、剣を抜くのが少し遅かったようだ。
フォッケルのくちばしは、ぼくの胸に深々と刺さった。ヤツはそのまま大きな足でぼくをわしづかみにし、悠然とぼくの肉を裂きにかかる。
鳥のエサになって人生を終わるハメになろうとは……。

END

315

相手があまりに悪すぎる。ぼくは逃げることにした。
くるりと振り向き、全速力で走り出す。敵の姿はみるみるうちに小さくなっていった。
それは甘い考えだった。目の前の空間がふいにゆがむ。ゆがんだ空間は、人の形となって赤い通路に立ちふさがった。魔法使いの親玉・カロックだ。
ひえーっ!! ぼくはふたたび逃げようとした。だが、後を追ってきていたマズラが、背後で手ぐすねをひいて待ち構えている。
はさみうちだ!
フェアリークリスタルを持っているか?

●YES……………⇩95へ　●NO……………⇩233へ

316

すばやく接近し、ヤツに向かって思いきり剣をたたきつける。

しかし、敵の動きは思った以上にすばやかった。ヤツは身をひねってぼくの剣を避(さ)ける。

そして、伸びきった上半身を半転させ攻撃してくる。

鋭い牙(きば)がぼくの右肩をかすめる。

やられる！

ぼくは転がるようにしてその場から逃げ出した。めちゃくちゃに走った後、ようやく立ち止まって肩の傷口から血を吸い出す。

ほんのかすり傷なのに、早くも全身がしびれ、頭がくらくらする。ゲルドアームの毒のせいだ。ほおっておけば命取りになる。

まだ体は重いが、休んではいられない。ぼくは気力をふりしぼって立ちあがった。（LーFEエネルギー♡マイナス1）

⇩11へ

317

右の扉(とびら)の中に抜け道があるかもしれない。

ぼくは、「あけたら死ぬで」と書かれた右の扉を開け、中に入った。

⇩412へ

318

ぼくは海に面した町、ミドの入口にたどりついた。わりと大きな港町だ。
●町に入る……………⇩293へ　●入らない　……………⇩57へ

319

通路は静まり返っていた。
それにしても、まわりは白一色だ。壁も、天井も、床も輝くばかりの純白で統一されている。ぼくは目が痛くなってきた。
通路の終点にはエレベーターがあった。さっそく乗りこみ、地下へ向かう。⇩89へ

320

老婆は快くぼくを迎えてくれた。
「ミドロ沼の神殿を知っているだろう。そこで守護神を倒せばお前は聖なる笛を手に入れることができる。その笛に宿る能力で、ある魔物を追い払うことができるのじゃ」
ぼくは老婆と向き合って話していたが、部屋は暗くて顔さえよく見えない。だが老婆はいっこうに灯りをつける様子がないのだ。
「この町には魔物がいるよ。お前の生命を欲しがっているんだ」

老婆の声は、次第に低く太くなり、発音もあいまいなものになっていく。暗がりの中でその目だけが獣のそれのように光ってぼくを見すえる。老婆を異様な妖気が包む。

●早くこの家を出よう……⇩15へ　●まだ話しを聞こう……⇩30へ

●(持っていれば)ローソクを出して様子を見る……⇩216へ

321

どうも信用できない。ぼくは男の申し出をことわった。

男は急にしょんぼりとしてしまう。あれ？　何か気の毒なことをしちゃったかな？

「あ、だけど、もし君が神殿のことを知っているんなら教えて欲しいんだ」

「神殿ねえ、うーん、俺にはちょっと……。でもこれだけは忠告しておくよ。あんたの敵はこの町にもひそんでいる。離れ島にもおっそろしい魔物が群れをなしているっていうしなあ。気をつけて行くといいよ」

そう言って男は、また客を探して旅人を物色しはじめた。⇩176へ

322

パルタムは、右手に持った剣をふりかざして襲いかかってきた。ぼくはマジカルシールドでその剣を正面から受けとめる。

ガキィッ！　剣と盾がせめぎあう、すさまじい音がした。
ヤツのヨロイは上半身を強固に防御しているが、下半身はがらあきだ。攻めるならそこしかない！　ぼくはすばやくしゃがみ、パルタムの足を剣で横なぐりになぎ払った。
敵はあお向けに倒れ、必死に立ち上がろうともがく。
ぼくはヤツの上にのしかかり、首の骨に手をかけた。満身の力をこめて左にねじる。ゴキッという鈍い音をたてて骨はまっぷたつに折れ、パルタムは動かなくなった。
勝ったのだ！（LIFEエネルギー♡プラス5）

⇩２０５へ

３２３

見るも無残な姿となったパルタムに、ぼくは斬りかかった！
バトルポイント　リンク（Ⅰ）パルタム（３）で戦う。結果は？

●勝った……………⇩１４へ　●負けた……………⇩３７０へ

３２４

今にも爆発しそうなほどにふくれ上がった太陽は、なおも激しい熱波を地上に向かって送り続けている。
ぼくは、オアシスらしき影のほうへ行かなかったことを後悔していた。しかし、今となな

ってはもう遅い。湿り気のまったくない口の中では、乾き切った砂粒がジャリジャリと音を立てる。流れ落ちる汗と立ち昇る熱気とで、視界はもうろうとしている。(LIFEエネルギー♡マイナス2)水……一滴でもいい……どこかに水はないか……。

⇩124へ

325

引き返すことも考えたが、こういう部屋にこそ、何か秘密があるものだ。調べてみる価値はある。

そう思って、この部屋をくまなく探索することにした。

ほどなくして、部屋の入口に向かって左側の壁に、わずかなすき間があるのを発見した。思った通りだ!

⇩259へ

326

ぼくは石の回廊を通り抜けて、岩山の奥へ奥へと進んでいった。

やがて、行く手は切り立った大岩壁に閉ざされた。しまった、行きどまりか……。

だが、よくよく見ると、その大岩壁の下に小さな洞窟がぽっかりと口を開けている。さらに、洞窟の横のほうには、岩壁をけずり取ってつけたような小さな道が上へ延びていた。

とるべき道はふたつにひとつ、洞窟に入るか、その横の道を行くかだ……。

●洞窟に入る……………⇩56へ
●横の道を行く…………⇩332へ

327

十字架を取り出し、頭上に高々とかかげた。

そのとたん、十字架から一条の閃光が走る。いや、十字架だけではない。壁のすき間からも光が放たれた！

光同士は空中でからみ合い、すさまじい火花を散らす。そして部屋の中央にぽっかりと空洞が開き、ぼくはあっという間にそのまっただ中へ放りこまれた。

最初まっ黒だった空洞の中は、時間がたつにつれて紫色へと変色する。そして、紫色の空間は、徐々にその姿をはっきりと浮かび上がらせてきた。

⇩262へ

328

岩の突起部を剣で突き崩してみた。すると、ぼんやりと光を放っていた物は、よりはっきりした光芒を放ちながら、僕の目の前にその姿を現した。

それは聖なるローソクだった。火をともさなくとも、暗闇のすみずみまでを魔法の光で満たす不思議な灯明――これさえあれば、闇を恐れることはない。ぼくはローソクをふところにおさめると、その場を立ち去った。**（聖なるローソク入手。チェックリストに記入）**

329

くやしいけど、戦闘能力ではぼくよりブラックリンクのほうが上だ。戦いにおいて、もっとも邪魔になる感情——ためらいがない分、ヤツのほうが非情な戦闘マシンに徹することができるのだ。大義のために、ぼくも鬼となる決意を固めた。

心を清水のように澄ませ、戦う意志のみを増幅させる。ぼくの体から白い闘気があふれ出し、静かに燃えはじめた。

それまで自信に満ちた表情を浮かべていたブラックリンクの顔に、ふと動揺の色が走った。いまや黒い闘気は白い闘気にのみこまれようとしている。

ぼくはヤツにゆっくりと近づく。

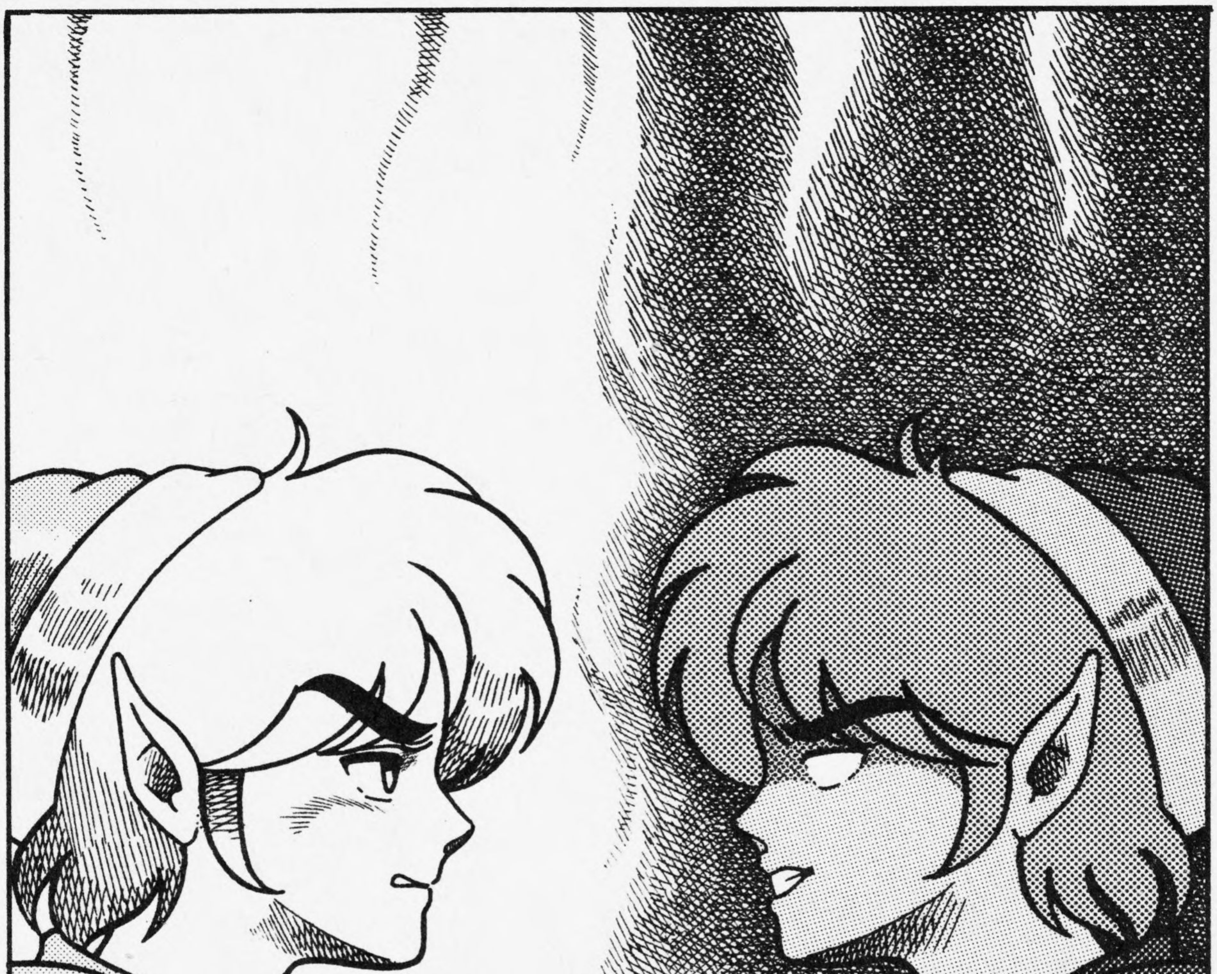
「ぼく自身の邪悪な意志よ……死ねっ!!」

剣は白い稲妻となった。ブラックリンクは一刀のもとに斬り捨てられて転がる。

ぼくは、自分の身もヤツとともに消滅することをなかば覚悟していた。だが、ぼくはここに存在している。ついにぼくは、最大最強の敵に勝利することができた!!

あとは姫を助けるだけだ。ブラックリンクの死体は、もはやかき消すように滅び去っていたが、ヤツの倒れていた場所には金でできたカギがひとつ転がっている。それを拾い上

⇩437へ



329 ●ぼくは、ブラックリンクを倒すために戦う意志のみを増幅させた。体から白い闘気があふれ出す。

げ、ぼくは姫の待つ祭壇(さいだん)へと走った。

⇩5へ

330

ヘルグーマを倒したぼくは、通路をまっすぐに進んでいった。
やけに長い通路だ。ぼくが歩き疲れてへとへととなったころ、その通路はカギのかかった扉(とびら)にさえぎられて終わりを告(つ)げていた。マジカルキーを持っているか？

●YES……⇩284へ
●NO……⇩86へ

331

ぼくはレボナックのヨロイのつぎ目を狙(ねら)って剣を突き出す！　しかし、空飛ぶ馬に乗ったヤツの動きはすばやかった。剣の切(き)っ先は貫(つらぬ)くべき目標を失って宙に泳ぐ。
ふいに、背中に激痛(げきつう)が走った。いつのまにかぼくの背後に回っていたレボナックに斬(き)られたのだ。苦痛にのたうちまわるぼくに、ヤツの冷酷(れいこく)な視線が突き刺さった。
「貴様(きさま)にこのオレは倒せん。オレの目には、貴様の動きなどまるで止まって見えるわ！」
くそっ！　こんな所で死んでたまるか!!　ぼくはふらつく足を必死に踏(ふ)ん張り、よろよろと立ち上がった。

⇩154へ

332

ぼくは岩山の中腹につけられた小さい道を進んでいく。しばらく行くうちに、見晴らしのよい場所に出た。果てしなく広がる砂漠が一望のもとに眺められる。地平線の彼方に町らしきものが見える。行ってみようか……いや、待て。もう少しこの岩山を調べてみたいような気もする……。

●町へ行く……⇩120へ
●町へ行かない……⇩229へ

333

あらゆる品物や呪文を使ってみた。しかし、三方の壁はまったく動かない。これでは中に入れないじゃないか！

ぼくはイライラしてきた。剣を抜くと、まわりの壁に向かって斬りつける。かわいた音をたて、剣ははじき返された。それでも、ぼくは壁に向かっていく。だが、その試みは決してムダではなかった。しばらくして、左手の壁が少しずつ崩れてきたのだ。

ぼくは左手の壁に攻撃を集中した。少しずつ穴は広がり、人が通れるぐらいの大きさになる。ぼくは瓦礫の山を踏み越えて、中に入った。

⇩153へ

334

頭上から容赦なく降り注ぐ石の雨の中に突っこんでいく。無数の小石がぼくのシールドや剣に当たってカン！　カン！　と乾いた音を立てる。とにかく走りに走った。やっとのことで落石の中から抜け出した時、ぼくはへとへとになっていた。肩で息をしながらしゃがみこみ、しばし休息する。**（LIFEエネルギー♡マイナス2）**

⇩29へ

335

うしろに跳んで炎をかわしながら、剣を抜いた。こいつ、なりは小さいけどやたらと凶暴だぞ。

バトルポイント、リンク（B）、アーネル（3）で戦う。結果は？

●勝った……………⇩413へ　●負けた……………⇩243へ

336

レボナックは剣を振り回しながら突進してきた。その切っ先を巧みにかいくぐりながら、ヨロイのつぎ目をめがけて剣をくり出す。徐々にダメージを与えていった。とどめを刺すなら今しかない！　ぼくは剣を構え、ゆっくりと近づいていった。

「待て！　オレの負けだ。約束通り、笛は渡してやる」
ヤツはヨロイの中から、笛を取り出しぼくの足元へ放ってよこした。
「オレとて、やせても枯れても親衛隊選り抜きの騎士。敵の手にかかる前に、誇りある死を選ぶつもりだ。先に地獄で待ってるぜ！」
言い終わると、ヤツはゆっくり剣をふりかぶり、自分の腹へ突き立てた。そしてがっくりとひざをつき、前のめりに倒れる。
ぼくは笛をおさめ、神殿の外に出た。**（聖なる笛入手。チェックリストに記入）**
次はどこへ行くか？

●パラパ砂漠の神殿へ……⇩6へ
●王家の墓の神殿へ……⇩305へ
●大神殿へ向かう……⇩21へ
●ラウルの町へ……⇩158へ
●ミドの町へ……⇩318へ
●サリアの町へ……⇩201へ

337

左の通路に踏みこんだ。うす暗い通路を抜けると、その先には橋がかかっている。橋の下は地下水路が流れている。いや、ただの水路じゃない。よく見ると魚や獣の白骨死体がそこかしこに浮かんでいる。ミドロ沼の毒水がこの水路に流れてこんでいたのだ！
水路に落ちたら、ぼくもあんな姿になってしまうだろう。

337

336 ●レボナックは、ぼくに笛を放ってよこすと、捨てゼリフを残して自らの命を断った……。

ぼくは注意深く橋の上に一歩を踏み出す。
とたんに、すっと下へ沈む感覚が体を襲った。「わっ！」反射的に逆の足を前に踏ん張ると、あろうことか、そこもボロッと陥没してしまう。
これではたまらない！　早くこの橋を渡り切ってしまわないと……。

⇩220へ

338

あのこん棒の破壊力にはとてもかないそうにない。ぼくはくるりと後ろを向くと、逃げ出した。
一瞬、黒い影がよぎったような気がした。と思ったら、ぼくの前にゲールが立ちふさがっている。
「フン、逃げようたってそうはいかん。オレのこん棒が血に飢えているんでな。こいつに貴様の血をたっぷり吸いとらせてやらにゃならん」
ヤツは、舌なめずりしながら、ゆっくりと近づいてきた。逃げられない！　このままではやられてしまう！
今のレベルは4以上？

●YES……………⇩170へ　●NO……………⇩126へ

339

剣を抜いた。パルタムは凄腕の兵士だ。一筋縄でいくはずがない。

ぼくはパルタムめがけて剣を振り下ろした。だが、その攻撃はヤツの盾にさえぎられる。

パルタムの容赦ない攻撃。ぼくはしだいに追い込まれていく。

ヤツの骨は、動くたびにきしみ音をたてる。その音はぼくの頭の中で、割れるような音響にかわっていく。気が狂ってしまいそうだ。

このままではやられる！　ぼくは狂い出すのが早いか、それともパルタムの剣がぼくの体を刺し貫くのが早いか。それはわからない。だがどちらにしても、ぼくはパルタムの餌食となってしまう。

なんとか反撃に出なければ……。

バトルポイント　リンク（F）パルタム（5）で戦う。結果は？

●勝った……………⇩**14へ**　**●負けた**……………⇩**370へ**

340

レボナックが振りおろす剣を、シールドでうけとめる。

ガキャッ！　すさまじい音。次の瞬間、ぼくの盾は真っぷたつに斬り裂かれていた。

ぼくは茫然として立ちすくんだ。凍りついたように動けないぼくに向かって、レボナッ

クは悠然と近づいてくる。銀色の閃光がひらめき、その後にはひとりの愚か者の死体が転がっていた……。

END

341

王家の墓を抜けると、海に出た。

神殿のある小島は、海岸からすぐのところに見えた。だが、その島まで渡る手段がない。悪いことに、このあたり一帯の海岸は浅瀬だらけだ。したがって、仮に舟があったとしても使うことはできない。

聖なるブーツを持っているか？

●YES……⇩68へ　●NO……⇩232へ

342

ぼくは怒りのあまり、我を忘れて姫に向かい突進した！

姫は、またも憂いに沈んだ表情でぼくをじっと見つめる。ぼくは思わず姫に斬りつける寸前でぴたりと動きを止めた。

その時だ。姫は、さっと両腕を左右に広げた。

あっという間もなく、ぼくは足にすさまじい襲撃をうけた。衝撃波か!? いや、そんなものではない。何者かの見えない牙が、ぼくの足にかみついた。そんな感触だった。どうやら直撃はまぬがれたらしく、ぼくの足は外側の肉を少々えぐりとられただけですんだ。

それでも、流れる血に染まり、真っ赤になる。（LIFEエネルギー♡マイナス10）

「ケケケケ……」カンにさわる笑い声をあげ、魔物はスーッと姫から分離する。優雅な青い羽を大きく広げた死の鳳凰——ボルバ!! 最後の敵が、ついに出現した!!

⇩102へ

343

チガノというその少女は、母親とふたり暮らしだった。通りにあるさびれた宿を営んでその日その日の糧を得ているのだと言う。ぼくは、彼女と過ごすうち、つらい旅にもどることへの嫌悪さえ感じるようになった。

ゼルダ姫を救わなければならない使命も、チガノとの平和な時間の中でうすれ、消えてゆく……。

END

344

パラパ砂漠は、高くけわしい山なみをはさんで草原や森と向かいあっている。ぼくは、その山岳地帯にさしかかった。

とある山に、洞窟を発見した。ただの洞窟ではない。入口に古びたプレートがはめこまれており、そこには「パラパ砂漠へ近道」という字が踊っていた。

聖なるローソクさえあれば、こんな洞窟はへっちゃらだ。ローソクを持っているか？

●YES……………⇩59へ　●NO　……………⇩104へ

345

ぼくの考えは甘かった——森へ入り込んですぐに、そこが草原よりもやっかいな場所だということがわかったのだ。

昼なお暗く、見通しのきかない森の中では、まっすぐ歩くことさえ至難の技に近い。それに、自分が今歩いてきたばかりの道も、すぐにわからなくなってしまう。

草原をさまよっていた時以上の不安がぼくを襲った。

ちくしょう、こんなところでのたれ死にしてたまるもんか……。

太陽は、太陽はどっちだ——ぼくは太陽の見える所を探した。やがて、大木のこずえの

すき間から、わずかに顔をのぞかせている太陽を見出した。

●太陽に向かって進む……⇩160へ　●太陽の逆方向へ進む……⇩162へ

346

思ったより苦戦だった。腕はともかく、数が多すぎる。

結局、コテンパンにやられ、有り金をまき上げられてしまった。ぼくは剣と盾をヤツらから守るだけで精一杯だった。（LIFEエネルギー♡マイナス3）

ぼくはその場を逃げだした。

●新市街へ行く……⇩51へ　●もう町を出よう……⇩169へ

347

ついに大神殿へたどりついた！

大神殿は、濃い霧に包まれている。ただの霧ではない。あらゆる侵入者を拒否し、かつ死を与える結界なのだ。

結界を解く方法――それは、ぼくが数知れぬ戦いをくぐり抜け、手にすることができた三つの聖なる品物を使う以外ない。

ぼくは聖なるブーツ、笛、十字架を高々と空にかかげ、叫んだ。

「闇に包まれし神の間が、今こそ開く時だ。ハイラルの騎士リンクに道を開けてくれ!!」
三つの聖なる品は、突然まばゆい光を放って輝きはじめた。同時に、大神殿を包みこんでいた濃い霧は、激しく渦を巻いて流れはじめる。
あたりに地をゆるがす轟音がとどろく。地響きがおさまった時、大神殿ははじめてその全容を明らかにした。

⇩296へ

348

ぼくはあわててその道を走り抜けようとした。だが道が狭いうえに足元が悪いので思うにまかせない。
その時、大きな岩がぼくの背中を直撃した。
ううっ！
ぼくはその場に倒れ伏した。息がつまって身動きができない。ぼくの体の上に、崩れ落ちる土砂が後から後から注いだ……。

END

349

五匹のボトを攻めることにした。雑魚は早目にかたづけておいたほうがいい。

戦鬼と化したぼくの前に、たちまちタマネギの腐臭を漂わせる死体となった。いくら束になってかかってきても、下っ端はしょせん下っ端。ものの数ではなかった。

残る数匹は怖気づいたのか、かかってこようとはしない。

⇩165へ

350

ぼくは右の扉を押し開けた。そこは薄暗い小さな部屋だった。用心深く周囲の様子をうかがう。

——何かが向こうから飛んでくる……あれはいったいなんだろう……。

ラーだ！　魔法によって命を与えられた竜の首の石像——全身から冷たい汗がどっとふき出してきた。

バトルポイント　リンク（E）、ラー（2）で戦う。結果は？

●勝った……………⇩22へ　●負けた……………⇩368へ

351

門番のにべもない態度に、ぼくは思わずかっとなった。えーい、こうなったら意地だ！力づくでも町へ入るぞ！

門番を無視してぼくはズカズカと橋のほうへ向かう。だが、突然うしろから首根っこを

むんずとつかまれ、ぼくは堀に投げ込まれた。濁った水はまるで生き物のようにぼくを沈めていく。（LIFEエネルギー♡マイナス2）

ぼくは必死にもがき、からみついてくる藻に水底へ引きづられそうになりながら、ようやく岸に泳ぎついた。ふー、あやうく死ぬところだった。

意地も何もふきとんでしまった。あまりにも情けない。……ぼくはサリアの町に入るのはあきらめることにした。

⇩169へ

352

「悪いこた言いまへん。まだ離れ島へ渡るのは危険でっせ。わて、あんさんのことが心配なんや。わざわざ危ないところへ連れていくなんてできまへん。かんにんしてや」

はじめは何とか離れ島へ渡してくれと強気に出ていたぼくだったが、そのうちにモリブリンに説得された。確かに今のぼくでは力不足かもしれないな。

ぼくはミドの町へもどった。

⇩318へ

353

ゲールのこん棒が振り降ろされる。ぼくはそれを盾で受けとめた。しびれる痛みが、腕を這いのぼってくる。すごい威力だ。

バトルポイント　リンク（J）ゲール（4）で戦う。結果は？

●勝った……⇩**96**へ　●負けた……⇩**50**へ

354

ダイラは左手のオノをぼくにむけて投げつける。
ブン！　うなりをあげて飛来したオノはぼくの頭をかすめ、石の壁に突き立った。
「たあっ！」ぼくはヤツにとびかかる。ダイラは手にしたオノでぼくの剣をはねのけた。
すかさずヤツの腹を水平に払う。手ごたえは十分だ。
ゴボッ！　ダイラの口から血のかたまりがあふれてくる。ぼくはさらに剣を横に引いた。
腹の傷口から内臓を床にぶちまけて、ダイラは血の海に沈む。**（LIFEエネルギー♡プラス5）**
ダイラの死体をのりこえてさらに進むと、大きな段差があった。今のハートの数は？

●8以上……⇩**266**へ　●7以下……⇩**434**へ

355

「冥土のみやげに、もうひとつだけ教えてやろう。ゼルダ姫を縛ってある鎖のカギは、マジカルキーでは開かぬぞ。鎖を解きたければ、ブラックリンクを倒すがよい。ヤツが鎖の

カギを持っておる」
姫は、手をのばせば届きそうな所に横たわっている。にもかかわらず、ぼくと姫の間には、海の底ほども深いミゾが刻まれているように思えた。
●正攻法をとる。剣で真っ向から勝負だ！……⇩44へ
●聖なる笛を吹く……⇩69へ　●十字架をかざす……⇩40へ
●（あれば）フェアリークリスタルを使う……⇩270へ

356

ぼくは、レボナックに向かって跳んだ。狙いはただひとつ。ヤツの乗る鉄の馬だ！将を射んとすればまず馬を射よ、と言うことわざもある。馬から下ろしてしまえば動きは封じられるはず！　一刀のもとに馬の首を斬り落とす。宙に浮かんでいた馬は大きく傾き、レボナックは宙に投げ出された。
「おのれ、オレの大事な馬をよくも！」わめく青の騎士に向かい、間髪をいれずに剣をくり出す。戦いの流れは完全にぼくのペースになってきた！
⇩154へ

357

まだ陽も高いと言うのに酒場の内部はうす暗く、すでに酔いのまわった何組かの客がそ

れぞれにテーブルを囲んでいる。
ぼくは開いているテーブルを選んで座った。さっきの女はこの酒場の女主人なのだと言う。旅の話を面白がり、差し出したわずかな金で、気前よく料理を運んできてくれた。
こんがりと焼き色のついた肉や具のたっぷり入ったスープ……。どれも場末の酒場の料理とは思えないほどおいしいものだ。
女主人がしきりに勧める酒だけはさすがに断わったが、(あんなあやし気な酒を飲んだらどんな悪酔いをするかわからない……)おかげでぼくは元気百倍！　どんな魔物にも勝てそうな心地になった。**(持っているハートの器をすべて満杯に)**

⇩417へ

358

エレベーターはゆっくりと下降を続ける。どうしよう、このまま乗っていても大丈夫なのだろうか。もし敵のワナだったりしたら……。
ふと横を見ると、暗い廊下へと続く横道がぽっかりと開いていた。下降を続ける床は、今しもその出入口を通り過ぎようとしている！

●その出入口へ飛び移る……⇩250へ

●そのまま下降する……⇩406へ

359

にぎやかな町だ。大通りには宿屋が軒をならべ、料理の匂いや楽しげな音楽があふれている。町を行き交う人々の中には旅人も少なくないようだ。

ここは本当に魔物たちの巣食うハイラルなのだろうか？　そんな疑問を抱かせるほどに平和な光景だ。この町にはまだ魔物たちの手がのびていないのか？　それともこの平和な光景も、かりそめの薄っぺらなものでしかないのだろう。

ぼくは町の中心にある広場へ出る。さて、これからどうするか？

●手近な家を訪ねてみる……⇩175へ

●歩いている人をつかまえて聞く……⇩253へ

●とりあえず歩きまわってみる……⇩31へ

360

ヘルグーマは低いうなり声をあげると、手にしたトマホークをいきなりぼくに投げつけてきた！

とっさにジャンプしてトマホークをかわす。だが、ヘルグーマはのっそりした外見に似合わぬ俊敏な動きで、着地したぼくに体当たりをかけた。

体勢を立て直すひまもなく、ぼくは背後の壁にたたきつけられる。全身の骨が折れるい

やな音がした。無念だ……。

END

361

「神殿へ向かうと言ったな」
エラーが言った。その言葉に、ぼくは力強くうなづく。
「王家の墓の神殿で、その守護神を倒せ。お前はそこで力を得る。……見えない敵を見ることのできる力だ」
エラーはこの情報を伝えようとしていたのだ。ぼくはエラーに何度も礼を言い、家を出た。

⇩148へ

362

うす暗い通路を歩いていくと、やがて扉(とびら)に突き当たった。
頑丈(がんじょう)なカギがかかっている。試しに二、三度体当たりしてみたが、扉はびくともしなかった。中に何があるのだろう……。
マジカルキーを持っているか？

●YES……………⇩99へ
●NO……………⇩226へ

363

何ということだ！　ぼくの攻撃はことごとくかわされていく。あせったぼくは、剣を構えてやみくもに突っこんでいった。
とたんにウィズザールの両手から、再び空気の壁が放たれる。至近距離から呪文攻撃を食らったぼくの体は、バラバラになって飛び散った……。

END

364

ぼくのカンでは右に行けばいいような気がする。右に向けて歩き出す。
だが、ぼくのカンも当てにはならないものだ。五歩ほど歩くうち、今度は天井がパカッと開き、そこから青い光がさしこんできた。
光を全身に浴びたぼくは、すごい勢いで天井の穴に吸いこまれる。
なんだこれは？　この穴はまるで掃除機じゃないか!!
落ちこんでいても仕方がない。穴にはまるたびに、姫のいる場所に近づいているんだと考えることにした。
物事、悪いほうにばかり考えていたらますます泥沼にはまる。途中で魔物に出会うこともなくワープできるのだから、むしろこれは喜ぶべきじゃないか!!

⇩239へ

365

洞窟の天井付近を旋回していたエークは、やがてフワリと地面に降り立った。

その時、異様なことが起こった——エークの足がまるで狼の足のように伸び、脇のあたりから二本の腕がつき出てきたのだ。

こいつはエークマンだったのか！

バトルポイント　リンク（A）、エークマン（3）で戦う。結果は？

●勝った……⇩73へ
●負けた……⇩207へ

366

熱砂を踏みしめながらぼくは行く。そう、一歩一歩、確実に……。

砂漠の彼方に切り立った岩山が見える。その岩山の上空には、何やら不吉な雲がどんよりと渦巻いている。何かある、あそこにはきっと何かが——。

それは単なる直感だった。しかしぼくは決心していた。行ってみよう、あそこへ行けば何か手がかりがつかめるかもしれない……。

⇩8へ

367

やはり、ちゃんとした道を行くのが無難だろう――そう考えたぼくは、右手の道に沿って歩き出した。
道は森の中をくねくねと曲がりながら続いている。そのうち、下生えの草が一面に繁って地面を覆い隠している所に出た。突然、足元が崩れた。落とし穴だ！
細長い穴を転がりながら、ぼくは際限なく下へ下へと落下していく。

⇩416へ

368

じょうだんじゃない、いちいちあんなヤツと戦っていられるもんか――。
ぼくはあわててその部屋をとび出した。よけいな戦いなど、しないにこしたことはないもんね。**（LIFEエネルギー♡マイナス5）**

⇩268へ

369

ぼくは、姫がもだえ苦しむ姿など見るに忍びなかった。
その心がスキを作ったのだろうか。思わず笛を取り落としたぼくを目がけ、ブラックリンクの剣が突き出される。その切っ先は、ぼくの脇腹をかすった。**（LIFEエネルギー♡マイナス12）**

⇩44へ

370

パルタムの力は、ぼくより数段勝って(まさ)いた。その剣から身を守ることでぼくは精一杯(せいいっぱい)だった。

……いや、次の瞬間、ヤツの剣がぼくの体をかすめた。その感触(かんしょく)は、凍(こお)りつく痛みとともにぼくの体から、ありとあらゆる力を奪(うば)い去っていく。**(LIFEエネルギー♡マイナス5)**

殺される。このままでは……。

ぼくは体に残っている力のすべてで走った。今は、ここから逃げ出さなければ……。

扉(とびら)をブチ破り、ぼくは廃屋(はいおく)の外へとび出した。パルタムは追ってこない。

……どうやら助かったようだ。

だが、これからどうするか？

●旧市街へ行ってみよう……⇩**166**へ
●こんな町は早く出よう……⇩**169**へ

371

「いくぞ、バルバジア！」ぼくは剣を振りかざし、炎竜に向かって斬(き)りかかっていった。

バルバジアは再び口を開く。

ヤツののどの奥から、地獄の業火(ごうか)がほとばしった。

至近距離から炎を全身に浴びる。剣とシールドを吹っ飛ばされ、ぼくの体はあっという間に灰となった。

END

372

ぼくは男の家に招かれた。男はおいしい料理と楽しい音楽でぼくをもてなしてくれる。

（LIFEエネルギー♡プラス3）

「この町は新市街と旧市街にわかれていて、昔から旧市街は鬼が棲むといわれる場所でした。あなたがパルタムを倒してくれなければ、この新市街も、鬼の住む町となるところでした」

男は決して旧市街に行ってはならぬとぼくをいましめ、この先の旅の無事を祈ってくれた。

●もう町を出る……⇩169へ
●旧市街へ行く……⇩166へ

373

ここにいるモアを一匹ずつ相手にしていたら、いつまでたってもきりがない。

ぼくは脱兎のごとく駆け出した。だが、ヤツらは瞬間移動してぼくの目の前に次々と現

れる。後ろに逃げようとしても同じだ。
無意味な鬼ごっこは延々と続いた。あげくのはてに、ぼくはほとんど体力を使い果たしてヘトヘトになった。（LIFEエネルギー♡マイナス5）

⇩294へ

374

扉をノックした。返事はない。
「すみませ――ん、だれかいますか」
大声を張りあげ、力まかせに扉を叩く。それでも、返事はない。留守だろうか？　まさか町中、総出でピクニックに行った……なんていうじゃないだろうな。
「あのー、ホントにだれもいないんですか？」
念を押すようにぼくは扉にむかってたずねた。相変わらず返事はない。やっぱりピクニックのセンかなァ……。

●扉をあけてみる…………⇩129へ
●あきらめる……………⇩194へ

375

ぼくは手探りで進んだ。慎重に、慎重に。闇の中には、どんな敵がひそんでいることか。
いきなり、目の前に大きな火の玉がとんできた。なんだ、これは!?

⇩144へ

376

ぼくはジャンプの呪文を唱えた。するとどうだろう——その段差を、ぼくは軽々ととびこえてしまったではないか！　呪文の効き目に、ぼくは今さらながらに驚いた。
段差の上には似たような廊下があり、その先に小さな扉があるのが目に入った。

⇩276へ

377

「ここから守護神の部屋まではどう行ったらいいんだい？」ぼくは妖精にきいた。
「まかせなさいっ！　あたしの力でワープゾーンを開けてあげる。神殿の外へ出してあげることもできるけど、あなたは笛を手に入れなきゃいけないものね。ちょっと目を閉じてくれる？　いいって言うまで開けちゃだめよ」
彼女に言われるまま、ぼくは目を閉じた。
妖精は、また何か呪文をつぶやく。すると突然、重力の法則が消失する。ぼくは宙にふわりと浮いた。極彩色の光が、閉じたまぶたを通してぼくの脳裏にさしこんできた。
「はい、いいわ。目を開けて」
そこは大きな広間だった。彼女の姿はない。そのかわり、頭の中に声が聞こえてきた。
「本当にありがと。あたしは妖精の国に帰らなきゃいけないから、ここでお別れ。でもり

ンク、あなたならきっと姫を救い出すことができるわ。がんばってね！　さよなら！」
感謝しなきゃならないのはこっちのほうさ。一挙に最後の間まで行くことができたんだから。**（タイムポイント・マイナス1）**　⇩422へ

378

「ファイア！」
ぼくの剣から、赤い火の玉がほとばしった。火の玉は、ウィズザールめがけて一直線に飛んでいく！　……はずだった。ところが、ウィズザールのとり出す空気の壁の前に、ことごとくはじき返されてしまったのだ!!
「甘いわ！　そんな魔法が通用するとでも思っているのか!!」
ぼくはウィズザールの呪文攻撃をまともに食らった。体が木の葉のように吹き飛ばされ、天井にしたたか頭をぶつける！**（LIFEエネルギー♡マイナス2）**　⇩282へ

379

「そうだったのか。あの爺さんには気の毒だったなァ」
宿屋の主人はそう言って長く息を吐いた。
「だがゴーリアを倒すとは大したものだな」

この町にゴーリアが潜(ひそ)んでいるという噂(うわさ)は、かなり以前からあったらしい。そのゴーリアを倒したということで、ぼくはちょっとした英雄扱いを受けることになった。
「これを持っていきなさい。きっと役に立つだろう」
そう言って主人はぼくに赤いつぼを差し出した。**(赤いつぼ入手。レベルが3に上がる)**
「この先も苦しい旅になるだろうが、がんばるんだぞ」
皆にはげまされ、宿屋を出る。
ぼくはしばらく町を歩いたがもう何も起こらなかった。いつまでもこの町にとどまってはいられない。
ぼくは町を出ることにした。

⇩ **182へ**

380

ゲルドアームの死体を後にして、ぼくはまた歩き出した。
この様子ではどこにどんな敵がひそんでいるか、わかったものじゃない。こんな危険な所は一刻(いっこく)も早く抜け出さなければ……。
しかし、行けども行けども、目の前には同じような草原が広がっているばかりだ。
あせってはいけない――ぼくは自分に言いきかせた。まっすぐに行きさえすれば、いつかはこの草原も尽(つ)きるはずだ……。

⇩ **12へ**

381

ブラックリンクとの戦いでほぼ体力を使い果(は)たしていたぼくに、もはやボルバと戦う気力は残されていなかった。

剣を構(かま)え斬(き)りかかっていこうとしたが、足元がふらつき、ぶざまな姿で倒れてしまう。死の鳳凰(ほうおう)は、巨大な翼(つばさ)を目にもとまらぬ早さで一閃(いっせん)させた。たちまち、すさまじい衝撃波(ソニック・ブーム)がぼくの体をばらばらに砕(くだ)く。

「ゼルダ！」声にならない声で叫(さけ)ぶ。が、その声が姫に届くはずもない……。

END

382

ぼくは慎重(しんちょう)に岩の壁を登り始めた。時々、手がかりにした岩が少し崩(くず)れたりして胆(きも)を冷やしたが、それでも何とか岩の裂(さ)け目までたどり着いた。

裂け目に片手を突っ込んで、何とか全身を引っぱり上げる。まぶしい陽光が眼に飛び込んできた。やった！　地上だ!!

そこは見晴らしのいい高台だった。遠くの方に町の影が見える。次の目標は、あの町だ！

●ラウルの町に行く……⇩291へ
●ミドの町へ行く……⇩311へ
●サリアの町へ行く……⇩41へ

383

頬をなでる冷たい風に、ぼくは目を覚ました。周囲はやはり闇の世界だ。しかし、洞窟の中ではないらしい。

吹き渡る風にざわめく草木の音が聞こえる。どうやら夜の草原に出たようだ。洞窟の中のゆがんだ空間はこんな所につながっていたのか……。

ぼくはすぐに立ち上がる。こんな場所でゆっくりしてはいられない。方角すら定かではないが、とにかく歩き出そう。

⇩**128**へ

384

やがて、岩だらけの谷が見えてきた。〈死の谷〉と呼ばれる谷だ。その名の通り、そこは死の気配に満ち満ちている……。

ぼくはためらわずに死の谷へと突入した。高まりいく不安をおさえつけながら、ぼくはひたすら突き進む。

突然、轟音と共に岩の雨が降ってきた。頭上をふりあおぐと、谷の上に赤ゲールの姿が見えた。ヤツのしわざか！

あわてて周囲を見回したが、隠れる場所はどこにもない！　さあ、どうする!?

●盾で防ぐ……………⇩403へ

●リフレックスの呪文を使う…⇩255へ

385

最強の騎士を目の前にして、ぼくは剣を身構えた。相手が誰だろうと、ぼくの行く手をはばむ者には、この剣で応えるだけだ！

バトルポイント　リンク（D）青アイアンナック（7）で戦う。結果は？

●勝った……………⇩274へ　●負けた……………⇩79へ

386

目前で老婆の肌が土色に変わっていく。不気味な光を放つ目は、みるみるうちにその色をおぞましいまでの赤に変えていく。マーゴだ！　自在に炎を操る妖怪——!!

●（持っていれば）サンダーの魔法を使う……⇩37へ

●（持っていれば）ファイアの魔法を使う……⇩212へ

●剣で戦う……………⇩71へ　●この町から逃げ出す　…………⇩57へ

387

呪文攻撃か！　そうなれば、こちらも呪文で応戦するしかない!!

「リフレックス！」

「いかん！　その呪文は……」

ぼくが呪文を唱えると同時に、目の前の空間がゆがんだ。呪文同士がぶつかりあい、時空のひずみを作ってしまったのだ。

あっという間にぼくはひずみの中にのみこまれた。頭がガンガンする……！　あまりの気持ち悪さに、思わず吐きそうになった。

気がつくと、ぼくは砂漠のまっただ中に倒れていた。ふらつく頭を左右に振って立ち上がると、目の前に神殿がそびえ立っている。

砂漠……？　神殿……!!

ここはパラパ砂漠だ。時空のひずみで、こんな所まで飛ばされてしまったのか!!

⇩6へ

388

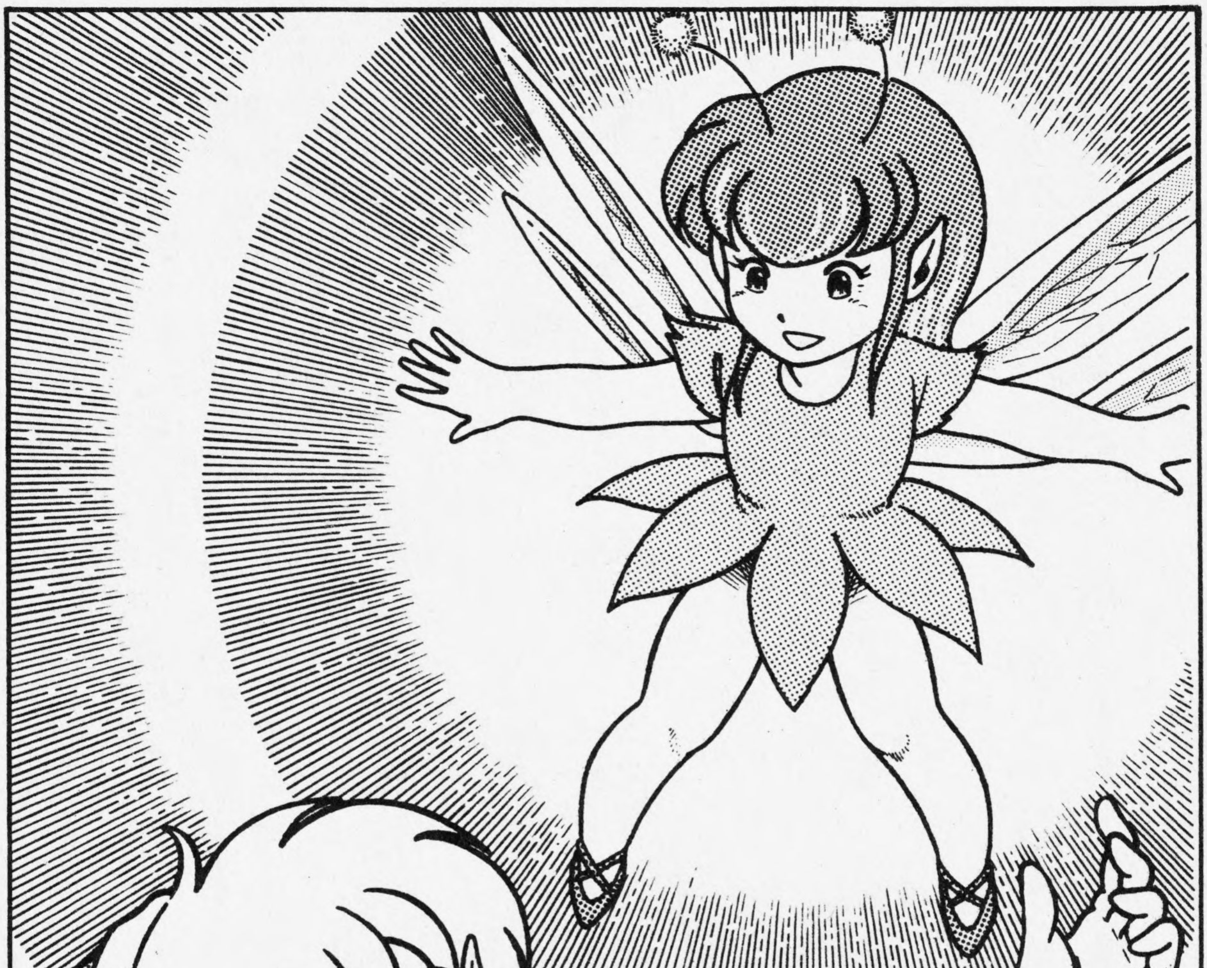
アイアンナックは剣を構えて斬りかかってくる。激しい戦いとなった。だが、これまでに数々の魔物と対戦してきたぼくはしだいにアイアンナックを圧倒していく。

「とどめだ！　食らえっ！」

剣を一閃させた。真紅のヨロイを斬り裂く。アイアンナックはばったりと倒れた。

ヤツが倒れると、部屋のまん中に一本通っている太い柱がまばゆいばかりの光を放ちはじめた。

388



388 ●アイアンナックを倒すと、柱の中から妖精が飛び出してきた。うれしそうに羽をパタパタさせている。

「助けてくれてありがとう！　アイアンナックに閉じこめられていたの」
それは妖精だった。彼女は背中の羽をパタバタと羽ばたかせ、いかにもうれしそうだ。
「助けてくれたお礼に、あなたの体力を回復してあげる」
妖精は口の中で短い呪文をつぶやいた。とたんに、体がウソのように軽くなる。**（持っているハートの器をすべて満杯に）**
「それから、フェアリークリスタルをあげるわ。これは、あたしたち妖精の力を封じこめたクリスタルなの。後できっと役に立つわ、リンク」
さすがは妖精だ。名のりもしないぼくの名前を知ってるとはね……。
（フェアリークリスタル入手。チェックリストに記入）

⇩３７７へ

３８９

大通りからそれて路地に入ってみた。
ひとりの中年女が手まねきをしている。ぼくはあたりを見回した。どうやら彼女が呼んでいるのはぼくのようだ。
何者なのだろう？　身なりもきれいとは言い難く、何かうさん臭いものを感じるが……。

●ついて行く……………⇩１２５へ
●無視する……………⇩１３３へ

390

廊下は、小さな石造りの部屋に続いていた。その部屋の奥には、三つの扉が並んでいる。
扉は、右から順に赤・青・黄に塗られていた。

●赤のカギを持っている……⇩276へ　●青のカギをもっている……⇩174へ
●カギのない人は黄のとびらへ……⇩110へ
（マジカルキーを持っている人は、どの扉も開けることができる）

391

ぼくは老婆の前に、赤いつぼを差し出した。老婆は深くうなずき、再び口をひらいた。
「お前の行く手には多くの困難が待っている。お前はこれまでにはめぐり会うことのなかった、とてつもない強敵にめぐり会うだろう。だが、ひるむではないぞ。お前が勇気を捨てずにおれば、きっとその困難にうち勝つことができる。この婆の力をお前に授けよう。お前のこの盾に、霊力を宿す魔法じゃ」
老婆はぼくにリフレックスの魔法を授けてくれた。この魔法は、盾に不思議な力を宿してぼくを守ってくれる。**（リフレックスの呪文入手。チェックリストに記入。この魔法は、呪文や炎などシールドではよけられない攻撃を受けた場合、それを敵に向かってはね返す力をもっています）**
⇩39へ

392

フォッカーを倒すことができなければ、大神殿の敵など相手にできるはずもない。あそこの中には、ヤツ程度の敵などはいて捨てるほどいるに違いないからな……。

そう思い、ぼくは戦いを決断した！

どう戦う？

●正々堂々と剣で勝負!!……⇩298へ　●呪文で奇襲をかける……⇩111へ

393

新市街には、何か手がかりがあるだろうか？　一刻も早く神殿へ行きたいが、もし新市街に何か手がかりがあるのなら無視するわけにはいかない。

●新市街へ行く……⇩51へ　●行かない……⇩169へ

394

草原の道は、やがて二方向に分かれた。左はけもの道なのであろうか、ほとんど廃道寸前といった感じ。右の道はしっかりしているが、その先で何やらあやしげな物音がしている。

物音といっても、単なる風の音、あるいはネズミかウサギかもしれないが確証はない。

それに左の道を行ったところで、途中で道が消えてしまったりしたらどうしようもない。
さて、どうしたもんだろう?

●右へ行く…………⇩297へ　●左へ行く…………⇩152へ

395

横穴を突き進んでいく。やがて広大な大広間に出た。地下にこんな場所があるなんて――。
ぼくはその大広間を突っ切っていくことにした。
途中で、何気なく天井を見上げたぼくは思わず腰を抜かしそうになった。天井には、なんとボトの大群がびっしりとはりついているではないか!
それはあまりにもおぞましい光景だった。こいつらはいつ落ちてくるかわかったものじゃない。これじゃまるで、落下する地雷源だ。そうとは知らずに、ぼくはもう広間の真ん中あたりにまで来てしまっていた……。

●先へ進む…………⇩139へ　●引き返す…………⇩121へ

396

ぼくは呪文をとなえた。ゴーリアはのたうちまわり、倒れる。

やがてヤツは青白い煙とむかつく異臭を放って土と同化していった。（LIFEエネルギー♡プラス4）
「息子がこのような魔物にとりつかれていようとはな……」
震えるその声にふり返ると老人が立っている。
「お爺さん」
「早く行け。……そうだ宿屋に寄っていくがいい。主人がきっとお前に力を貸してくれるだろう」老人は、息子を失なった悲しみをふりきるように言った。ぼくは……。
●宿屋へ行く……………⇩210へ　●もう町を出る……………⇩182へ

397

アイアンナックは、ものも言わずに斬りかかってくる。
ぼくは必死に応戦した。だがヤツは親衛隊の中でもよりぬきのすぐれた戦士だ。たちまちシールドも剣もはじき飛ばされてしまった。
丸腰になってしまったぼくの脳天に、アイアンナックの剣が振りおろされる。ぼくの全身も、ヤツのヨロイと同じ色に染まった……。

END

398

聖なるローソクの光のおかげで、ぼくは難なく先へ進むことができた。
暑い——。しばらく行くうちに、周囲の温度がどんどん高くなっていった。時々立ちどまって、流れ落ちる汗をぬぐう。これはいったいどういうわけだろう？
巨大な岩の角を何気(なにげ)なく曲がる。
「うわっ!!」
なんだ、これは？　立ちのぼる炎、うずまく熱気。
そこにあったのは、燃えさかる炎の川！
熱気をがまんしながらその炎の川に近寄って中をのぞき近む。炎の底の方には、魔物らしき影が無数にうごめいているのが見えた。
これは魔界の地獄だ！　地の裂(さ)け目から、地獄の炎がもれ出ているのだ!!
ジャンプの魔法は持っているか？

●YES……………⇩85へ　●NO……………⇩192へ

399

ふと右手のほうに目をやったぼくは、そこに小さならせん階段がついていることに気がついた。その階段は円筒状(えんとうじょう)の吹き抜けの中を、どこまでも上に延びている。ぼくはゆっく

りと登り始めた。
どこまで登っても、キリがない。
いいかげん疲れてきた頃、円筒状の壁に丸い横穴がついているのが目に入った。その横穴は今にも閉じようとしている！　ぼくはためらわずに階段から身を躍らせた。

⇩250へ

400

ブラックリンクは、大神殿の入口へとかけこんだ。とたんに、入口の扉が重々しい音をたてて閉じはじめる。
冗談じゃない！　ここまで来て締め出しを食らうなんてごめんだ!!
ぼくは地面をけって跳んだ。扉が閉まる寸前に、かろうじてすき間から中にとびこむ。
ドサッという音とともに、ぼくが地面に投げ出されるのと、扉がかたく閉ざされるのがほぼいっしょだった。
ブラックリンクはどこに？　あたりは一面、壁、壁、壁。出口はおろか、通路すらない。
何かしかけでもあるのかと思い、天井から床までくまなく探してみた。が、まったくそんなものもない。
ヤツはどこへ行ったんだ!?　煙のように消えてしまったとでもいうのか？

ぼくは石の監獄の中で考えこんでしまった。
フェアリークリスタルを持っているか？

●YES……⇩251へ　●NO……⇩333へ

401

「よそ者には橋は渡せないよ」
門番は近づいてきたぼくを見るなり言った。
「旅の途中に会ったバグという人に紹介してもらったんです」
門番にバグからもらった手紙を差し出した。この少年は息子の恩人だからよくしてやってほしい……そんな内容だったようだ。
「そうか、バグの友達か、それなら入れてやろう」
まるで手のひらを返すように門番の態度がかわった。バクはこの町では結構、顔のきく存在のようだ。
門番はさらに、この町のことを教えてくれる。
「この町は新市街と旧市街とに別れているんだ。でも旧市街は物騒だから、行かないほうがいいぞ」
新市街の住人と、旧市街の住人との間には何か反目があるようだ。新市街の住人である

門番は、子どものころは旧市街には鬼が棲むと大人たちに教えられたのだと言う。さて、どうしようか……？

●新市街へ行く……………⇩51へ　●旧市街へ行く　…………⇩166へ

402

グーマは手にした鉄球をブンブンふり回しながら、ジリジリと近づいてくる。
ヤツの動きを目で追いながら、ぼくは十分に間合いをはかった。
ついにヤツは鉄球を放った。その鉄球をぼくは紙一重でかわす。
今だ！　ぼくはグーマの懐ろに躍り込んでヤツを胴斬りにした！
——ザシャア！　盛大な血しぶきがあがる。
床一面に広がった血の海の中に、赤いカギと聖なる水を見出した。それを拾い上げると、ぼくはさきほど入ってきた扉からまた外に出た。**（聖なる水入手、レベルが4に上がる。赤いカギ入手。チェックリストに記入）**　⇩268へ

403

ぼくは手にした盾を急いで頭上にふりかざした。次々と落下してくる岩が盾にガンガンぶちあたる。その余りの勢いに手がしびれてくる。

――だめだ、こんなものじゃ防ぎきれない！　そう思い、あわてて逃げようとする。だが、その判断はあまりにも遅すぎた。
たちまち無数の岩がぼくの体を直撃した。たまらずぼくは地面に転がる。その上から、岩は容赦なく降り注いだ……。

END

404

危険はなるべく避けるに越したことはない――そう考えたぼくは、やはりまっすぐに砂漠を行くことにした。
だが、その後何時間歩いても、砂漠は一向に尽きることはなかった。ギラギラと照りつける太陽の下、ぼくは疲れきった足をひきずるようにして歩いた。
だめだ、このままでは死んでしまう……水、水が欲しい……もう限界だ……。

⇩217へ

405

ぼくは剣を抜くのももどかしく大男にむかって突進した。酒くさい息が鼻先をかすめる。
だが酔ってはいても、ヤツの足どりはしっかりしたものだ。

大男の間合(まあ)いは、決してシロウトのそれではない。今はしがない飲んだくれでも、戦場ではこの男もひとかどの戦士だったに違いない。

バトルポイント　リンク（G）大男（4）で戦う。結果は？

●勝った……………⇩**178**へ　●負けた……………⇩**163**へ

406

ワナならワナでいいじゃないか。どうせ敵との戦いは避(さ)けられないのだから――。

ぼくはそう開き直った。

エレベーターはさらに下降していく。まさか、地獄の底まで降りていくわけでもあるまいが……。

やがて、エレベーターは完全に停止した。

⇩**286**へ

407

フワフワと空中を浮遊(ふゆう)するモアに、ぼくは必死にしがみついた。

やっとのことで地面に着地する。ふう、えらい目にあった――。（**LIFEエネルギー♡マイナス3**）

⇩**85**へ

408

スタルフォンは剣をふり上げると、いきなりぼくに向かって突進してきた。ヤツの剣が宙をきる。横に飛びすさったぼくはすかさず敵の胴を払う。ヤツはそれを左手の盾で受け止めた。なんの！　ぼくは剣を返して斜め下からヤツのあごを斬り上げる!!　グシャッ！　いやな音がしてヤツの頭蓋骨が砕け散る。その途端、スタルフォンはバラバラになって石の廊下に崩れ落ちた。

骨の残がいの中に、ハートの器がころがっている。ぼくは器を拾い上げ、ふところにねじこんだ。おそらく、スタルフォンが持っていたものなのだろう。**（ハートの器入手。ただし、今のレベルで持てるハートの器の上限を超える場合は取ることはできません）**

⇩390へ

409

何とか振りきり、ほっと一息つく。

走ることに精一杯でまったく気づかなかったが、通路は目の前でふた手に分岐している。左右ともに同じようなうす暗い石だたみの道だ。

さて、どちらに行こう?

●右の道を行く……⇩226へ

●左の道を行く……⇩362へ

410

道は次第に上りになっていき、ぼくは間もなく洞窟を抜け出ることができた。
はればれとした顔で、手にした青いつぼをながめる。
神秘の力を感じることができただけでも、危険な洞窟の旅を続けたかいがあったというものさ……。
洞窟の出口からは、砂漠の彼方にある町が遠望できた。ぼくは自信に満ちた足取りで町に向かって歩き始めた。やがて砂漠をぬける。

●ラウルの町に行く……⇩291へ
●ミドの町へ行く……⇩311へ
●サリアの町へ行く……⇩41へ

411

「馬面流棍術を、おまえの体にたっぷりと味わわせてやろう。奥義・破鋼壊石烈棍!!!!」
マズラは、こん棒をまるで手足のように操ってぼくに襲いかかる。
ぼくはジャンプして攻撃をかわした。こん棒は空を切ったものの、その風圧だけでもすさまじい。
ヤツの巨体は、強固なヨロイに防御されている。下から攻めても、容易に倒すことはできないだろう。

411 ●マズラの弱点は頭だ！　ぼくは剣を振りあげ、ヤツの眉間目がけて地を蹴った！

やはり、ここは頭に集中攻撃を加えるべきだ。なおかつ、ヤツのこん棒を絶対に食らってはならない。一撃でも食らったら……残るのは〝死〟の一文字……。

ぼくは、こん棒が届かないぎりぎりの所まで近づいた。マズラが、次の一撃をくり出したその瞬間、剣を逆手に持ちかえ眉間をめがけて突っこむ!!

狙いはズバリ当たった。頭をつらぬかれた馬頭の巨人は、ピクリとも動かない。やがてゆっくりと膝が折れ、その巨体はどうと崩れ落ちた。ぼくはさらに進む。

⇩33へ

412

扉を開けると、足元に水が流れていた。さほど幅は広くないが、流れが何本にも分岐している。その間をぬうように飛び石が並んでいた。

ぼくはその飛び石をジャンプしながら次々と渡った。

⇩277へ

413

炎をかわしつつ、アーネルに近づいた。ヤツは動き回らないから、炎さえ食らわなければ楽な相手だ。

剣を思いきり横なぐりに払う。アーネルは首を斬り落とされて絶命した。

ふう。びっくりしたな、もう!

斬り落とされた首から、ぽとりと何かが吐き出された。ハートの器だ！　ぼくは器を手に、また、通路を歩きはじめた。**（ハートの器入手。ただし、今のレベルで持てる上限を超えている場合は取ることができません）**

⇩164へ

414

うなりをあげて襲いかかってきたゲルドアームの牙を紙一重でかわす。ヤツの体は中空で伸びきった。

今だ！　その機をのがさず、ぼくは手にした剣をふりおろした。

やった――ぼくは肩で大きく息をついた。**（LIFEエネルギー♡プラス1）**

⇩380へ

415

「卑怯ですタイ、リンク！　わちと勝負するでごわす!!」

やだよ。おまえとやりあって勝てるはずがないじゃないか!!

フォッカーの抗議を無視し、ぼくは通路をめちゃくちゃに曲がって逃げに逃げた。

⇩222へ

416

ぼくは奈落の底へと落ち込んだ。したたかに腰を打って、しばらくは身動きすることもできない。ぼくは暗闇の中で痛みが去るのを待った。
闇に慣れた目であたりを見回してみる。どうやらここは、地底に広がる洞窟の中らしい。
それにしても、とんでもない所へ落ち込んだものだ。この洞窟には、何やら不吉な妖気が充満している……。

⇩56へ

417

「町はずれに住んでいる婆様のところへ行ってごらん。あの人はこの町いちばんの物知りだからね。きっとあんたの力になってくれるよ」
別れぎわ、彼女はそう教えてくれた。

●町はずれの老婆に会いにいく⇩320へ

●行かない……………………⇩142へ

418

「わしの言うことがわかるか？」
ぼくは首を振った。まったくちんぷんかんぷんだ。そのぼくを見て、老人は太い腹をゆすって笑った。

「旅の途中、お前はもっと知識を得る。そうすればわかるだろう。今、わしに言えるのはそれだけじゃ。よい旅をな。町の出口まで息子に送らせよう」

その老人の言葉を待っていたようにさきほどの男が姿を現わした。

⇩184へ

419

ぼくは今までのいきさつや道中の出来事をくわしく話した。もう何十年もこの町から出たことがないという老婆は、ぼくの話をとても喜んでくれた。

「最近は訪ねてくれる人もいなくなってとてもさびしい思いをしていたんだよ。……そうだ話を聞かせてくれたお礼だ。これを持っておゆき」

そう言って老婆がぼくの手に持たせてくれたのは、ハートの器だった。**（ハートの器入手。ただし今のレベルで持てるハートの器の上限を超える場合は取ることはできません）**

「ありがとう、お婆さん。元気でね」

ぼくは老婆に別れを告げて家を出た。

⇩31へ

420

果てしなく広がる砂漠を、ぼくはどこまでも歩いた。容赦なく照りつける太陽は、地表のあらゆるものをジリジリとこがしている。ぼくは立ちのぼる熱気の中であえぎ苦しんでいた。

ノドはカラカラに乾ききっている。水が欲しい――そう思った時だ。左手前方のはるか彼方に、ポツンと黒い点が見えた。

オアシスだろうか。行ってみるだけの価値はあるかもしれない。しかし、もし違っていたら……。

ノドの乾きはまだがまんできないことはない。このまま先に進むほうがよけいな体力を使わずにすむのは確かだが……。

●行く……………………⇩67へ　●行かない　…………………⇩324へ

421

ゴーリアに変身した男は、ブーメランを武器に襲いかかってくる。

バトルポイント　リンク（C）、ゴーリア（3）で戦う。結果は？

●勝った……………………⇩92へ　●負けた　…………………⇩235へ

420 ●ノドはカラカラに乾ききっている。立ちのぼる熱気の中で、ぼくはあえぎ苦しんだ。

422

「ついにここまでやって来たか、リンク」ぼくの頭上から声がした。見ると、目の前に祭壇らしきものがあり、その上に馬に乗った騎士がいる。

「おまえが求めている聖なる笛はここにある。ほしかったらオレを倒して奪い取ってみろ。だが、貴様にオレを倒すことができるかな。フフフ……」

レボナックだ！　空を飛ぶ鉄の馬に乗り、目にもとまらぬ速さで敵を攻めたてる青い騎士。神殿の守護神はこいつだったのか！

ヤツはこれ見よがしに笛をかざすと、それをヨロイの中にしまいこんだ。

レボナックを倒すには、まずその動きを止めるのが肝心だ。そのためには……先制攻撃をかけるしかない！　ぼくは一瞬のうちにそう判断したが……。

●呪文で攻撃する……………⇩300へ

●剣で戦う　……………………⇩340へ

423

やっぱり、この薬草のビンは取っておきたい。多少の危険は覚悟の上で、ぼくは足を止めすばやく光を放つ小びんを拾い上げた。**（薬草のビン入手。持っているハートの器をすべて満杯に）**ジャンプの呪文はあるか？

●ＹＥＳ……………⇩109へ

●ＮＯ　……………⇩25へ

「ええ、持っています」

ぼくは老婆(ろうば)の前に、洞窟(どうくつ)で手に入れた青いつぼを差し出した。

「このつぼはお前が魔法を授(さず)かるにふさわしい戦士たる証(あか)しだ。お前にジャンプの魔法を授けよう」**（ジャンプの魔法入手。チェックリストに記入）**

「ありがとう、お婆さん」

ぼくは心から礼を言った。さて、これからどうするか？

●家を出る……………⇩389へ

●老婆の孫娘(まご)にも話を聞こう…⇩58へ

425

ぼくは、自(みずか)らの邪(じゃ)の化身(けしん)に勝つことができなかった。ブラックリンクは、喜々(きき)とした表情でぼくを追いつめていく。まるで、猛獣が獲物(えもの)をじわりじわりと追いつめていく時のような凶暴(きょうぼう)さだ！

そして、ぼくはぼく自身によって全身を斬(き)り刻(きざ)まれる。黒い闘気(オーラ)が、勝ち誇(ほこ)ったように紫の部屋をうめつくした……。

END

426

ボトを避けながらジグザグに走っていたぼくは、視界の端に細い岩のすき間をとらえた。
しめた！　天の助け!!　ぼくは一目散にそのすき間に逃げこんだ。

⇩157へ

427

空中から攻撃してくるメグマットの鋭いツメに、ぼくは次第に追いつめられていった。
ヤツのこうらは鉄より固い――腹を狙わなければ……。
ぼくはつまづいたふりをして地面に横たわった。敵はこの時とばかり飛びかかってくる。
――ひっかかったぞ！
ねころんだ姿勢のまま、ヤツの腹に剣を突き立てる。
メグマットは絶叫をあげて息絶えた。生暖かい血が剣を伝わってぼくの手にしたたり落ちる。（LIFEエネルギー♡プラス3）
メグマットの死体をはねのけて立ち上がると、ぼくは再び荒涼とした草原を歩き出した。

⇩224へ

428

ゲールのくりだすこん棒を、右に左にかわしながら攻撃する。

ヤツは非常に気が短い。絶対の自信を持っているこん棒をことごとくかわされて頭にきたらしく、トカゲ野郎は突然、奇声をあげて突進してきた。
ヤツの体当たりがぼくを直撃する寸前、横に飛びながら剣を一閃させる。ゲールは首をはねられ、血しぶきをあげて倒れた。
ぼくは剣を収め、先を進む。のっけからこれだけ強いヤツが出現するようじゃ、この先どんな強敵が待ちかまえていることやら……。
まだまだ先は長いぞ！

⇩271へ

429

ミドロ沼はその名のごとく、藻類やコケの類がやたらと多い沼地だ。腐った藻類が悪臭を放ち、黒い水があたり一面によどんでいる。
ぼくは、あまりの悪臭に顔をしかめながら、泥水の中に入った。しばらく行くと、不意に前方から赤い触手がのびてきた。このタコ足は……オクタロックだな！
だが、奇妙なことにタコの足はおいでおいでをするかのようにゆらゆらと揺れている。戦う意志はないように見えるのだが……。

●しばらく様子を見る……⇩177へ
●剣で斬りつける……………⇩26へ

430

ヤツは手にした武器をふりかざして攻撃してきた。ぼくは剣を引き抜いて身構える。

カキン！

鋼鉄の刃と刃がぶつかりあい、火花が散る。

ぼくは必死だった。すべての気力を出しきって剣をふるう。

しかし、ヤツは思った以上の使い手だ。次第にぼくは追いつめられていった。だめだ、もうこれ以上は持ちこたえられない……。

――ガーン！

ヤツの一撃に、思わず剣をとり落とす。

次の瞬間、ぼくの目の前が真っ赤に染まった……。

END

431

行けども行けども、目の前に広がる風景は少しも変わることはない。

地平線の彼方まで、この草の海が続いている。風に揺れる草の他には、何ひとつとして動くものはない。灰色の空には、はばたく鳥の姿さえなかった。

吹き抜ける冷たい風に抗いながら、ぼくはひとり歩き続ける。

くじけるな、リンクよ――。
ぼくは自分に向かって言う、まだ旅は始まったばかりじゃないか……。

⇩75へ

432

ヤツのうろこは炎に照らされてきらきらと輝いている。剣をふるっても、おそらく歯が立たないだろう。
となれば、狙えるのは頭だ。それ以外には攻めようがない！
「ジャンプ！」
いちかばちか、勝負をかけた。魔法の力で高く跳び上がり、炎竜の頭へ急降下する!!
剣は深々とバルバジアの右眼をえぐった。
「ギエエ――ッ！」
炎竜は緑色の血をふき出しながら、長大な体を左右にくねらせる。
やったぞ！　やはり、ヤツの弱点は頭だった!!
それさえわかれば……。

⇩188へ

433

ぼくは、橋を歩いて渡りはじめた。

すると、不意に川が白く濁りはじめる。ハッとして足を止めると、何かが川の中から勢いよく飛び出してきた！
とっさに剣でそいつを払い落とす。橋の上にぴょんぴょんはねているそいつは、何と骨格だけしかない魚だった。
バゴバゴだ！　橋を渡る人間をねらい、下から襲いかかって川の中へひきずりこむどう猛な肉食魚。そのうえ、口から岩を吐いてくるというやっかいなヤツだ。
バゴバゴは、ぼくを目がけていっせいに飛びかかってきた！
「ひええ〜〜!!」
ぼくは頭をかかえて逃げ出す。
こんなのを相手にしていたら、いくら命があっても足りないよ！　一目散に橋を渡り、サリアの町へ向かった。**（LIFEエネルギー♡マイナス1）**

⇩201へ

434

石でできたその段差は、さいわいなことに、ところどころに手がかりとなるようなヒビ割れがあった。何とかよじのぼれそうだ。ぼくはそのヒビ割れに手と足をかけて、慎重に段差をのぼっていった。

⇩258へ

435

ぼくの攻撃はことごとくかわされた。マーゴは苦痛にあえぐいけにえをなぶるようにゆっくりと攻撃をくり返す。（LIFEエネルギー♡マイナス6）
駄目だ！　このままではやられる。ぼくは無我夢中で家を逃げ出した。一刻も早くこの町を出たほうがいいだろう……。

⇩57へ

436

「う、うわぁ～～～助けてくれぇ」
ぼくはみっともない悲鳴をあげ、その場を逃げだした。こんなおそろしい町はもうまっぴらだ。ぼくは町の出口に向って一目散に走り出した。

⇩182へ

437

星なき闇夜よりもなお暗い洞窟の中に、ぼうっとほのかな明かりがともった。その明かりは次第に大きくなっていき、ぼくの周囲から闇を追い払う。さすがは聖なるローソク！　これなら、楽に歩けそうだ。だが、油断は禁物。聖なる光のとどかない岩陰の暗がりには、まだどんな魔物がひそんでいることやら……。
聖なる光に照らされて、岩々が不気味な影をのばしている。その影をぬうように、さっ

きまでとは比べものにならない速さで進む。
道はやがて三方向にわかれた。

●右へ行く……⇩156へ
●左へ行く……⇩60へ
●真ん中の道を行く……⇩74へ

438

「リフレックス！」
呪文を唱え、思いきりシールドを前に突き出した。魔法の力のやどったシールドは、空気の壁をはじき返す。反射によって威力が増幅された空気の壁は、そっくりウイズザールの体に向かって走っていった。
「ぐわっ！」ヤツは自分の攻撃によってみずからの身を切り刻まれ、苦悶に身をよじる！

⇩282へ

439

とても戦って勝てる相手じゃない。ぼくはくるりと後ろを振り向き、一目散にかけ出した。
ここで運だめしをする。リンクのバトルポイント（J）が、

●6以上……………………⇩415へ
●5以下……………………⇩24へ

440

ふう。ぼくは大きくため息をつき、額(ひたい)の汗をぬぐう。
まっすぐ続く通路の奥へと進んでいくと、突き当たりにエレベーターがあった。ぼくが乗りこむと、ひとりでに下がっていく。
ずいぶんと便利なものがある神殿だ。いったい誰がこんな仕掛(しか)けをつくったのだろう？
やがてエレベータは止まった。**（タイムポイント・マイナス1）**

⇩137へ

441

通路は行き止まりだった。
ぼくは引き返そうとしたが、ふと思いとどまった。何か仕掛(しか)けがあるような気がする。こけむした石壁を調べてみると、手の形にくりぬかれている所がある。ためしに左手を当ててみると、壁は重々しい音を立てて開いた。
壁の中にはエレベーターがある。こんな手のこんだ仕掛けがあるということは……。出口も近いぞ!! ぼくは勇(いさ)んでエレベーターに乗りこみ、下に向かった。
着いたところは、大広間の前だった。

⇩17へ

442

聖なるローソクを持っていれば、見えない魔物を映し出すこともできるのだが……。あいにくと持っていない。ぼくは心の中の不安をむりやり打ち消し、通路を歩きはじめた。

だが、やはり魔物はそこにいたのだ。三歩歩くか歩かないかのうちに、ぼくの体をすさまじい衝撃が襲った！

「ぐっ！」

たまらずぼくは床に崩れ落ちた。体の力がみるみるうちに抜けていく。**（LIFEエネルギー♡マイナス6）**

⇩299へ

443

ぼくと女戦士との試合を、物かげからこっそりのぞく目があった。

「兄ちゃん、兄ちゃん」

手招きしている。まだ子どもだ。ぼくは剣をおさめるとその男の子のほうへ近寄っていった。

「町はずれにね、とっても物知りの爺ちゃんが住んでるよ」

それだけを言って子どもは走っていってしまった。

●町はずれの老人に会いにいく⇩203へ

●行かない……………………⇩35へ

444

ギルボックはその大きなひとつ目でじっとぼくを見すえている。
その目をにらみ返しているうちに、ぼくは異様(いよう)なめまいを感じ始めた。
おかしい⁉　頭がフラフラする……。
そうか、これがヤツの魔力なのか！　ぼくは目をおさえて二、三歩後ずさった。
その時、いつの間にか背後に接近していたゾーラが、口から光線(ビーム)を吐(は)いた！
「うわっ！」
ヤツの光線はわずかにそれて、ぼくの横にあった大木(たいぼく)をコナゴナにふっとばした。
こりゃたまらない――。
ぼくはあわててその場を逃げ出す。**（LIFEエネルギー♡マイナス2）**

⇩53へ

445

ぼくは本体めがけて突進した。首は単なるおとりにすぎない。ジャーマフェンサを倒すためには、その本体を叩(たた)かねば……。
見よ！　首なしの胴の上にあらわれたヤツの第二の頭を！　あれが本物の頭だ‼

バトルポイント　リンク（H）、ジャーマフェンサ（6）で戦う。結果は？

●勝った……………⇩132へ　●負けた……………⇩189へ

446

かなわぬまでも、せめてヤツに一矢は報いたい！

ぼくは死力をつくして剣を振るった。だけど、フォッカーの体には触れることすらできない。あまりの実力差に、絶望感すらわいてきた。

このままではやられる！　どうすれば……。

その時、ぼくはある考えが浮かんだ。呪文を使えば、多少なりとヤツにダメージを与えることができるかもしれない。

ぼくは、最後の手段に出た！

⇩111へ

447

亀裂にそってしばらく歩いてみることにした。

だが、どこまで行っても、その深淵は延々と続いている。幅は一向に狭まる様子はない。

ここまで来たら、あきらめるわけにはいかない。ぼくはなおも歩き続けた。

そのうち、亀裂がようやく小さくなり出した。ぼくはいっそう足を速める。

やがて、充分に渡れるほどに小さくなった。ぼくは何なくそれを飛び込すと、そのまままっすぐに草原を突き進んでいった。

⇩242へ

448

青い通路は、途中で何度も折れ曲がっていた。うねうねと続く道をどこまでも歩いていく。やがて通路は、固く閉ざされた扉によって行き止まりとなっていた。

例によって例のごとく、扉には大きな錠前がかかっている。とてもじゃないが、カギなしで突入できるようなヤワなつくりではない。

マジカルキーを持っているか？

●YES……………⇩42へ　●NO……………⇩279へ

449

いささか強引な手ではあるけど、ここはとにかく突っ走るのが最良の方法だ。ぼくは剣をぶんぶん振り回しながら、奇声をあげてモアの大群のまっただ中へ斬りこんでいった。

あまりの勢いに、モアはちりぢりになって逃げ回る。当たるを幸いに斬りまくり、ぼくは通路をかけ抜けた。後に残るは、おびただしいモアの死体ばかりだ。

⇩409へ

450

ボルバは、瞬間移動(テレポート)をくり返してぼくの前に立ちふさがり、執拗(しつよう)に衝撃波(ソニック・ブーム)を浴(あ)びせかけてくる。

速い！　地にはい、宙を飛んでヤツの攻撃をかわすが、全身に無数の傷を負(お)う。おまけに、こちらの攻撃はすべて読まれていた。剣をくり出すたびにテレポートされてしまう。

ぼくに勝ち目はないのか……？

そんなことはない！　必ずどこかに弱点があるはずだ!!

ぼくの頭に、ふとある作戦が思い浮かんだ。いちかばちか、やってみるしかない!!

ヤツが得意の衝撃波をくり出してくるのを待った。その間に、ジャンプの魔法をかけ、シールドを背中にくくりつける。

来た！　衝撃波だ!!

「リフレックス!!」

唱(とな)えると同時に、思い切り前に跳(と)んだ。そして、反転された衝撃波の進路に着地する。

ドゴォッ！

シールドに衝撃波がくだけ、耳をつんざくようなごう音がとどろく。だが、リフレックスの呪文(じゅもん)のおかげで、シールドは無事だった。

ぼくは、ヤツの衝撃波のエネルギーを背中に受け、一気に加速してボルバに突っこんで

450

450 ●ボルバは断末魔のあがきとともに滅び去った。ぼくは、気を失って倒れこむ姫をしっかりと抱きとめる。

いく。さすがにヤツも、この奇襲だけは思いつかなかったようだ。テレポートをかけるのが一瞬遅れた！
剣は深々とボルバののど元に突き立てられた。死の鳳凰は、悲鳴をあげてのけぞる。一発だけ衝撃波を放ったが、それは断末魔のあがきだった。ゆっくりと崩れ落ち、動かなくなる。
ヤツが完全にこと切れると、祭壇の上で硬直して凍ったように動かなくなっていたゼルダ姫は、ふっと気を失って倒れこんだ。ぼくは、魔界の呪縛から解き放たれた彼女の体をしっかりと抱きとめた。

（エピローグへ）

エピローグ

ぼくが姫を抱きとめると同時に、ガノンの思念(しねん)がまた頭の中に流れこんできた。

「おのれ、リンク……なぜだ。なぜ貴様(きさま)はこれほどまでにわしの邪魔(じゃま)をする!!」

「おまえを倒すことが、ぼくに課せられた宿命(しゅくめい)なのだ。ハイラルをおまえが狙(ねら)い続ける限り、何度でも戦ってやる！」

「フフフ……その言葉を忘れるな」

それっきり、ヤツの思念は消え、二度と現れることはなかった。

宿命……そう、ぼくとヤツとの戦いはおそらく、未来永劫(えいごう)続くだろう。光と闇(やみ)がこの世に存在する限り……。

気を失ったままの姫をその腕に抱いたぼくは、大神殿の外へ出た。

「ゼルダ！　ゼルダ！」

姫をゆさぶるが、いっこうに意識を取りもどさない。ぼくはそっと姫に顔を近づけた。

もうわかっただろ？　ぼくは彼女に優(やさ)しく口づけしたのさ！

姫は、ゆっくりと目を開いた。その瞳(ひとみ)は、森の湖水のように澄(す)みきっている。

「あ……わたしはいったいどうしたの？　何だか急に気を失って、それから……」

ぼくは彼女の肩をそっと抱きしめた。

「キミは悪い夢を見ていたんだ。でも、もう大丈夫。さあ、城に帰ろう」

北の城にもどると、国王は喜色満面でぼくたちを迎えた。

「おお！　リンク、よくぞ帰ってきた！　ところで、その娘が五代目のゼルダ姫か。なるほど、初代によく似ておる……」

姫はきょとんとしている。無理もない。自分が過去の時空に飛ばされたことなど、ぜんぜん知らないのだから……。

「その初代なのじゃが、ある事情があってここには出てこれない。許してくれ」

「知ってます。彼女はぼくたちの時代に永遠の眠りから覚めますよ」

今度は国王がきょとんとする番だった。

国王側近の魔術師の白魔術によって、ぼくと姫は時空を飛び、再び現在のハイラルに帰ってきた。

ハイラルは今や春たけなわだ。色とりどりの花が咲き乱れ、妖精が春を謳歌している。

そこには、もはや何者にもさえぎられることのない悠久の時の流れがあった。

HAPPY END

ハイラルマップ
パラパ砂漠の神殿
タンタリ砂漠
パラパ砂漠
北の城
ミドロ沼の
神殿
ラウルの町
ミドロ沼
ミドの町
大神殿
王家の墓
死の谷
サリアの町
デスマウンテン
王家の墓の
神殿

レベルチェック表

レベル	アイテム	ハートの器	ハート	マ　ジ　ッ　ク	チェック
レベル1		1	10	なし	
レベル2	青いつぼ	2	20	ジャンプ	
レベル3	赤いつぼ	4	40	ジャンプ ファイア リフレックス	
レベル4	聖なる水	6	60	ジャンプ ファイア リフレックス サンダー	

レベルと冒険の条件との対応表です。アイテムはレベルをアップさせるのに必要なアイテム。ハートの器とハートはそのレベルで持てる数の上限を、マジックはそのレベルでつかえるマジックの種類を表しています。

行動記録紙

バトルポイント表

A	B	C	D	E	F	G	H	I	J

ハートチェック

器	ハート				

魔法チェック

マジック	チェック
ジャンプ	
ファイア	
リフレックス	
サンダー	

タイムチェック

ミドロ沼の神殿					
王家の墓の神殿					

行動記録紙

アイテムリスト

ステップメモ

1 ▶

編集部から

好評シリーズ第14弾、「リンクの冒険／魔界からの逆襲」いかがでしたか？　今回はリンクが魔王ガノンの君臨する過去へ旅立ちます。あなたは見事、ガノンの企み（たくら）を阻止することができましたでしょうか。

当編集部では、今後とも、ファミコンゲームを素材にしたゲームブックを次々と発売していく予定です。

つきましては、すでに販売しておりますものを含め、当シリーズに対する御意見、御感想をお待ちしております。また、これからゲームブック化して欲しい素材、ゲームブックに対する希望などもお寄せいただければ、幸いです。

〈あて先〉東京都新宿区東五軒町3番28号（株）双葉社CTR「ファミコン冒険ゲームブックシリーズ」編集部リンク係

お寄せいただいた方々の中から、抽選でゲームブックの最新刊をプレゼントいたします。なお、お葉書、お手紙には、感想を書いていただいた本のタイトル、あなたの年齢も忘れずにお書きそえ下さい。

企画・構成／スタジオ・ハード　草野直樹
制作／漢那早美　高橋信之
文／草野直樹　上原尚子　黒トレス
作画／霧立　昇
©Nintendo 1987
ファミリーコンピュータ・ファミコンは任天堂の商標です。

リンクの冒険
魔界からの逆襲
双葉文庫　ファミコン冒険ゲームブックシリーズ　す 02-15

著　者　草野直樹　上原尚子
黒トレス
制　作　スタジオ・ハード
発行者　清　水　文　人
発行所　株式会社双葉社
〒162　東京都新宿区東五軒町3番28号
TEL　03-5261-4818(営業)
03-5261-4837(編集)
印　刷　三晃印刷株式会社
製　本　㈱若林製本工場

©ST・HARD 1987 Printed in Japan
(落丁・乱丁本はお取りかえいたします)
ISBN4-575-76030-7 C0193
定価・発行日はカバーに表示してあります

ストーリー

「憎い……わしは貴様が憎い！」闇の中から呪詛の声がひびく。同時にリンクとゼルダの足元から地面が消えた。

「リンクよ、ワシの時代へ来るがいい。必ずや、おまえを倒してくれる……」

白い空間を落ちていくリンクの耳に滅びたはずの、ガノンの声が響く。恨みを抱いて死んだヤツの怨念が、ふたりを過去へと引き寄せたのだ。

目の前に浮かぶゼルダの姿が、消えた！　そして……。

初代王の御世に跳んだリンクを、意外な敵が待ち受ける。

再び勝利を手にする日はいつか!?

カバーイラスト／霧立　昇
カバーデザイン／増田　武

ファミコン冒険ゲームブック

THE LEGEND OF ZELDA 2

リンクの冒険

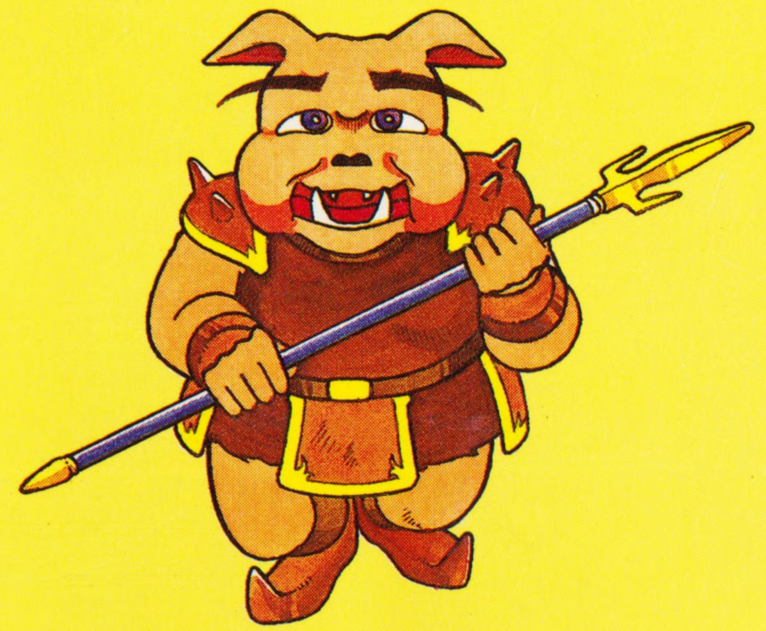
魔界からの逆襲

双葉文庫　ゲームブックシリーズ

GAME BOOK

リンクの冒険　魔界からの逆襲　スタジオ・ハード編　双葉文庫

す
02 15
P430



FUTABASHA FAMICOM GAME BOOK SERIES

リンクの冒険

魔界からの逆襲

ファミリーコンピュータ・ファミコンは任天堂の商標です。©Nintendo 1987

定価430円(本体417円)
ISBN4-575-76030-7　C0193　P430E　双葉文庫

FUTABASHA GAMEBOOK SERIES

- 桃太郎伝説
- 桃太郎電鉄
- 桃太郎電光石火
- 桃太郎伝説スペシャル
- スーパーマリオブラザーズ①②③
- プロ野球ファミリースタジアム①②③
- ファミスタ'90
- ウルティマⅠ・Ⅱ
- ヘラクレスの栄光Ⅰ・Ⅱ
- ファイナルファンタジーⅠ・Ⅱ
- ウィザードリィⅠ・Ⅱ・Ⅲ
- ゼルダの伝説
- リンクの冒険
- プロ野球？殺人事件！
- 貝獣物語
- マザー
- 魔界塔士Sa・Ga
- がんばれゴエモン外伝
- 悪魔城伝説
- 魔神英雄伝ワタル外伝
- ファイアーエムブレム
- MADARA(マダラ)
- じゃじゃ丸撃魔伝
- イースⅠ・Ⅱ
- 女神転生Ⅱ

リンクの冒険
定価430円
1987年7月19日　第1刷発行
1991年7月10日　新訂発行
著　者／草野直樹・上原尚子・黒トレス
制　作／スタジオハード
発行者／井上功夫
発行所／株式会社双葉社
〒162　東京都新宿区東五軒町3－28